

鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

1982年3月

七ヶ浜町教育委員会

鬼ノ神山貝塚・野山遺跡



原色図版 鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

序

七ヶ浜町は、仙台、塩釜、多賀城の各市に隣接し、太平洋、松島湾、塩釜湾と三方を海に囲まれた半島状の町です。全域が松島自然公園の区域となっております。また、海岸線の一部は特別名勝松島の指定をうけ、さながら公園都市の景観を呈しています。

町内には、史跡大木貝塚をはじめとして、大小種々の貝塚や遺跡が点在しておりますが、このことは、海にいだかれた豊かな七ヶ浜の自然環境が、古代からそこに住む人々にとってはかけがえのない好適地であったからといえよう。

町では、このように恵まれた自然環境との調和を図りながら、「太陽と緑の町づくり」を基本テーマとして、より住みよい町づくりを推進しておりますが、その一翼を担って計画されたのがニュータウンの造成であります。これは、仙台新港後背地としての地理的な条件に加え、わが町でも仙塩都市圏の拡大化とともに人口の増加が予測されているため、昭和63年度の完成目標に、面積約92ha・戸数2200戸・約8000人を対象として計画されているものです。

ニュータウンの造成にあたっては、計画区内にある遺跡の取扱いについて、事業主体である西武都市開発と協議した結果、下田堤遺跡等は緑地として保存することとし、鬼ノ神山貝塚、野山遺跡については調査を実施して記録保存することになり、本書刊行のはこびとなった次第です。

本書が、七ヶ浜町の歴史をよりご理解いただくために、少しでも役立てられますことを念じてやみません。また、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、ご協力とご尽力を賜わった三宅宗議、鶴田勝彦、桜井幸喜の各先生をはじめ関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

昭和57年3月

七ヶ浜町教育委員会

教育長 三浦 作兵衛

例　　言

1. 本書は、昭和 52・53 年度に発掘調査を行った宮城県宮城郡七ヶ浜町鬼ノ神山貝塚、ならびに野山遺跡の調査報告書である。本書をもって両年度調査の正式報告書とする。
2. 本書において、宮城県遺跡番号 20043 野山貝塚の名称は、所在地の地名に基づき鬼ノ神山貝塚と改称した。
3. 本書の作成に当たり、鬼ノ神山貝塚の図面整理・執筆・編集については鶴田勝彦、また野山遺跡の図面整理・執筆・編集については桜井幸喜が担当し、両名を三宅宗議が助けた。
4. 遺物の整理は、鶴田・桜井の指導の下に、宮城県古川工業高等学校郷土研究部員が行った。
5. 本書の作成にあたり、早稲田大学文学部講師企予浩昌氏より玉稿を頂き、また、次の各位より御指導と御助言を頂いた。記して謝意を表する。
宮城県多賀城調査研究所、東北歴史資料館、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県石巻女子高等学校教頭後藤勝彦、福井県小浜市教育委員会・大森宏、東北大学金属材料研究所。
6. 本書に使用した遺跡付近の空中写真は、西武都市開発株式会社の提供による。
7. 本書に記載した土色については、「新版標準土色帖」(小山・竹原 1976)によった。

目 次

序

例 言

I.	鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の調査に至る経過	1
II.	鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の位置と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	周辺の遺跡と歴史的環境	4
鬼ノ神山貝塚		
I.	調査の方法と経過	9
II.	発見された遺構と遺物	11
1.	貝塚と出土遺物	15
2.	焼窯群および上器集積地と出土遺物	21
3.	竪穴住居跡と出土遺物	34
4.	溝	37
5.	竪穴 遺構	38
6.	ピット群	39
7.	遺構以外からの出土遺物	41
III.	考 察	47
1.	土器の年代	47
2.	遺構の年代	49
3.	製塙土器について	52
4.	焼窯群の性格について	56
5.	出土鉄滓について	60
<特別寄稿> 鬼ノ神山貝塚出土の貝類		金子 浩昌 66
IV.	ま と め	70

野山遺跡 A 地区

I. 調査の方法と経過	73
1. 調査の方法	73
2. 調査の経過	73
II. 遺構の検出	76
1. 基本層位	76
2. 遺構	76
III. 遺物	92
1. 土器	92
2. 剥片	97
IV. 考察	99
1. 遺構	99
2. 遺物	100
3. 遺構の年代	101
野山遺跡 B 地区	102
I. 調査の概要	102
II. 試掘の結果	102
A地区・B地区のまとめ	104

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第34図	A 2区第4層出土土器	41
第2図	鬼ノ神山貝塚周辺の地形と 調査区	10	第35図	B 2区第4層出土土器	42
第3図	鬼ノ神山貝塚遺構配置図	11	第36図	C～E区出土上器	43
第4図	鬼ノ神山貝塚a-a', b-b', y-y'断面図	13	第37図	出土弥生土器	44
第5図	第1貝塚(c-c'断面図)	15	第38図	出土石器	44
第6図	第2貝塚出土土器	16	第39図	土器器・須恵器	45
第7図	第4貝塚および同貝塚わき 出土土器	17	第40図	縄文陶器	45
第8図	第5貝塚出土土器	18	第41図	出土鉄製品・羽口	46
第9図	焼躰部および土器集積地平面図	19	第42図	製塙土器推定復元例(4)	52
第10図	第1焼躰支群	21	第43図	宮城県における製塙土器出土 製塙土器出土分布図	53
第11図	第2焼躰支群	21	第44図	福井県岡津遺跡4号炉跡	58
第12図	第3焼躰支群	22	第45図	福井県吉見浜遺跡F-2炉	58
第13図	第4焼躰支群	22	第46図	鐵津の出土	60
第14図	第5焼躰支群	23	第47図	鐵津のTiO ₃ /T・Fe・造済成分/ T・Fe相関図	64
第15図	第5焼躰支群出土土器	23	第48図	調査区と周辺の地形	74
第16図	第6焼躰支群	24	第49図	遺構配置図・基本層位	77
第17図	第7焼躰支群	24	第50図	土坑配置図	79
第18図	第8焼躰支群	25	第51図	土坑1	80
第19図	第9焼躰支群	25	第52図	土坑2	81
第20図	第9焼躰支群わき出土土器	25	第53図	土坑3	82
第21図	第10焼躰支群	26	第54図	土坑4	83
第22図	第11燒躰支群	26	第55図	土坑5	84
第23図	m-m'断面図	27	第56図	土坑6	85
第24図	n-n'断面図	27	第57図	土坑7	86
第25図	土地集積地出土土器	29	第58図	土坑8	87
第26図	土器集積地出土土器Ⅰ	30	第59図	土坑9	88
第27図	土器集積地出土土器Ⅲ	31	第60図	縄文土器(鉢)	92
第28図	土器集積地出土土器Ⅳ	32	第61図	縄文土器(平底杯・台付小鉢)	93
第29図	豎穴住居跡	35	第62図	出土土器	94
第30図	豎穴住居跡出土土器	36	第63図	出土土器	95
第31図	溝 遺構	37	第64図	出土土器	96
第32図	豎穴 遺構	39	第65図	製塙土器底部	97
第33図	ピット群	40	第66図	刺 片	98
			第67図	野山遺跡B地区遺構配置図	103

表 目 次

第1表 口縁部資料による深鉢の分類	47	第8表 各貝塚における貝類の	
第2表 鬼ノ神山貝塚		出現率表	67
検出遺構の推定年代	51	第9表 ピット一覧	88
第3表 製塩炉の分類	57	第10表 上坑觀察表	99
第4表 鉄滓の出土地区と重量	60	第11表 土坑の使用痕跡による分類	100
第5表 鉄滓供試料の調査項目	61	第12表 各地区のピット数	100
第6表 鉄滓のX線回折	61	第13表 製塩土器(細片・底部)の	
第7表 鉄滓の化学分析結果	62	出土状況	101

図 版 目 次

図版 1 鬼ノ神山貝塚全景	自然遺物 I 貝類
図版 2 発掘区全景・貝塚	自然遺物 II 貝類
図版 3 焼跡群 I	鉄滓の鉱物顕微鏡組織 I
図版 4 焼跡群 II	鉄滓の鉱物顕微鏡組織 II
図版 5 焼跡群 III	野山遺跡全景
図版 6 垂穴住居他	野山遺跡発掘区全景
図版 7 遺物 I 繩文土器・弥生土器	図版 21 土坑 I
図版 8 遺物 II 繩文土器	図版 22 土坑 II
図版 9 遺物 III 繩文土器	図版 23 七坑III・その他
図版 10 遺物 IV 繩文土器・弥生土器	図版 24 遺物 I
図版 11 遺物 V 土師器・須恵器	図版 25 遺物 II
図版 12 遺物 VI 製塩土器(1)	図版 26 野山遺跡B地区
図版 13 遺物 VII 製塩土器(2)	
図版 14 遺物 VIII	
石器・縄輪陶器・鉄器・羽口・鉄滓	

I. 鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の調査に至る経過

宮城郡七ヶ浜町には、国史跡大木園貝塚をはじめ、貝塚を中心として、50余りの埋蔵文化財包蔵地があり、わが国の考古学・歴史学研究に大きく寄与している。阿川沼の北方に立地する鬼ノ神山貝塚・野山遺跡もその中の一つで、昭和47年の宮城県埋蔵文化財包蔵地調査の際、現多賀城第二中学校教頭の丹治英一氏によって発見されたものである。

ところが、七ヶ浜半島中央部から阿川沼にかけて、約92haの区域が町策定のニュータウン造成計画に入り、その区域内の下田堤遺跡や鬼ノ神山横穴古墳群とともに、上記2遺跡も消滅することになった。そこで、町教育委員会は、文化財保護の立場から、遺跡の消滅を最小限に止めるべく、事業主体である西武開発株式会社と協議の上、最終的に、鬼ノ神山貝塚と野山遺跡を事前調査して記録保存し、あとは緑地として保存することとした。

昭和52年度に入り、発掘調査を宮城県教育庁文化財保護課に要請したところ、同課より、発掘担当者として宮城県古川工業高等学校教諭三宅宗議氏の紹介があった。幸い、同氏の承諾が得られたので、昭和52年8月7日から両遺跡の調査を実施したのである。

調査の要項は下記の通りである。

調査要項

遺跡の名称	鬼ノ神山貝塚	野山遺跡
所在地	宮城県宮城郡七ヶ浜町葛蒲田字鬼ノ神山3-2	宮城県宮城郡七ヶ浜町葛蒲田字野山8-5
調査期間	(第1次)昭和52年8月7日～8月26日 (第2次)昭和53年3月25日～4月4日	昭和52年8月7日～8月25日(A地区) 昭和53年4月1日～4月2日(B地区)
調査主体者	宮城県宮城郡七ヶ浜町教育委員会(教育長・三浦作兵衛)	
調査担当者	三宅 宗議(宮城県古川工業高等学校教諭・日本考古学協会会員)	
調査員	鶴田 勝彦(宮城県古川工業高等学校教諭・日本科学史学会員) 桜井 幸喜(宮城県古川工業高等学校教員・古川市文化財保護指導員) 丹治 英一(多賀城市立多賀城第二中学校教頭・日本考古学協会会員) 佐藤 信行(日本考古学協会会員) 佐々木尚見(瀬峰町郷土史研究会員)	
調査補助員	門脇 裕・及川公陽・飯田幸弘・山村孝幸・大場利光・鈴木克哉・佐々木一志・米倉武浩(宮城県古川工業高等学校郷土研究部員)	
調査協力者	西武都市開発株式会社・赤間建設株式会社・株式会社鈴木工務店・鈴木安治	

市 塚 池

フ



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II. 鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

^{註1)} 鬼ノ神山貝塚、野山遺跡の所在する七ヶ浜半島は、海拔60m以下の低平な松島丘陵が東へ張り出し、仙台湾に突き出したものである。頂面は、長期にわたる開析を受けたため緩く起伏している。丘陵の地質は中新世の凝灰岩、砂岩、シルト岩で、水平に近い互層を示している。また、松島湾、仙台湾に面した菖蒲田浜、吉田浜等の海岸地帯は、海苔の養殖や海水浴場としてよく知られている。近年は、仙台火力発電所の建設など工業化が進み、さらには、仙塩地方のベットタウンとして都市化が進行している。

鬼ノ神山貝塚 菖蒲田浜鬼ノ神山にある。七ヶ浜町役場より南西約0.8kmの位置である。南方に阿川沼をのぞむ二つの小さな舌状台地に挟まれて、小さな入江があり、その奥の南西側斜面に遺跡が立地している。遺跡の中央部を東西に走って、馬道と称する土手があり、土手を挟んで北が高く、南側が約0.8mの段差で落ち込んでいる。北側は自然の緩斜面で雜木林になっており、南側は削平されて畠地として利用されていた。また、土手の西側には矩形の凹地があり、以前、灌漑用の溜池として使用されていたといわれている。貝塚の立地する谷状斜面は、標高が2~5mあり、南側の水田面との比高差は1~4mである。

野山遺跡 菖蒲田浜野山にある。七ヶ浜町役場より南西に約1.1km、鬼ノ神山貝塚から北西に向かって約1.3kmの位置である。南に広がる谷間の西斜面の比較的平坦な低地に立地しており、昭和46年頃まで畠地として利用されていた。この谷を挟んだ向い側の東斜面が野山B遺跡である。遺跡周辺の丘陵は松林におおわれており、南方には広い面積の水田が望まる。標高は約7~10mあり、かつて水田であった沢の部分と遺跡との比高差は約2mである。

註

1) 鬼ノ神山貝塚は、「宮城県遺跡地名表」(宮城県文化財調査報告書第46集)登載番号20043の野山貝塚を正確な字名を採って鬼ノ神山貝塚と改めたものである。野山遺跡は同20046である。

2) つぎの文献を参考にした。

富田芳郎 「地誌概説」「宮城県史」第5巻 1960 宮城県

西村嘉助 「松島湾の地形発達史」「地形図に読む歴史」第4集 1972 大明堂

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

鬼ノ神山貝塚、野山遺跡の立地する七ヶ浜半島は、日本三景のひとつである特別名勝松島の指定地域にある。この地域には、松島湾に面した丘陵の縁辺や島々に、縄文時代から平安時代にかけての貝塚が大小多数分布しており、全国的に見ても稀有な貝塚密集地帯を形成している。

七ヶ浜町内でも、今まで発見されている 50 遺跡の中に、実に 23 の貝塚が含まれている。これら、貝塚を中心とした遺跡を通して、鬼ノ神山貝塚、野山遺跡が形成された歴史的背景について以下に概観してみよう。便宜的に、原始時代(旧石器時代、縄文時代)、古代(弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代)という時代区分を用いることとする。

原始時代

旧石器時代 生産の基盤を狩猟、漁撈、採集においていた旧石器時代の遺跡は、現在のところ町内からは発見されていない。

縄文時代 旧石器時代と同様、生産的基盤を自然物の獲得においていた縄文時代の遺跡は、町内で 15 カ所確認されている。今から約 12,000~2,000 年前のこの時代は、考古学上、早期、前期、中期、後期、晚期と 5 期に区分されている。

町内最古の遺跡は吉田浜貝塚(遺跡登載番号 20008)で、沈線貝殻文を特徴とする土器(栗山 I 式)が出土しており、早期に位置づけられている。

前期、中期の遺跡としては、国史跡の大木團貝塚(同 20006)をはじめ、君ヶ岡貝塚(同 20004)、藤ヶ沢貝塚(同 20034)があり、現在調査中の左道貝塚(同 20029)もこの時期に推定されている。中でも、松島湾に突出する丘陵台地上に立地する大木團貝塚は、この貝塚密集地帯を代表する遺跡で、ここから出土した土器は大木式 1 式から 10 式まで 13 形式に分類され、東北地方南部における前・中期縄文土器編年の指標になっている。

後期、晚期の遺跡としては、林崎貝塚(同 20001)、二月田貝塚(同 20002)がよく知られており、その外に、阿賀沼貝塚(同 20007)、沢上團貝塚(同 20027)、峯團貝塚(同 20028)、諭訪神社前遺跡(同 20036)、笠山貝塚(同 20037)がある。これらの遺跡からは、大洞式の縄文土器とともに、製塩に使用されたと推定されている無文粗面尖底土器が出土しており注目される。

古代

弥生時代 弥生時代は、水稻栽培に生産基盤をおき、金属器を使用し始めた時代と理解されている。稻作農業のはじまりは、単に食生活を変えたばかりではなく、経済体制や社会のしくみを変化させ、共同体の中に階級の分化を生じさせた。この弥生文化は、紀元前後に、東日本に伝播し、定着するようになった。梯形圓貝塚(產國)出土の粗痕土器は当地方の稻作を

立証している。

七ヶ浜町では、水浜貝塚(同20021)、篠山貝塚(同20037)、小友遺跡(同20025)など8遺跡から、弥生土器片や蛤刃石斧が採集されている。これらの遺跡は、土師器、須恵器など奈良・平安時代の遺物をも包含するものが多く、また、製塙土器片も伴出している。

古墳時代 古墳時代になると、農耕による生産力が増大して、共同体間の階級分化が進んで支配者層が出現する。そして、彼らの墓としての古墳が築造されるようになる。後半になると、より一般的な横穴墓がつくられるようになったが、この岩盤を横にくり抜いた墓は、町内で6遺跡発見されている。楕形圓横穴古墳群(同20017・涅滅)、砂山古墳群(同20045)、鬼ノ神山横穴古墳群(同20044)等である。鬼ノ神山横穴古墳群は鬼ノ神山貝塚の南東350mの位置にある。

奈良・平安時代 奈良・平安時代になると、この地域も律令制度に基づく政治体制に組み込まれるようになり、多賀城が陸奥の国府として設置された。国家の直接的な支配を受けることになったのである。この時代の貝塚として、清水貝塚(同20031)、土浜貝塚(同20023)などがあるが、いずれも製塙土器を伴出している。しかし、住居跡を中心とした集落遺跡は、現在のところ未発見である。

さらに、丑谷部遺跡(同20026)、下田堤遺跡(同20042)から鉄滓が発見されている。年代は不明だが、製鉄遺跡の存在が推定される。この地域における生産活動を考える際、製塙遺跡とともに注目に値する。



鬼ノ神山貝塚

I. 調査の方法と経過

鬼ノ神山貝塚の発掘調査はグリッド方式を採用した。グリッドの設定は、予備調査で貝層が発見された土手の東辺を原点として、土手にはばらうように東西軸を定め、それに直交する南北軸を設定した。南北軸はN 13°Eである。これを基準に調査区全体に3m四方のグリッドを設定した。グリッドには、東西をアルファベット、南北をアラビア数字でグリッド名を付した。当初はA～F、1～4の24区を調査対象としたが、住居跡・溝・焼跡群などの遺構や貝層・遺物包含層がつづつと検出されたため、順次拡張し、最終的には約400m²を調査した。それに伴い調査期間も延長され、翌年第2次調査を実施した。

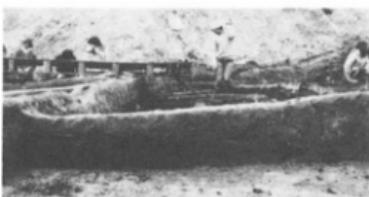
各遺構は遺り方測量法で実測して1%の図面を作成し、地形図は事業主体である西武都市開発K.K.作成の縮尺1/500地形図を用いた。また、貝層はブロックサンプリングを行った。

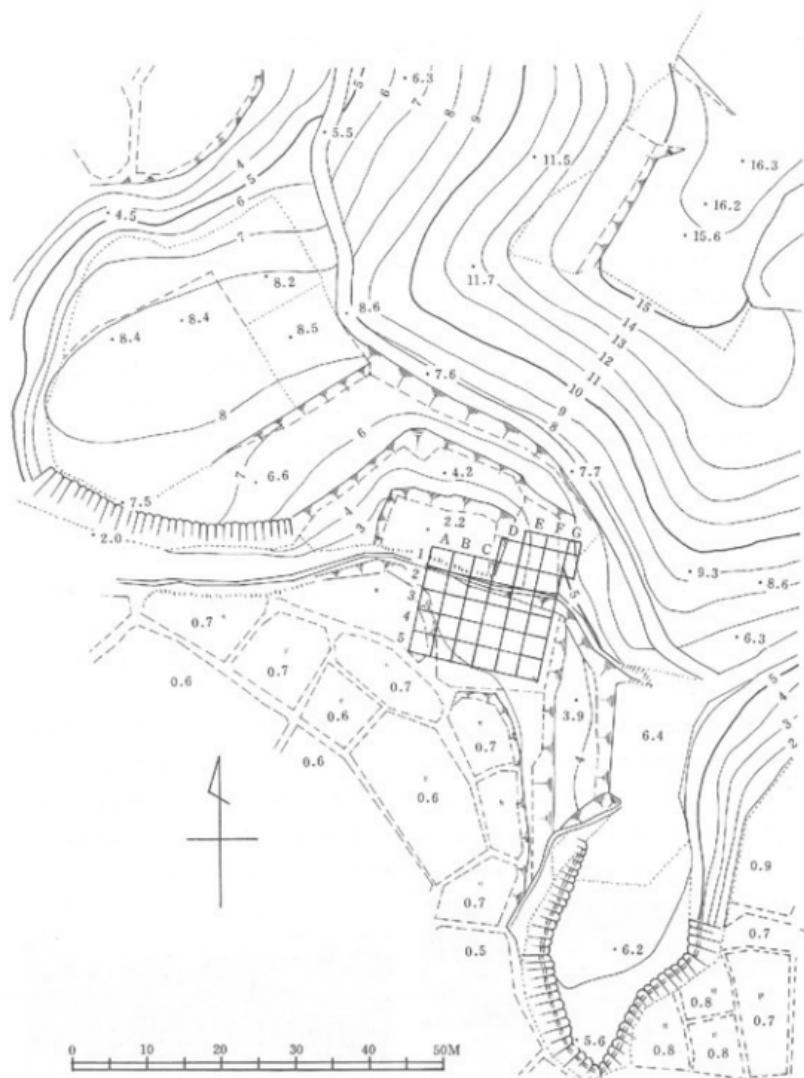
第1次調査 昭和52年8月7日から25日まで、期間の1/3が雨という悪条件の中で実施した。色々な条件から、A2～F2例・E1～E4例を第3層まで試掘をした。E3～E4はかなり削平されており、すぐ地山で遺構はなかった。E1に住居跡と推定されるものが検出されたので、A2～F2とD1、E1、F1にD0、E0、F0を追加した。さらに遺構の関係から、E、F、G、G0と拡張した。実発掘面積は約140～150m²である。その結果、貝塚3、堅穴住居跡1、焼跡群1が検出された。しかし、貝塚の掘り下げや焼跡群の範囲の確認等、未調査の部分が残った。29～30日、県教育庁文化財保護課技師丹羽茂氏と調査員とで、住居跡を中心に図面の補足修正をした。

第2次調査 未調査の貝塚・焼跡群を中心に、昭和53年3月25日～4月4日の11日間実施した。前回の精査未了18グリッドに、新たに15グリッドを加え、調査区域は33グリッド、391m²となった。その結果、新たに貝塚が2、焼跡支群が10検出されたほか、製塙土器片の集積地が発見された。その成果を公開するため、4月4日現地説明会を行ない、翌日調査を完了した。その後、5月10日まで補充調査を実施した。



発掘風景

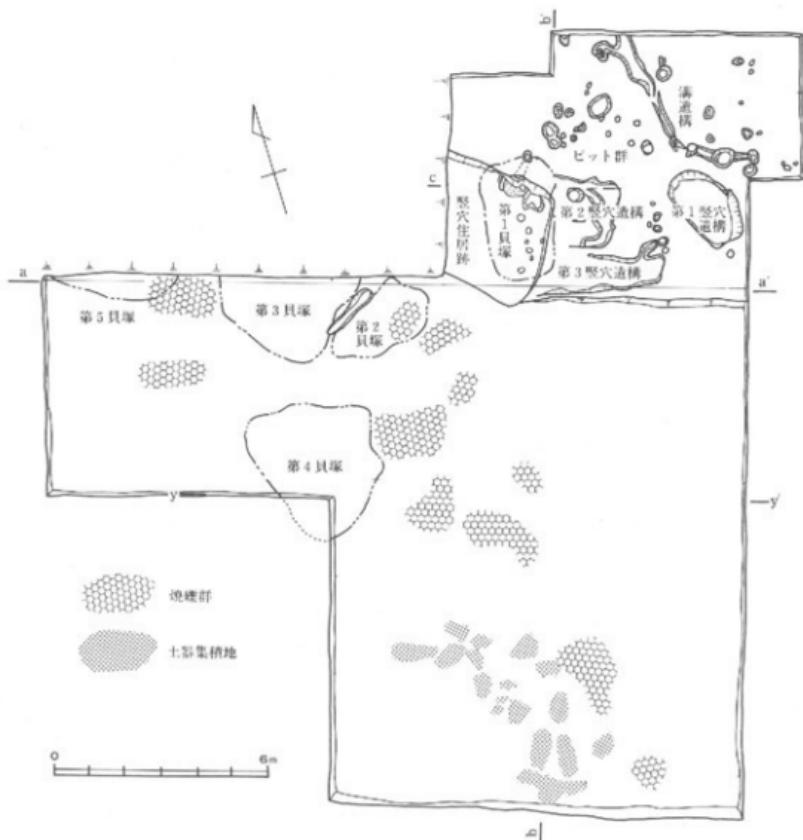




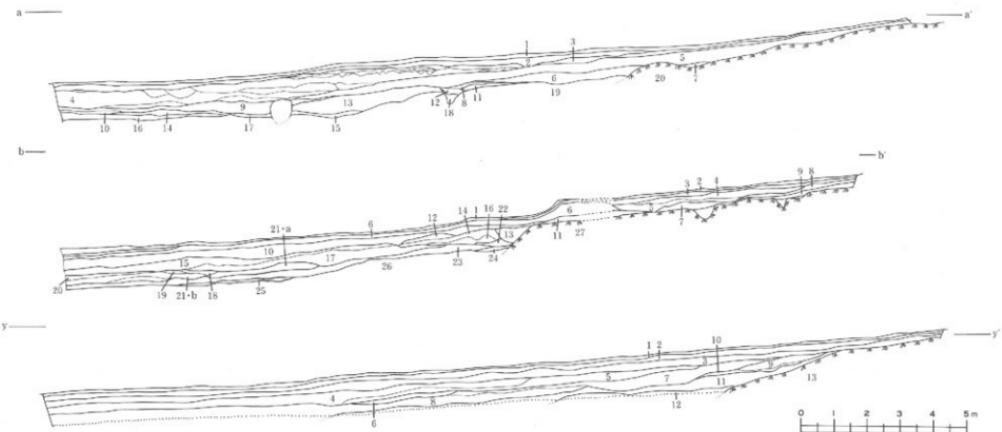
第2図 鬼ノ神山貝塚周辺の地形と調査区

II. 発見された遺構と遺物

今回の調査によって貝塚5、焼窯支群11、竪穴住居跡1軒のほか、多数のピット群、溝状遺構などの遺構が検出された。これらの遺構や包含層からは、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの上器類や石器のほか、貝類などの自然遺物が出土した。また、鉄生産にかかると推定される羽口、鉄滓も発見された。



第3図 鬼ノ神山貝塚遺構配置図



測定番号	地名	土色	土質	備考	測定番号	地名	土色	土質	備考
第4回	1	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト (表土)		第4回	11	7.5YR 5/2 (暗褐色)	泥炭・土質	薄 (第2段)
2	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質		12	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	
3	10YR 7/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入	13	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	
4	5	10YR 7/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	14	7.5YR 5/2 (暗褐色)	泥炭・土質	薄 (第3段)	
5	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入	15	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
6	6	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト質シルト		16	7.5YR 5/2 (暗褐色)	粘土質砂質	泥炭混入	
7	7.5YR 5/4 (暗褐色)	粘土質シルト			17	7.5YR 5/2 (暗褐色)	粘土質砂質	泥炭混入	
8	8	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト質シルト		18	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	泥炭混入
9	9	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト		19	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	泥炭混入
10	10	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト		20	10YR 5/4 (明褐色)	シルト	粘土質砂質	(堆山)

測定番号	地名	土色	土質	備考
第5回	1	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト (表土)	
2	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	黄・灰・白の斑入り	
3	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	赤色・白色・灰色の斑入り	
4	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	黄・灰・白の斑入り	
5	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	黄・灰・白の斑入り	
6	7.5YR 5/2 (暗褐色)	泥炭・土質	薄 (第4段)	
7	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	
8	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	粘りあり
9	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	黄・白・赤の斑入り。硬い
10	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘りあり	
11	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	赤色土質砂質入し	
12	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	砂	
13	30YR 5/4 (明褐色)	シルト	(堆山)	

測定番号	地名	土色	土質	備考	測定番号	地名	土色	土質	備考
第4回	1	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト (表土)		第4回	15	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	赤色土質砂質少しへん入
2	2	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	16	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
3	3	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	17	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
4	4	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	18	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
5	5	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	19	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
6	6	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	20	7.5YR 5/2 (暗褐色)	粘土質砂質	粘りあり	
7	7	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	21 a	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	
8	8	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	少しへん入	21 b	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
9	9	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	22	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
10	10	7.5YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	23	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	粘土質砂質	少しへん入
11	11	7.5YR 5/4 (暗褐色)	粘土質シルト	少しへん入	24	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	赤色土質砂質入しより多い	
12	12	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	少しへん入	25	7.5YR 5/2 (暗褐色)	粘土質砂質	粘土質砂質	
13	13	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト	少しへん入	26	7.5YR 5/2 (暗褐色)	シルト	砂	
14	14	10YR 5/4 (暗褐色)	シルト		27	10YR 5/4 (明褐色)	シルト	砂	(堆山)

第4回 鬼ノ神貝塚 a-a', b-b', y-y'断面図

1. 貝塚と出土遺跡

第1貝塚

D 1～E 1区にある。b-b'断面図(第4図), c-c'断面図(第5図)によつて、第1貝塚を含む層の堆積状態をみてみる。層序は地山、堅穴住居跡の堆積層(8, 7), 粘土質シルトの埋土層(6), 混土貝層(5), 混貝土層(4), そして堆積層(3, 2)の順に形成されているのがわかる。この5, 4の層が第1貝塚である。つまり、第1貝塚は堅穴住居廃棄後の盛り土を掘り込んでつくられており、住居跡より新しいものである。

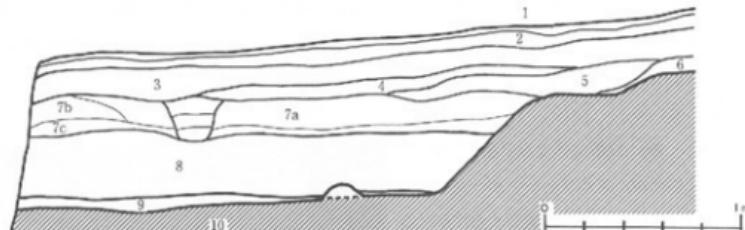
貝層は地山の傾斜にはば沿つて堆積している。平面形が約4.3m×3.0mの隅丸方形に貝が分布している。最大厚30cmの皿状の断面を呈する比較的小さな貝塚である。

〔遺物〕アサリが主体の貝塚で、ハマグリ、シオフキも含む。土師器細片2点とともに、大小多数の鉄滓が混入していた。

第2貝塚(図版2)

a-a'断面図(第4図)で明らかなように、地山はD区で急に落ち込む。A～C区では、暗褐色の砂質シルト層(17)の上に第2, 第3, 第5貝塚および焼跡群が検出された。

第2貝塚、第3貝塚は、第2貝塚直上の黒褐色シルト層(7)が第3貝塚へ続いていたため、発掘途中では同一貝塚と見なされたが、調査が進むと溝状遺構によって分かれていることが判明した。



層位番号	層 No.	土 色	土 質	備 考	層位番号	層 No.	土 色	土 質	備 考
第5区	1	褐 色(7.5YR 5/2)	(重 土)		第5区	7a	暗 褐 色(7.5YR 5/2)	粘土質シルト	7a～7cを成す
	2	褐 色(7.5YR 5/2)	シ ルト			7b	褐 色(7.5YR 5/2)	砂質シルト	
	3	深 褐 色(10YR 5/2)	シ ルト	硬い。貝の礫片混入。		7c	暗 褐 色(7.5YR 5/2)	砂質シルト	2.5YR 5/2の粘土がブロックで
	4	深 褐 色(7.5YR 5/2)	シ ルト	貝殻の混入。		8	暗 褐 色(7.5YR 5/2)	砂質シルト	均一でさわいな粘
	5	深 褐 色(7.5YR 5/2)	泥土 貝層	(第1貝塚)		9	褐(7.5YR 5/2)	シ ルト	粘り無
	6	褐 色(10YR 5/2)	シ ルト			10	暗 褐 色(7.5YR 5/2)	(礁 砂)	

第5図 第1貝塚(C-C'断面図)

標示番号	土器種類	出土位置区段	基層	部層	地層	厚さ(cm)	調査者	色	記号	備考
第6図	貝塚	2貝塚	縄文	縄文	25cm	口縁 頂大溝 深溝	基層	内面 外面 内面 外面	ヨコナミ 縦文 天板褐色	上部に白い色

第2貝塚の平面形は、3m×1.7m規模の卵形で、貝層は南西方向に傾斜して堆積している。最大厚16cmで、下方にやや厚い小さな貝塚である。

(遺物) 第2貝塚は、アサリを主体としてマガキ等を含む貝塚である。繩文土器片1点(第6図)が出土している。

第3貝塚(図版2)

発掘区内で最も大きく、しかも純貝層からなる貝塚である。貝層は、北側を溜池で、西側を溜池からの排水孔で切られていて、実際の規模は不明である。貝層は最も厚いところで30cmを超える。第3貝塚の貝層は、第2貝塚と同じように、南西方向に傾斜して堆積している。

(遺物) アサリを主体とした貝塚で、ハマグリ、シオフキを含むが、貝類以外の自然遺物は発見されなかった。貝層中より人工遺物は出土しなかったが、下層の黒色砂質シルト層(13)は、薄い炭化物層を含み、また、製塙土器片と考えられる赤色の粗製土器細片が出土した。

第4貝塚

y-y'断面図(第4図)で、第4貝塚を含む層の堆積状態をみよう。地山(XIII)はE区で急に落ち込み、B4~D4区では、砂層と砂質シルト層が堆積している。

第4貝塚は、黒色砂質シルト層(VIa, VIb)を浅く掘り込み、その中に形成され、その上に黒褐色の砂質シルト層(IVa, IVb)が堆積している。貝層は、平面形2.3m×1.7mの西洋梨形に分布している。最大厚さ10cmという全体的に浅い、規模の小さな混土貝層で、ほぼ水平に堆積している。

(遺物) 貝類はほとんど全てが破碎されていて、アサリとハマグリが主体である。焼跡とともに、繩文土器片が2点(第7図2,3)出土した。さらに、貝塚のわき(B2~B3区VIa層)から、深鉢(同4), 小鉢(同5)および、深鉢の胴部破片2点(同6,7), 底部破片1点(同8)が出土しましたので、合せて図示しておく。



第6図 第2貝塚出土土器



土器の出土状況(第4貝塚わき)



番号	土器名	出土地区 地区・施設	器種 形状	直 径 (cm)			形 状		色 製	出 取番号	備考
				表面	口部	底	腹	内面	外面		
第7回 2	第4貝塚	刷毛	—	—	—	—	0.4	ナ	縫文	灰青い 色	
3	第4貝塚	刷毛	—	—	—	—	0.4	ナ	縫文	灰青い 色	
4	ヨウー4 第4貝塚わき	刷毛	—	27.0	23.6	24.2	7.0	0.6	ヘラガキ	縫文 灰青色	7-1 部分的に磨い詰り又
5	ヨウー4 第4貝塚わき	小鉢	—	—	—	13.7	4.6	0.4	ヘラカツ	縫文 灰青色	7-4 明赤褐色
6	ヨウー4 第4貝塚わき	鉢 刷毛	—	—	—	—	0.5	ナ	縫文	灰青い 色	
7	ヨウー4 第4貝塚わき	刷毛	—	—	—	—	0.7	ヨコテグ	縫文 灰青い 色		
8	ヨウー4 第4貝塚わき	刷毛	—	—	—	—	0.5	ナ	縫文 灰青い 色	801-15 801-16	底深0.9 cm

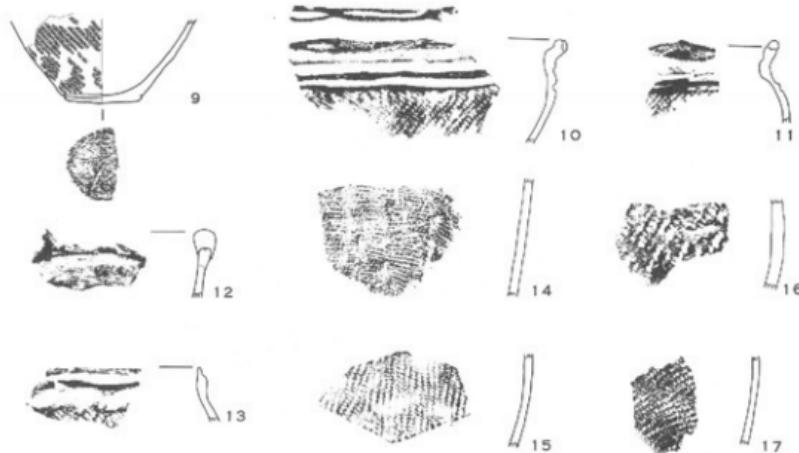
第7図 第4貝塚および同貝塚わき出土土器

第5貝塚

第2、第3貝塚と同じく、暗褐色の砂質シルト層(第4図a-a' 断面図17層)の上に検出された。溜池で切られていて、その規模・平面形とも不明である。

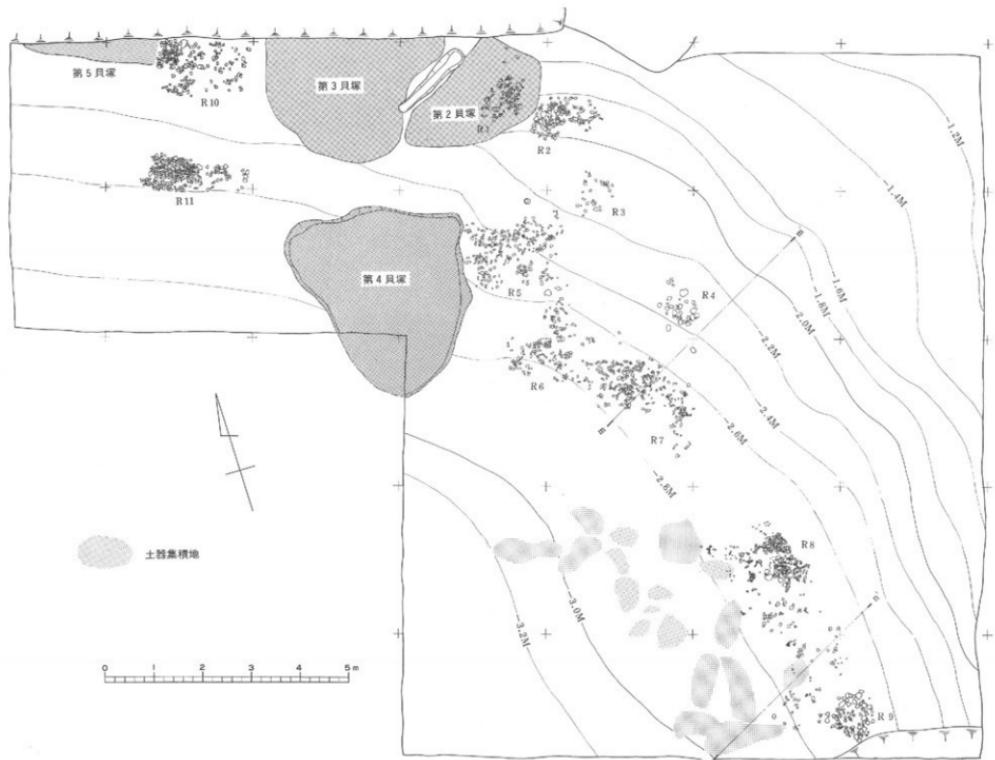
貝層の厚さは15cm前後で、第2、第3貝塚と同じように、南西方向に傾斜している。層序から、第2、第3貝塚とはほぼ同年代に形成されたものと推定される。

(遺物) 貝類は破碎されたものが多く保存状態は良くない。ハマグリを主体としているが、ついで、アサリが多い。貝類以外の自然遺物は発見されなかった。貝層から、縄文土器の破片が9点出土した(第8図)。小鉢の底部が1点と、鉢形土器の口縁部4点、同胴部破片が4点である。



標記番号	土器区分	出土位置	器種	部位	法寸	基盤(cm)	断面	内面	外面	色調	図版番号	備考
第8図	9	第5貝塚	小鉢	底	-	-	4.0	0.4	~2.5mm	黒文	黒褐色	
	10	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.4	ヘラ形	黒文	黒褐色	口縁部に小さな突起あり その間に凹線
	11	第5貝塚	小鉢	口縁部	-	-	-	0.3	ヘラ形	黒文	黒褐色	口縁部に弦線あり
	12	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.4	ココナツ	黒文	黒褐色	口縁部に花繩あり
	13	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.5	ヨコナメ	黒文	黒褐色	
	14	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.4	L字形	黒文	黒褐色	
	15	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.4	ヘラ形	黒文	黒褐色	
	16	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.6	ナゲ	黒文	黒褐色	
	17	第5貝塚	深鉢	口縁部	-	-	-	0.5	L字形	黒文	黒褐色	明赤褐色

第8図 第5貝塚出土土器



第9図 焼窯跡および土器集積地平面図

2. 焼礫群および土器集積地と出土遺物

鬼ノ神山貝塚から、大きさの異なる角礫・円礫が多数出土した。これらの礫はいずれも火熱を受けて赤色を呈していた。平面観察によって、それらの礫にあるまとまりが見られたので、焼礫群と呼ぶことにした。焼礫群は、汀線に沿う形で入江を包み込むように半環状に分布している。まとまり毎に11支群に分けることができる(第9図)。ここでは、発見された順に番号をつけ、便宜的にR1～R11と名づける。

また、D5区を中心にして、焼礫群の下方に、製塩土器と推定される赤色の土器片が、びっしりと固まつた状態で検出された。土器集積地と呼んでおく。

第1焼礫支群 R1(第10図、図版4上)

C2区第5層で確認された。はじめ、捨てられた礫か流れ込みの礫の集まりと思われたが、調査が進むにつれて、何かの目的で配石されたものと考えるに至った。第2貝塚の上を土で固め、その東端にかかる位置を数cm掘り込んで、4～5cm大の比較的粒ぞろいの礫を敷いている。角礫が主であるが、円礫も含まれている。礫はいずれも火熱を受けており、割れているものが多い。

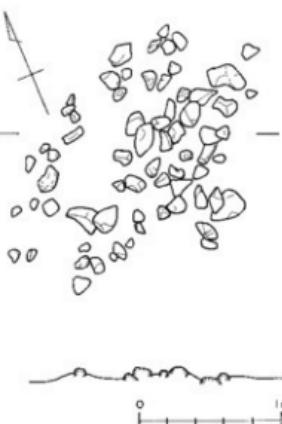
平面形が1.0m×0.6mの橿円形をした比較的小さなものである。

礫の間から、製塩土器の細かい破片が少量検出された。

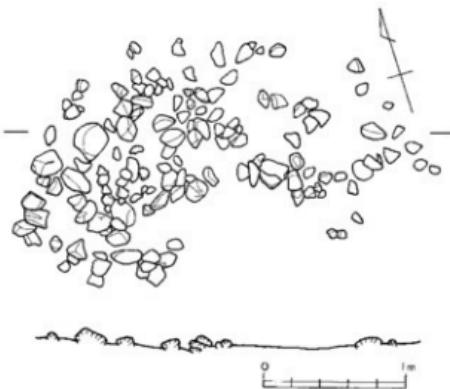
第2焼礫支群 R2(第11図、図版4中)

R1の底底となる貝層(第2貝塚)を取り除いたら、薄い黒色土層があらわされたが、それと同じ層のC2～D2区から、新たに礫群が検出された。礫は5～10cm大で、R1の礫同様赤く焼けており、割れ石が多い。

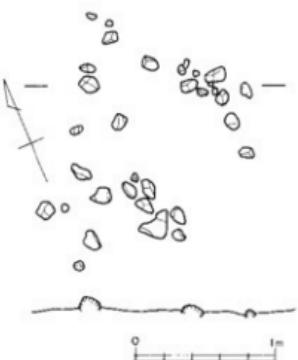
礫の間には、炭化物を含む黒色土が3



第10図 第1焼礫支群



第11図 第2焼礫支群



第12図 第3焼礫支群

~7 cmの厚さで堆積しており、その範囲は礫群の範囲よりやや広く 1.7 m²程度である。

その黒色土中に、赤色をした微細な土器片が散見された。

第3焼礫支群 R3(第12図)

R2の南側D2~D3区にあり、R2と同じ層で確認された。礫は5 cm前後の大きさで円礫が多い。礫の数は少なくまばらに並んでいた。礫はやはり赤く焼けている。

礫の間にはR2と同じように炭化物混りの黒色土が堆積しているが、微細な土器片がわずかに見られた以外、遺物は発見されていない。

第4焼礫支群 R4(第13図、図版4下)

D3区の南コーナーに位置しており、第4層で確認された。20 cm角の比較的大きな石も入っており、円礫の一部欠けたものを中心に、あるまとまりをもつ礫群である。礫はかなり強く火熱を受けたのか、脆くボロボロになったものもある。南方向にゆるやかに傾斜している。

礫の間には炭化物混りの黒色の砂質シルトが2~3 cmの厚さで堆積していた。縄文土器片が2点出土した。

第5焼礫支群 R5(第14図、図版5上)

C3区中央、第4層で確認され、第4貝塚と並ぶ状態で検出された。3~5 cm大の小さな礫が多数検出されたが、平面形は不整形であって、意識的に配置されたものか、移動してきたものかどうかは不明である。

礫の間から炭化物混りの黒色砂質シルト層が検出されたが、赤色の土器細片が混入していた。

C2区寄りから、深鉢形土器片が底部を上にした形で出土した。また、礫の間から、縄文土器片が3点出土した。

深鉢形土器の底部(第15図18)は、外側が火熱を受けて赤色化しており、一部剥離している。内面は火熱による焼けの痕跡が見られない。底面は荒くヘラ

第13図 第4焼礫支群



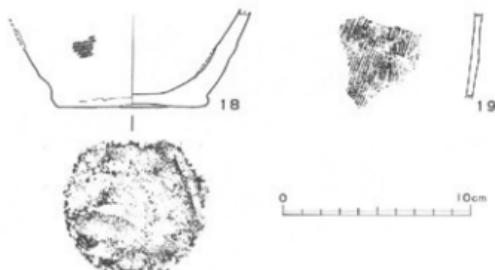
第14図 第5焼窯支群

ケズリされている。細かい繩文が施されている。胎土は細かい。

繩文土器片(同19)は鉢形土器の胴部と考えられる。撲糸文が施されている。胎土は石英混りであるが細かい。

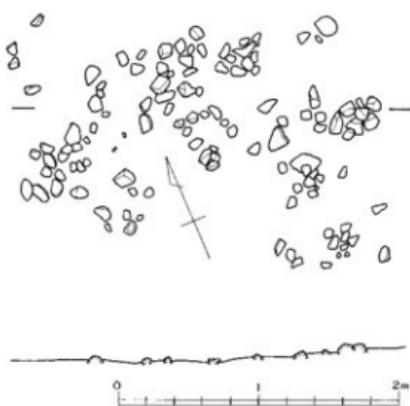
第6焼窯支群 R6(第16図)

C4区・D4区の境を中心として分布している。第4層で確認された。3~5 cmの小さな角礫が多い。すき間が多く、意図して配石されたのか、移動したものか判明しない。礫は火熱を受けて赤色を呈している。



編番号	上層区分	出土地区	基層	層位	正 面	幅(cm)	調 査	内 面	外 面	内 面	外 面	因数番号	備 考
第15図	18	C2-R5わき	底	基層	-	-	-	7.8	0.6	△(うさぎ) 繩文	に云い 黄褐色	8-4	火熱を受け、一部剥離
	19	R5		調査	-	-	-	0.2	ヨコア	無文	褐色		

第15図 第5焼窯支群出土土器



第16図 第6焼礫支群

礫の間から炭化物混りの黒色砂質シルト層が検出され、その中に赤色土器の細片が混入していた。それ以外の遺物は出土しなかった。

第7焼礫支群R7(第17図)

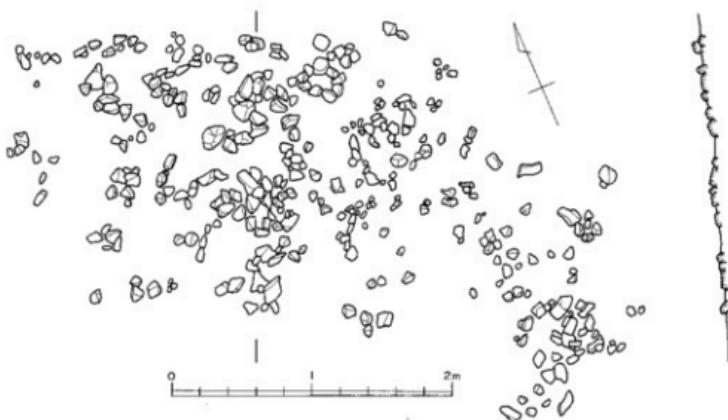
D4区第6層で確認された。R5, R6と同じく、黒色砂質シルト層を基底に大きな拡がりを示している。3~5cm大の小さな角礫が多い、同一平面上に検出された。

礫が密集している部分と、すき間の大きな部分とが見られる。何かの目的で配石されたものが流されたのか、無秩序の感じを与える。礫は赤く焼けている。

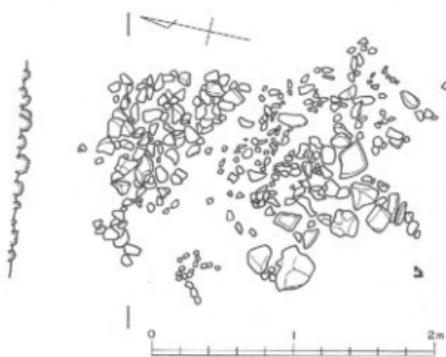
礫の間からは炭化物の薄い層とともに赤色の土器細片が検出された。その他の遺物は出土していない。

第8焼礫支群R8(第18図、図版5中)

E5区、第6層の赤さび色を呈した砂質シルトの下から、全体的に赤い礫群が検出された。



第17図 第7焼礫支群



第18図 第8焼殻支群

粘りのある黒色の砂質シルト層を基準としている。実測図からも明らかなように、東西1.2m、南北0.7mの長方形の平面形を有している。4~10cm大の角礫が比較的密にならんでいる。礫は焼けている。

R8の下方に、後述する土器集積地が見られ、赤色をした土器の薄い細片が数多く出土しており、中に縄文晩期と推定される土器片も含まれている。

第9焼殻支群R9(第19図、図版5下)

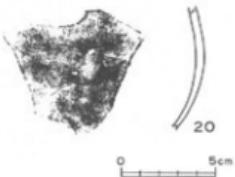
F6区下方で地山が急に落ち込むが、その上の黒色砂質シルト層でR9が検出された。10~18cmとR1~R8の礫よりも大きめの角礫、円礫が、意図的に敷かれた形で検出された。平面形は東西1.6m、南北2.0mの梢円形である。中央部の礫が少なく空隙があるが、石が抜けたものと思われる。

下方から落ち込み部にかけて、赤色に焼けた土器細片の集積地が発見されている。また、R9わきから小鉢形土器の破片(第20図)が出土した。内側に彎曲した胴部で、内面は斜めのナデ、外面はヨコのヘラミガキで滑らかに調整されている。

胎土は細かい。

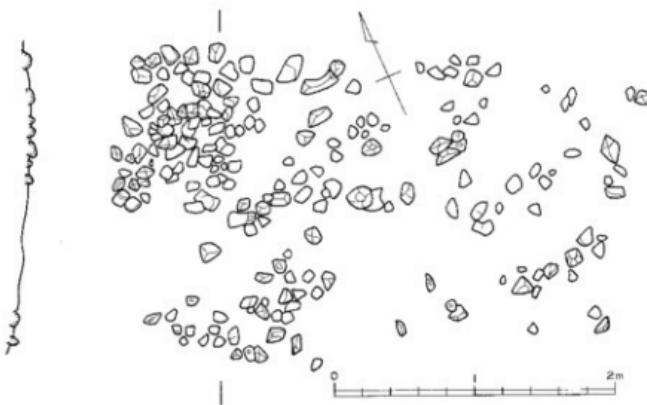


第19図 第9焼殻支群



番号	土器名	出土地区 地区-遺産	面種	部位	法 径 口径 最大径 底径	高 厚	内 面	外 面	内 面	外 面	調査番号	備 考
第20図	30	E6-R9わき	小鉢	腹	-	-	-	-	0.4	ナ デ ヘラミガキ	透 通	褐色 滑らか

第20図 第9焼殻支群わき出土土器



第21図 第10焼礫支群

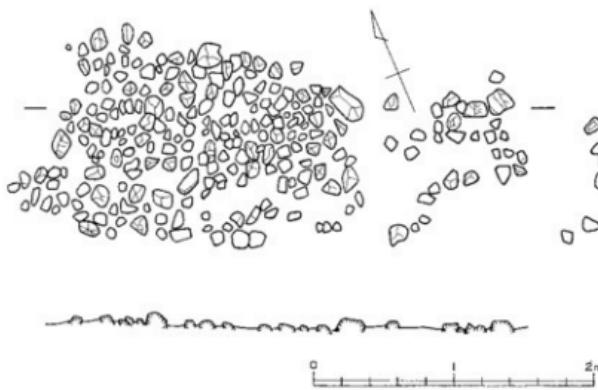
第10焼礫支群 R10(第21図)

A 2 区、第 5 目塚の下層から検出された礫群である。礫は全面よく焼けている。調査途中の不注意から東側の一帯の礫を取り除いてしまったが、実際は 3~10 cm 大の小さな礫が密に敷きつめられていた。平面形は 3.6 m × 2.0 m の長方形であろう。赤色の土器細片が見られた以外、遺物は出土しなかったが、縄文晩期の土器が出土した第 5 目塚の下層なので、縄文

晩期より新し
いものではな
いと考えられ
る。

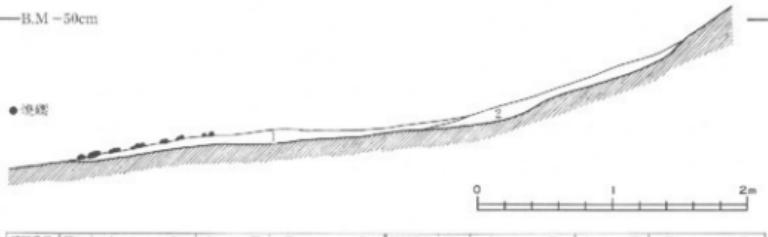
第11焼礫支 群 R11(第22図)

R 10 の南側
の A 2 区で検
出された。同
一平面上に 5
~10 cm 大の
小円礫および
角礫を密に敷



第22図 第11焼礫支群

—B.M.-50cm



第23図 m-m' 断面図

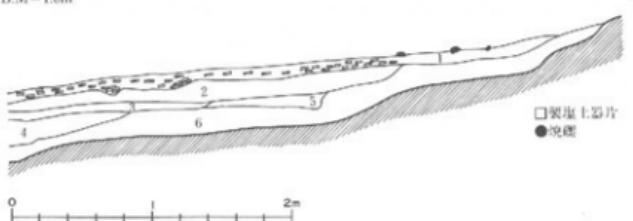
いた形で検出された。平面形は 2.2 m × 1.4 m の長方形である。全面が火熱を受けて焼けている。R10と同じ黒色砂質シルト層にあり、炭化物が混じり、赤色の土器細片も検出された。

以上、11の焼窯支群について述べてきたが、R1を除いて、これら焼窯群の下からは別の遺構が検出されなかった。第23図はR5を含む中央部の断面図であるが、第2貝塚の上にあるR1を除く他の焼窯群の下もこれに類似しているものと推定される。

土器集積地と出土遺物

R4～R9の焼窯群の下方に赤く焼けた土器片の集積地が検出された。集積地は、D5区を中心にしてC5区、E5区、E6区にまたがり、大小15ブロックを数えることができる。集積地のある層は、焼窯群の基盤となっている黒色砂質シルト層と同一(第24図)とみなすことができる。焼窯群と関連があると思われるが、これについては「III. 考察4」で述べたい。集積

—B.M.-1.0m



第24図 n-n' 断面図

標高番号	層番号	土色	土質	備考	標高番号	層番号	土色	土質	備考
244図	1	黒色(10YR 5/2)	粘土質細砂	灰、木炭、鉄な土器片含む	244図	4	灰褐色(10YR 5/2)	粘土	
	2	赤褐色(10YR 5/2)	粘土	遺物わずかに含む		5	褐灰色(10YR 5/2)	粘土質細砂	粘性あり
	3	褐色(10YR 5/2)	粘土質細砂	わずかに粘土あり		6	褐灰色(10YR 5/2)	粘土質細砂	粘性無い

層の厚さは、場所によって異なるが、8~15 cmある。

赤く焼けた土器片の他に、炭化物とともに、縄文土器破片が14点と、注口土器の注口部が1点出土した(35)。鉢形土器が多く、口唇部に突起のあるもの(22, 23, 24, 27)、頸部に平行沈線文のあるもの(31, 33)、や工字文のあるもの(22)などがある。詳しいことは後述するが、これらは、七ヶ浜町二月田貝塚出土の第11類土器に類似しており、大洞Aに併行するものと推定される。

赤く焼けた土器片は無文粗製土器で、尖底部が58点出土した。口縁部および胴部破片は、数え切れないほど出土したが、大部分は1 cm前後の細片である。岡化できたものを第26図、第27図に示す。

この尖底土器片は、④器厚が0.3~0.5 mmと薄手である。⑤文様がなく、表面が粗面状態のままであり、輪積痕が残っているものもある。⑥土器内面はヘラミガキ調整で平滑に仕上げられている。⑦二次的加熱を受けており、赤褐色や灰褐色を呈している。⑧剥離したり、壊れたりして細片化している、等の特徴をもっている。これに類似する尖底土器片は、七ヶ浜町二月田貝塚や鳴瀬町里浜貝塚、松島町西ノ浜貝塚等で出土しており、縄文晩期の製塙土器と認められている。

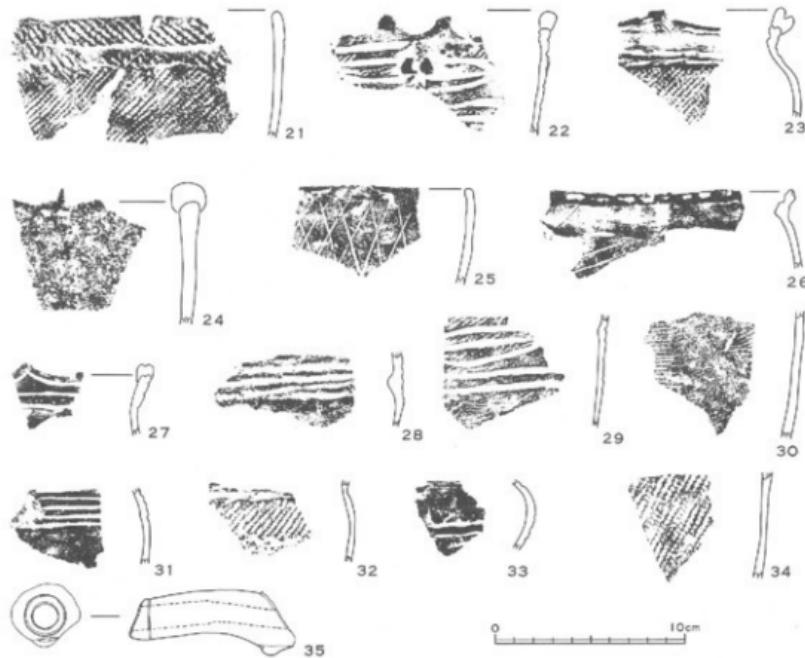
口縁部は内湾しながら外傾するものと、内湾しながら直立するものがある。この厚さで、中に濃縮された海水を入れてが熱したとき、よく割れないものだと思われる。底部を観察すると、底から胴部にかけて4~5 cmの部分が最も強く熱を受けているのがわかる。底部は、基本的には尖底だが、径1.2 cmぐらいの平底風のものもある。

また、平底の製塙土器と推定される底部片が4点出土している(第28図 T38~41)。T38、T39は、縄文晩期にしばしば見られるもので、底径が小さい。T40, 41は浅鉢形と思われ、製塙土器でないかも知れない。色調などは似ており、二次的加熱も受けているので、一般的な土器が転用されたのかも知れない。T41には、縄文が施文されている。

尚、出土製塙土器の形態分類は「III. 考察3」で述べるが、状況から見て、土器集積地は、製塙土器の捨て場とみていいだろう。

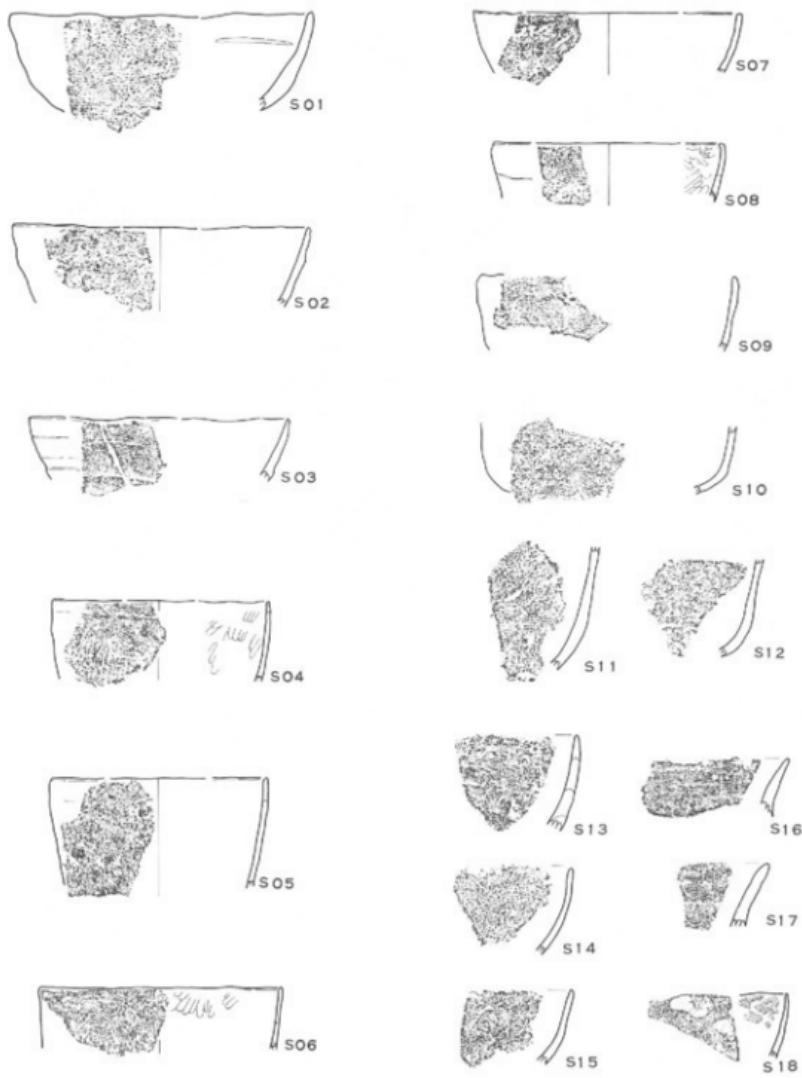
註

- 1) 塩釜女子高社会部「宮城県七ヶ浜町二月田貝塚第二次発掘調査報告」「貝輪7」
- 2) 同 上
- 3) 日本塩業体系編集委員会「日本塩業体系史料編・考古」1978 日本専門公社。
- 4) 同 上
- 5) 同 上



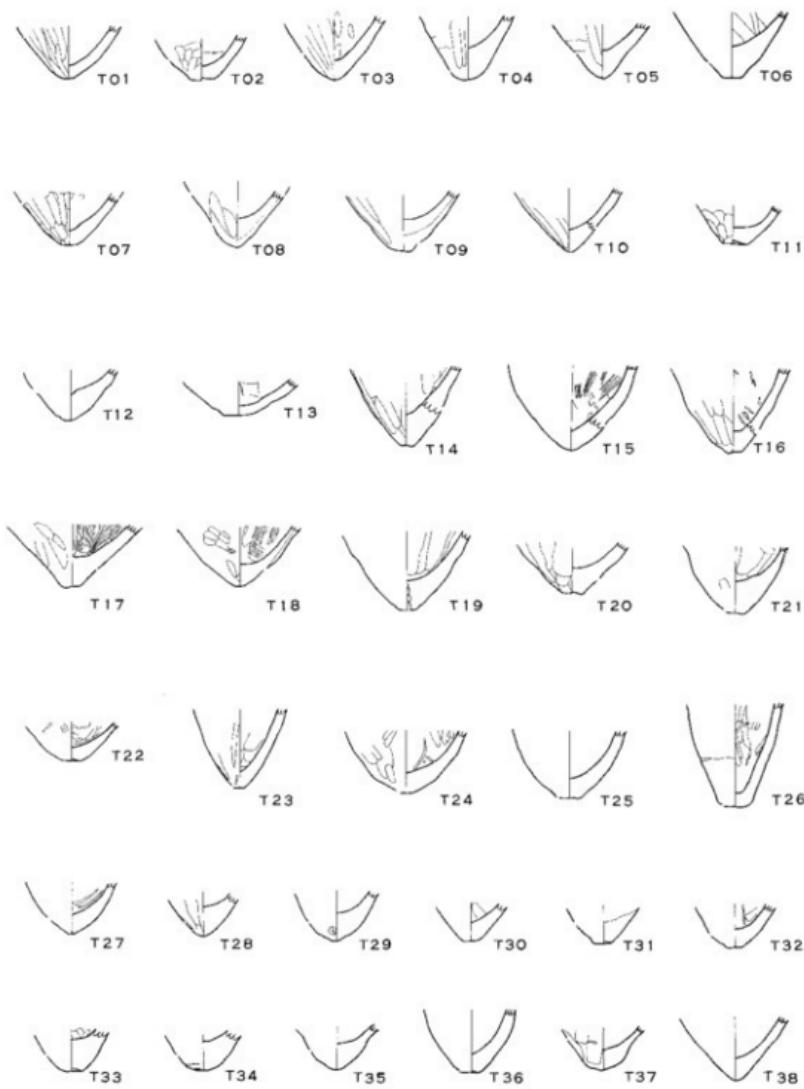
標識番号	土器名	出土地区	厚	深	部位	法 長	幅 高	口縁 底	底大 底	底詳	底厚	内 面	外 面	内 面	外 面	記載番号	備 考
第25回	21	土器集積地	薄	朴	口縫部	-	14.4	14.4	-	0.6	ヨコナダ	陶文	縦	赤	青褐色		
	22	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.6	ヨコナダ	陶文	縦	赤	青褐色		口縫部に日輪突起、並列工行文
	23	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.6	ヨコナダ	陶文	縦	赤	青褐色		口縫部にA型突起
	24	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.6	ナ	ア	縦	赤	青褐色		口縫部に突出
	25	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.6	ヨコナダ	陶文	縦	赤	青褐色		10 - 9
	26	土器集積地	B-2	小	朴	口縫部	-	13.4	14.6	-	0.4	ナ	ア	ヨコナダ	赤	0 - 10	口縫部に厚汎沿、筒状は右一部のみ
	27	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.4	ナ	ア	ヨコナダ	赤	青褐色		C型突起に山形突起、沈線文
	28	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.3	不	明	ヘリカット	黒	青	0 - 11	沈線文
	29	土器集積地	薄	朴	口縫部					0.6	ヨコナダ	陶文	縦	赤	青褐色		
	30	土器集積地	薄	朴	部					0.6	水	吸	陶	青	青褐色	10 - 7	
	31	土器集積地	薄	朴	倒壺肩					0.6	ヨコナダ	ヘリカット	横	赤	青褐色	10 - 12	平行沈線文
	32	土器集積地	薄	朴	倒壺肩					0.3	ヨコナダ	陶文	縦	赤	青褐色		
	33	土器集積地	薄	朴	倒壺肩					0.3	ナ	ア	ヨコナダ	縦	赤		平行沈線文
	34	土器集積地	*							0.4	ナ	ア	陶文	縦	赤		
	35	土器集積地	薄	口	注口部					0.4	-	-	黄	褐	青褐色	10 - 2	

第25回 土地集積地出土土器

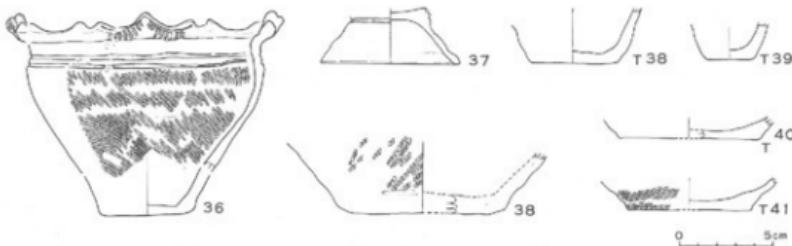


第26図 土器集積地出土土器II

0 5cm



第27図 土器集積地出土土器Ⅲ



番号	土器 名	出土地区 地区一層位	部 位	法 量(cm)	調 整	色 調	回収番号	備 考
				高さ 口径 底径 幅	内 面	外 面		
第28図	T 36	土器集積地	浅鉢	10.6 14.8 14.8 3.0	0.4 ハラミガキ	黒 文 朱紅色	8 - 3	斜板と斜み目あり。口唇に花譜
	T 37	上器集積地	高杯	7.4 6.2	ヘラミガキ	-	40	灰褐色 赤褐色
	T 38	土器集積地	深鉢	8.6 0.7	-	黒 文 刻印色	10 - 1	二次火熱受けている
	T 39	上器集積地	瓶	4.6 0.4	ヘラナダ	-	13 - 12	製造土器
	T 40	土器集積地	瓶	2.5 0.5	-	ヘラミガキ	13 - 14	製造土器
	T 41	土器集積地	浅鉢	7.5 0.5	ヘラミガキ	-	13 - 15	製造土器?
	T 42	土器集積地	浅鉢	6.6 0.4	-	赤褐色	13 - 15	製造土器?

第28図 土器集積地出土土器IV

番号	土器 名	出土地区 地区一層位	部 位	法 量(cm)	調 整	色 調	備 考
				高さ 口径 底径 幅	内 面	外 面	
第29図	S 01	土器集積地	口縁部	- 15.2 15.2 - 0.5	-	赤 黄 橙 + 淡赤	製造土器
	S 02	土器集積地	口縁部	- 15.9 15.9 - 0.4	-	赤 黄 橙 + 淡赤	製造土器
	S 03	土器集積地	口縁部	- 14.0 14.0 -	-	赤 黄 橙 + 淡赤	製造土器
	S 04	土器集積地	口縁部	- 11.7 11.7 - 0.2	ヘラミガキ	-	赤 黄 橙 + 淡赤
	S 05	土器集積地	口縁部	- 11.7 11.7 - 0.3	-	赤	製造土器
	S 06	土器集積地	口縁部	- 13.0 13.0 - 0.2	ヘラミガキ	-	赤
	S 07	土器集積地	口縁部	- 14.3 14.3 - 0.3	-	赤	製造土器
	S 08	土器集積地	口縁部	- 11.9 11.9 - 0.3	ヘラミガキ	ヘラナダ	赤
	S 09	土器集積地	口縁部	- 14.0 14.0 - 0.3	-	赤	製造土器
	S 10	土器集積地	瓶	- - - 0.4	-	赤	製造土器
	S 11	土器集積地	瓶	- - - 0.4 - 0.37	-	淡 黄 橙	製造土器
	S 12	土器集積地	瓶	- - - 0.4	-	淡 黄 橙	製造土器
	S 13	土器集積地	口縁部	- - - 0.4 - 0.38	-	淡 黄 橙 + 淡赤	製造土器
	S 14	土器集積地	口	- - - 0.3	-	赤	製造土器
	S 15	土器集積地	口縁部	- - - 0.3	-	赤	製造土器
	S 16	土器集積地	口縁部	- - - 0.4 - 0.36	-	赤	赤褐色 製造土器でない?
	S 17	土器集積地	口縁部	- - - 0.6	-	淡 黄 橙	製造土器
	S 18	土器集積地	口縁部	- 15.2 16.2 - 0.3	ヘラミガキ	- 明赤 橙	製造土器

標図 番号	土器番号	出土地区 地区 - 層位	部 位	法 （cm）		通 塵		色 調		備 考	
				深 底	口 深	最大径	底径	齿 面	内 面		
第27回	T 01	上器集積地	底 部	-	-	-	-	0.5 ナ	ア ヘラミガキ	白 色	褐色+白い褐色 製塗土器
	T 02	七器集積地	底 部	-	-	-	-	0.5	- ヘラミガキ	明赤褐色	明赤褐色 製塗土器
	T 03	上器集積地	底 部	-	-	-	-	0.5	- ヘラミガキ	褐色	褐色+白 物質+内面に白灰色の付着 製塗土器
	T 04	七器集積地	底 部	-	-	-	-	0.5	- ヘラミガキ	褐灰色	褐色+白 色 製塗土器
	T 05	上器集積地	底 部	-	-	-	-	0.6	- ヘラミガキ	褐灰色	褐色 製塗土器
	T 06	上器集積地	底 部	-	-	-	1.0	0.5	ヘラミガキ	棕 色	棕色 製塗土器
	T 07	土器集積地	底 部	-	-	-	0.5	アテ青銅 あり	ヘラミガキ、棕 色	棕色+白 色 製塗土器	
	T 08	上器集積地	底 部	-	-	-	0.5	- ヘラミガキ	灰褐色	棕色 製塗土器	
	T 09	土器集積地	底 部	-	-	0.8	0.6	- ヘラミガキ	灰褐色	棕色+白 色 製塗土器	
	T 10	土器集積地	底 部	-	-	-	0.4	- ヘラミガキ	棕 色	棕色+白 色 製塗土器	
	T 11	七器集積地	底 部	-	-	1.4	0.4	- ヘラミガキ	棕 色	棕色 製塗土器	
	T 12	土器集積地	底 部	-	-	-	0.5	(密 脈)	淡灰褐色	棕色 製塗土器	
	T 13	上器集積地	底 部	-	-	1.3	0.5	工具アリ あり	(密 脈) に 白い 色	白色 製塗土器	
	T 14	土器集積地	底 部	-	-	-	0.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	白色 製塗土器	
	T 15	上器集積地	底 部	-	-	-	0.6	ヘラミガキ 工具アリ あり	(密 脈) 棕 色	棕色+白 色 製塗土器	
	T 16	七器集積地	底 部	-	-	-	0.5	ヘラミガキ	明赤褐色	棕色 製塗土器	
	T 17	土器集積地	底 部	-	-	-	0.6	工具によ るテグ	ヘラミガキ	棕色 製塗土器	
	T 18	上器集積地	底 部	-	-	-	0.5	ヘラミガキ 工具アリ あり	ヘラミガキ に 白い 色	白色 剝離している。製塗土器	
	T 19	土器集積地	底 部	-	-	-	0.5	ヘラミガキ (密 脈)	棕 色	棕色+白 色 製塗土器	
	T 20	七器集積地	底 部	-	-	1.2	0.6	- ヘラミガキ	に 白い 色	白色 製塗土器	
	T 21	土器集積地	底 部	-	-	1.0	0.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	棕色+白 色 製塗土器	
	T 22	七器集積地	底 部	-	-	-	0.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	棕色+白 色 製塗土器	
	T 23	七器集積地	底 部	-	-	-	0.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	棕色+白 色 製塗土器	
	T 24	土器集積地	底 部	-	-	-	0.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	棕色 製塗土器	
	T 25	土器集積地	底 部	-	-	-	1.2	0.5	-	棕 色	棕色 製塗土器
	T 26	上器集積地	底 部	-	-	-	1.5	0.4	ヘラミガキ	棕 色	棕色+白 色 製塗土器
	T 27	上器集積地	底 部	-	-	-	0.5	ヘラミガキ 工具アリ あり	-	に 白い 色	白色 製塗土器
	T 28	七器集積地	底 部	-	-	-	0.6	- ヘラミガキ	棕 色	棕色 製塗土器	
	T 29	上器集積地	底 部	-	-	-	0.5	-	長 白い 色	白色 製塗土器	
	T 30	土器集積地	底 部	-	-	-	0.8	0.5	-	棕 色	棕色 製塗土器
	T 31	土器集積地	底 部	-	-	-	-	-	-	に 白い 色	白色 底部内面剥離。製塗土器
	T 32	上器集積地	底 部	-	-	-	0.5	アテ青銅 あり	- ヘラミガキ	棕 色	棕色 製塗土器
	T 33	土器集積地	底 部	-	-	-	0.7	ヘラミガキ	-	に 白い 色	白色 製塗土器
	T 34	七器集積地	底 部	-	-	-	0.7	-	-	棕 色	棕色 製塗土器
	T 35	七器集積地	底 部	-	-	-	0.4	-	-	に 白い 色	白色+白 色 製塗土器
	T 36	土器集積地	底 部	-	-	-	0.8	0.6	-	に 白い 色	白色 製塗土器
	T 37	土器集積地	底 部	-	-	-	0.3	- ヘラケズリ	-	に 白い 色	白色 製塗土器
	T 38	土器集積地	底 部	-	-	-	0.4	-	-	棕 色	浅灰褐色 製塗土器

3. 竪穴住居跡と出土遺物

(確認・董査) 遺跡の北西部につくられた水田用溜池の切断面(S-S'断面図)から、遺構が判明し、D1区の地山面で竪穴住居跡が確認された。住居跡の堆積土の上に盛り土をした整地面で、ピット群と第1貝塚が発見されたが、地山面で重複する遺構はなかった。

(平面形・規模) 竪穴住居跡の北西半分は溜池で切られて現存せず、南西・東南の壁と床面の一部は削平されて失なわれているが、南隅の痕跡が検出されたので、平面形を長方形と推定できる。現存規模3.3m×3.4mである。

(堆積土) 住居内の堆積は1層である。やや赤味のある褐色シルト層で、床面全面に堆積している。この上に攢乱された粘土質の盛り土がある。

(床面) 床面は地山の明黄褐色の凝灰岩を掘り、その上にぶい褐色のシルト質粘土を平らに貼って叩きしめている。床面は南西方向に緩く傾斜している。貼り床の粘土は5~10cmの厚さではほぼ全面に及ぶが、東南側は削平されたためか、その痕跡が薄れて地山との区別がつけにくく。

(壁) 地山を壁にしている。残存する壁高は最高32cmで、床面からの立ち上りは、立ち上り角度約130°であり、ゆるやかに外傾している。

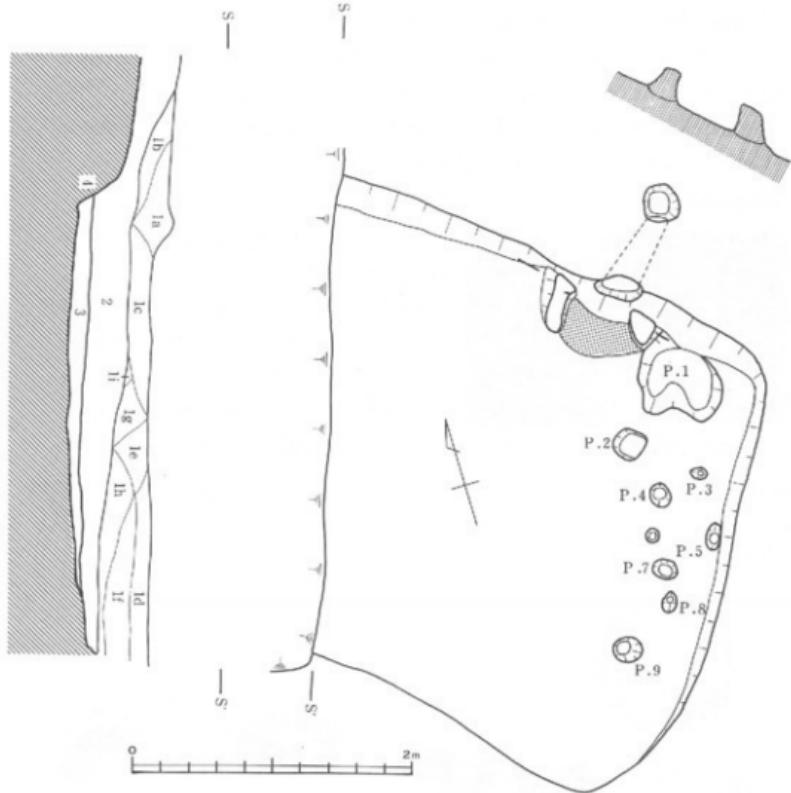
(周溝) なし

(柱穴・貯藏穴) 貼り床面から9個のピットが検出された(第29図)。規模、深さ、配置等に規則性がなく、遺構に伴う柱穴とは考えられなかった。また、カマドわきのP.1は大きいが、深さが10cmと浅いので、貯藏穴とは認められなかった。性格は不明。他のピットも性格不明である。

(カマド) 住居北東壁の東寄りに付設されている。本体(焼き口部・燃焼部)と煙道部から成る。本体は、天井部が全て失なわれており、袖(側壁)が残るだけである。燃焼部内の堆積土に天井部崩落土が観察された。袖は内側に傾いており、立ち上り角は、内面84~90°、外面70~80°である。袖の保存状態は余り良くない。燃焼部内の最大幅は約50cmで、奥行は約40cmである。底面は熱を受けて赤変し硬い。燃焼部奥壁からトンネル状に地山が掘り抜かれ、住居外に煙道部が延びている。長さが約70cm、幅が平均25cmの規模である。先端には直径約25cm、深さ30cmの煙出し穴があった。



カマド



ピット番号	大きさ (mm)	深さ	掘り方	底色	目	ピット番号	大きさ (mm)	深さ	掘り方	底色	目	
P.1	60 × 40	10.0	横	緑	(10YR 5/2)	無	P.5	30	T.0	地	(DWY 5/0)	無
P.2	20 × 32	5.0	横	緑	(10YR 5/2)	無	P.7	10 × 10	T.0	緑	(10YR 5/2)	無
P.3	10 × 6	7.0	横	緑	(10YR 5/2)	無	P.8	12 × 7	8.0	緑	(10YR 5/2)	無
P.4	16	6.5	横	緑	(10YR 5/2)	無	P.9	22 × 16	T.5	緑	(10YR 5/2)	無
P.5	18 × 10	3.0	横	緑	(10YR 5/2)	無						

種別	形	土	色	土質	面	考	標本番号	種	形	土	色	土質	面	考
第29回	1a	球	褐(約10%黄)	砂質シルト	1a-1	椎根原	第29回	1a	球	褐	褐(5.5%黄)	粘土質シルト	硬	い
	1b	扁球	褐(5.5%黄)	砂質シルト	2.5%Yの植生がブロックで	1b	球	褐	褐(5.5%黄)	粘土質シルト				
1c	圓	褐(5.5%黄)	シ	シルト				1c	球	褐	褐(5.5%黄)	シルト		
	1d	圓	褐(5.5%黄)	シ	シルト	且少し潤し		1d	球	褐	褐(5.5%黄)	砂質シルト		
1e	圓	褐(5.5%黄)	シ	シルト	且少し潤し			1e	球	褐	褐(5.5%黄)	シルト	且の吸水	
	1f	球	褐(5.5%黄)	砂質シルト	且少し潤し			1f	球	褐	褐(5.5%黄)	シルト	(D)	

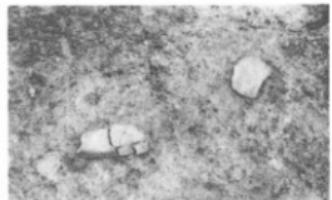
第29回 壊穴住居跡

(出土遺物) 住居に伴うものとして貼り床面、カマドわき出土のものがある。

須恵器壺(第30図1)：体部から口縁部にかけて外傾する。底部切り離しがヘラ切り技法で再調整が加えられている。手持ちヘラケズリが施されており、平底である。

土師器壺(同6)：頸部破片で口縁部がくの字に外反している。内外面ともヨコナデ調整しているが、肩部に鎌状工具による押圧紋が施されている。

堆積土中出土遺物



須恵器壺(同2)：体部破片で外面にタタキ目があり、内面はロクロ仕上げされている。

土師器壺(同3～5)：小形壺(3)は口縁部がくの字に外反し、頸部に段はない。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され。体部外面はヘラナデ、ヘラミガキが施されている。(4)は体部破片で内面がナデ、

外面は刷毛目調整され、上端にミガキが施されている。(5)は壺かどうか不明である。



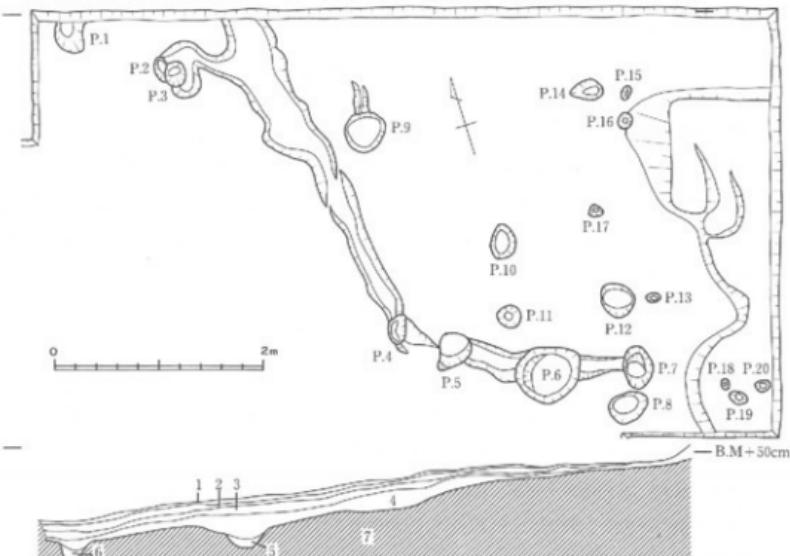
編 號 30 圖 1	土 種 類	出 土 地 區 一 般 位	種 別	器 種	形 狀	規 格	量 (cm)	調 整 方 法	特 徴	色 調	同 號 名	備 考
1	燒 灰 土	須磨西	II	罐	圓底	3.5	14.7	14.7	8.2	0.4	ロクロ	ロクロ 褐灰色 褐色
2	D1	堆 積 土	須磨部	壺	—	—	—	—	1.6	ロクロ	タタキ目	青灰色 褐色
3	D1	堆 積 土	上層部	小口壺	圓底	10.0	17.0	17.0	—	0.8	ヨコナデ ヘラナデ ヘラミガキ	褐色 褐色
4	D1	堆 積 土	土師器	壺	—	—	18.0	—	0.8	ナデ	タタキ目	褐色 褐色
5	達 出 し 穴	土 築 器	壺	—	—	—	—	0.2	ヘラナデ	褐色 褐色	褐色	褐色
6	カ マ ド わ き 土	土 築 器	壺	—	—	—	—	0.6	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	褐色

第30図 整穴住居跡出土土器

4. 溝（第31図）

〔確認・重複〕 E区・F0区の地山面で確認された。P.4～P.7の4個のピットで切られてい
るが、溝に付随したものか不明である。

〔形態・規模〕 削平されているのではっきりしないが、現存最大幅は上端40cm、下端30cm、
深さ22cmで「U」字状をしている。なお、溝は、調査区外の北側上方に延びている。



標図番号	地名	土色	土質	備考	標図番号	地名	土色	土質	備考
第31図	1	褐色(7.5 YR 5/4)	シルト	表土	第31図	5	褐色(10 YR 5/3)	シルト	
	2	褐色(7.5 YR 5/4)	シルト			6	褐色(10 YR 5/3)	シルト	
	3	褐色(7.5 YR 5/4)	シルト	黒・赤・白の斑入り		7	黄褐色(7.5 YR 5/4)		地山
	4	黄褐色(10 YR 5/4)	シルト	黒・灰の斑入り					

ピット 番号	地名	大きさ (mm)	底さ (mm)	掘り方 式	柱種	性 質	柱底跡色調	備 考	ピット 番号	地名	大きさ (mm)	底さ (mm)	掘り方 式	柱種	性 質	柱底跡色調	備 考
P.1	E	30×25	16.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.11	F0	34×30	26.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	
P.2	E	18×13	9.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.12	F0	32	16.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	柱の根入り
P.3	E	22	14.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.13	G	14×10	3.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	さらさらしている
P.4	F0	30×18	1.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.14	F	27×20	3.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	ぬぐって小さい
P.5	F0	30	18.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.15	G	15×10	4.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	
P.6	F0	60×58	12.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.16	F+G	16	4.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	さらさらしている
P.7	G0	40×30	22.3	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	○ 黒・白・黄の斑入り	P.17	F0	15×11	6.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	盛りあり
P.8	F0	30	10.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.18	C	12×10	6.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	小さい
P.9	F0	40	6.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.19	G0	19×12	3.0	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	方
P.10	F0	35×25	6.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)		P.20	G0	14×10	4.5	削り	柱	柱	褐色(7.5 YR 5/2)	方の盛り入り 盛りあり

第31図 溝 遺構

〔堆積土〕 溝内の堆積土は1層だけで、第31図・第5層の、さらさらした褐色シルト層である。同図のピット内の堆積土と同じである。

〔ピット群〕 溝上および溝に囲まれた区域内で、20個のピットが検出された。いずれも地山面で確認された。ピットの形は長円形に近いものが多いが、不整形のものも含まれている。大きさが10~60cm、深さが3~26cmとかなりばらばらであった。柱穴が検出されたのは2個(P.7, P.11)であった。

〔遺物〕 溝内およびピット内からの出土遺物はなかった。

5. 穴 遺構 (第32図、図版6)

第1号豊穴遺構

〔確認・重複〕 F1区の地山面で確認された。他の遺構との重複はなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は2.40m×1.52mの方形に近い楕円形である。削平のためか、壁はなだらかである。深さは、最深部で19.0cmであるが、全体的に浅い。遺構内にピットはない。

〔堆積土〕 堆積土は2層認められた。第1層は褐色シルト層で、第2層は黄・赤の斑入り褐色シルト層である。

〔出土遺物〕 遺構内からの遺物は出土しなかった。

第2号豊穴遺構

〔確認・重複〕 E1区の地山面で確認された。住居跡に近い部分がはっきりしないので断言できないが、調査段階では、他の遺構との重複は認められなかった。

〔平面形・規模〕 北西部が不明で、規模は明らかでないが、平面形は南北辺1.9mの方形であろう。遺構内部から2個のピット(P.1, P.2)が検出された。

〔堆積土〕 堆積土は2層認められた。第1層は黒褐色シルト層で、細かい貝碎片と炭化物が混入している。第2層は白・黄・茶色の斑入り褐色シルト層で、P.1, P.2の底面に堆積していた。

〔ピット〕 P.1, P.2とも浅く、柱穴の痕跡はなかった。

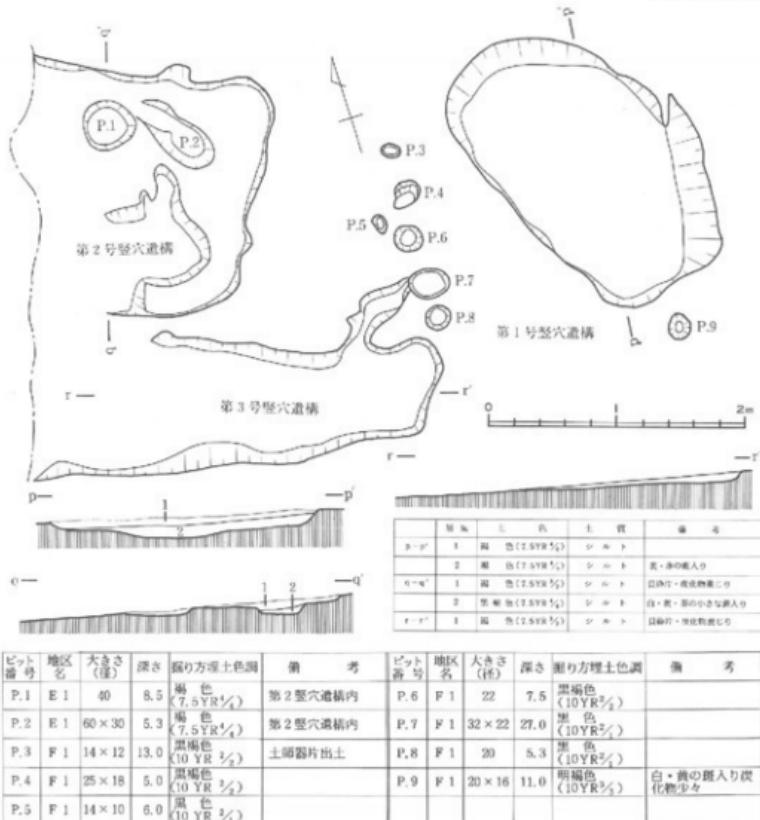
〔出土遺物〕 第1層内から鉄滓が8点出土している。

第3号豊穴遺構

〔確認・重複〕 E1区、F1区の南端の地山で確認された。他の遺構との重複はなかった。

〔平面形・規模〕 北西部の壁が検出されないのでその規模は不明である。最深部で9cmの深い豊穴である。

〔堆積土〕 1層しか認められなかった。貝の碎片と炭化物が混じっている黒褐色シルト層である。



第32図 堅 穴 遺 構

〔ビット〕 堅穴遺構内から検出されなかったが、北東端から北方に6個発見された。P.7が27cmと深く、その他は浅かった。柱痕の認められるビットはなかった。

〔出土遺物〕 鉄滓が5個出土した。土器はP.3から土師器片が出土している。

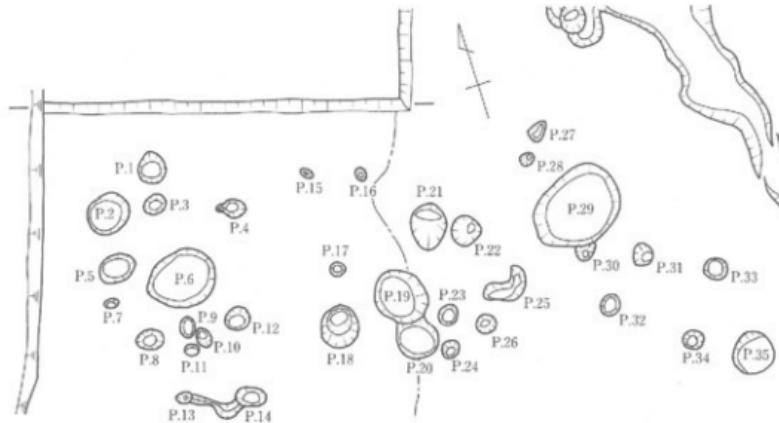
6. ピット群 (第33図、図版6下)

〔確認〕 P.1～P.18はD0区の整地面で、P.21～P.35はE0区の地山面で確認された。P.19、P.20は地山面と整地面の境目で確認された。

〔規模〕 大きさは10cm～70cmとまちまちで、深さもさまざまである。柱痕の認められ

たのはP.31のみであるが、深さが54cmにも達した。P.1～P.12は、P.6を中心にしてあるまとまりが見られる。図中の一点鎖線から左が整地面であるが、その境目のP.19、P.20は整地してから掘ったものであり、これらのピットがほぼ同時期につくられたことを示唆するものであろう。しかし、性格は不明である。

〔出土遺物〕 P.18, P.29から土師器片が出土している。



— B.M.

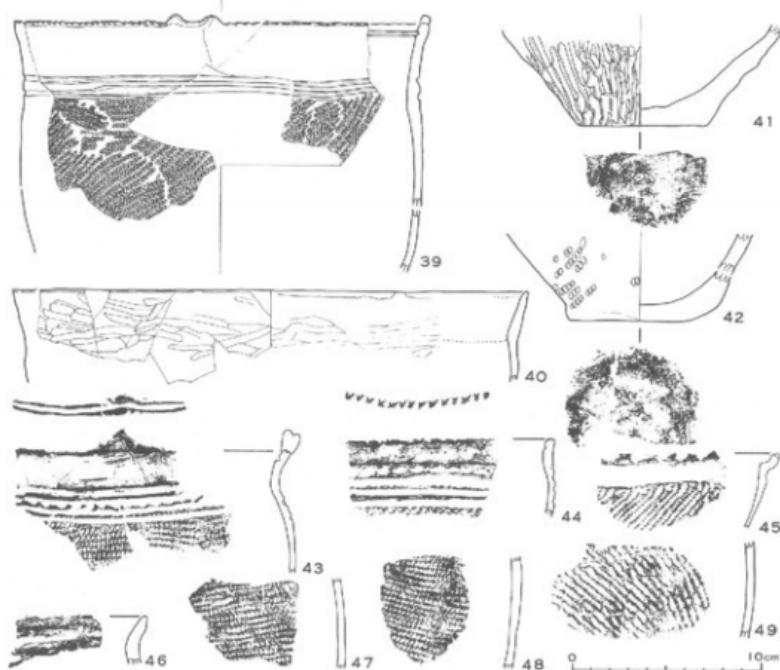
sondage 号	順序	土 色	土 性	備考
第33回	1	黄色(7.5YR5/6)	シルト	(表土)
	2	黄色(7.5YR5/6)	シルト	
	3	黄色(7.5YR5/6)	シルト	黒・赤の鉛入り
	4	高粘土(10 YR5/6)	シルト	黒・赤の鉛入り
	5	黄褐色(7.5YR5/6)		(地底)

側面	断面	地方別土色名	差別	記	植被地色調	色	考	ピット番号	地区	大きさ	深さ	塗り方	土色	考
P.1	D 0-34/20	黄褐色(7.5YR5/6)						P.18	E 0	44/40	12.5	■	黄色(7.5YR5/6)	
P.2	D 0-32	黄褐色(7.5YR5/6)						P.20	E 0	32/26	23.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.3	D 0-35	黄褐色(7.5YR5/6)						P.21	E 0	35/25	9.0	■	黄色(7.5YR5/6)	
P.4	D 0-35/42	黄褐色(7.5YR5/6)						P.22	E 0	35/25	10.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.5	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.23	E 0	35/25	10.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.6	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.24	E 0	35	4.0	■	黄色(7.5YR5/6)	
P.7	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.25	E 0	35/26	6.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.8	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.26	E 0	35	4.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.9	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.27	E 0	35/26	11.5	■	黄色(7.5YR5/6)	
P.10	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.28	E 0	35	4.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.11	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.29	E 0	35/26	10.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.12	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.30	E 0	34/40	4.0	■	黄色(7.5YR5/6)	
P.13	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.31	F 0	30/22	3.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.14	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.32	F 0	34	4.5	■	黄色(7.5YR5/6)	
P.15	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.33	F 0	36	10.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.16	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.34	F 0	32	12.0	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.17	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)						P.35	F 0	30-28	11.5	■	黄褐色(7.5YR5/6)	
P.18	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.19	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.20	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.21	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.22	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.23	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.24	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.25	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.26	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.27	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.28	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.29	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.30	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.31	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.32	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.33	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.34	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												
P.35	D 0-35/43	黄褐色(7.5YR5/6)												

第33図 ピット群

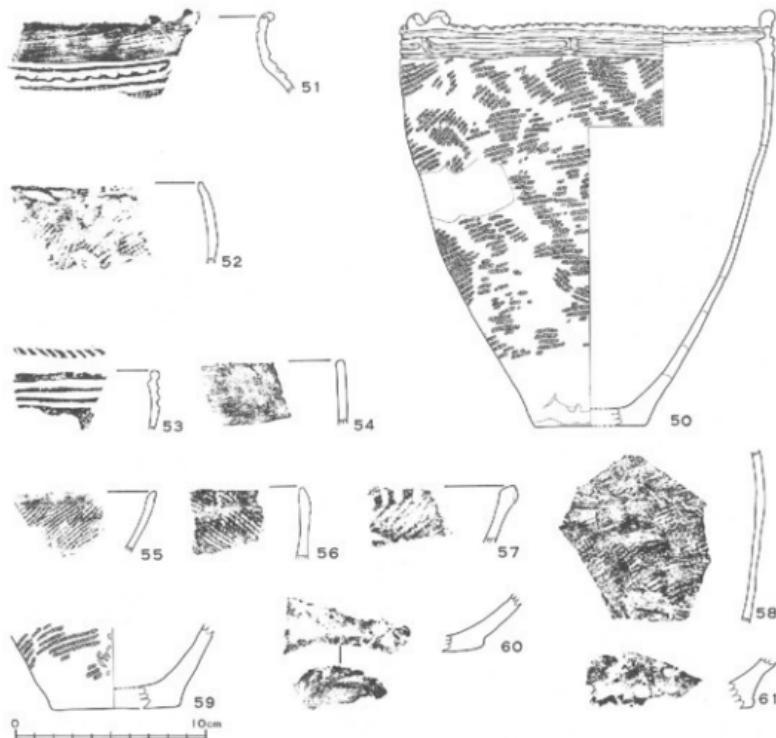
7. 遺構以外からの出土遺物

縄文土器(第34~36図・図版7~10)



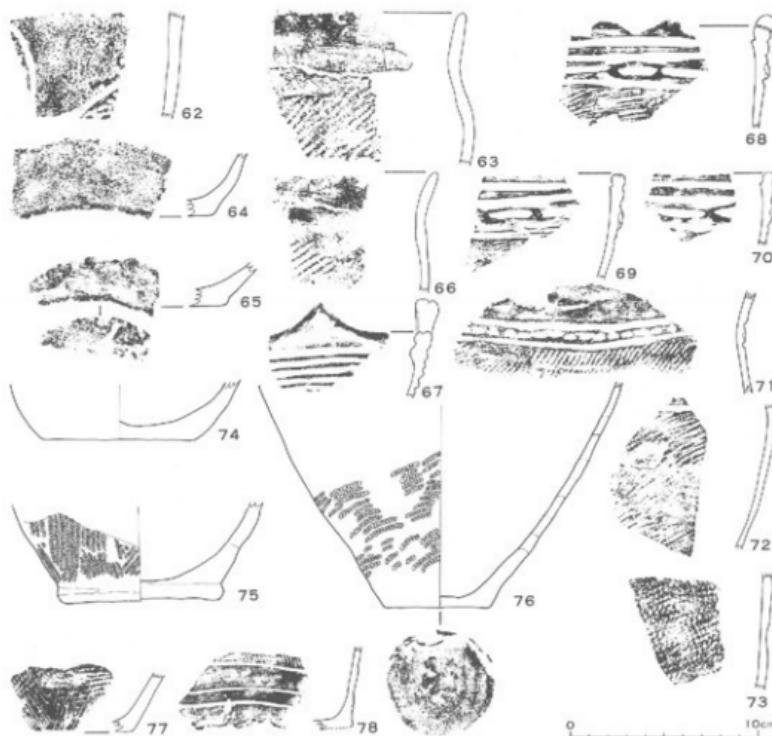
器種名	大きさ	出土地区 地区・層位	器種・部位	計 量(cm)	内 面	外 面	色 調	回収番号	備 考
第34図	39	A 2 - 4	深 筋 口縫部	22.0 25.0 -	0.4	ヘタリ無	縄 文 黒褐色	7-2	口縫部に斜溝、B型小突起
	40	A 2 - 4	深 筋 口縫部	27.4 27.4 -	0.4	ヘタリ有	ヘタリ無 縄 文 黒褐色	8-4	
	41	A 3 - 4	浅 筋 腹 部	- - -	6.8 0.7 ナ デ	縄 文 引抜文	縄 文 黒褐色	8-5	
	42	A 2 - 4	深 筋 腹 部	- - -	7.7 0.7 ナ デ	縄 文 灰質褐色	灰褐色	8-4	
	43	A 2 - 4	深 筋 口縫部	- - -	0.4 ヘタリ無	縄 文 明黄褐色	灰褐色 黃褐色	9-3	口縫部にA型山形突起、武様
	44	A 2 - 4	深 筋 口縫部	- - -	0.4 ヘタリ無	縄 文 黒褐色	黒褐色	9-5	口縫部にA型山形突起
	45	A 2 - 4	浅 筋 口縫部	- - -	0.3 ヘタリ無	縄 文 結 び	灰褐色 褐色	10-6	口縫部に沿続山形突起
	46	A 2 - 4	深 筋 口縫部	- - -	0.6 ヘタリ無	ヘタリ無	褐色	10-9	
	47	A 2 - 4	深 部	- - -	0.4 ナ デ	縄 文 引抜文	黒褐色 褐色		
	48	A 2 - 4	深 部	- - -	0.5 不 明	縄 文 引抜文	灰褐色 褐色		
	49	A 2 - 4	腹 部	- - -	0.4 ナ デ	縄 文 横 色	明赤褐色		

第34図 A 2 区第4層出土土器(41はA 3区)



器物名 番号	土器名 番号	出土地区 地名	器 形	部 位	寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸			面 面 面 面 面 面 面		色 調 内 面 外 面 内 面 外 面	目次番号	備 考			
					西面	東面	底面	北面	南面	左面	右面				
第35回	50	B2-4 D2-2	深 縁	口縫部	22.2	10.6	10.6	6.0	6.0	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色	8-1	口縫部に白墨小突起、肩 付、工又	
	51	B 2 - 4	深 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色	9-7	口縫部に山形突起化粧	
	52	B 2 - 4	小 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色	10-2		
	53	B 2 - 4	浅 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色	11-1	口縫部に刻印
	54	B 2 - 4	深 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		2-5
	55	B 2 - 4	浅 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		
	56	B 2 - 4	深 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		
	57	B 2 - 4	浅 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		
	58	B 2 - 4	鉢 縁	口縫部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		
	59	B 2 - 4	深 縁	底 部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色	12-1	
	60	B 2 - 4	深 縁	底 部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		
	61	B 2 - 4	深 縁	底 部	-	-	-	-	-	ナ ダ	ヘラミガキ	黒 文	明灰褐色		

第35図 B 2 区 第 4 層出土土器



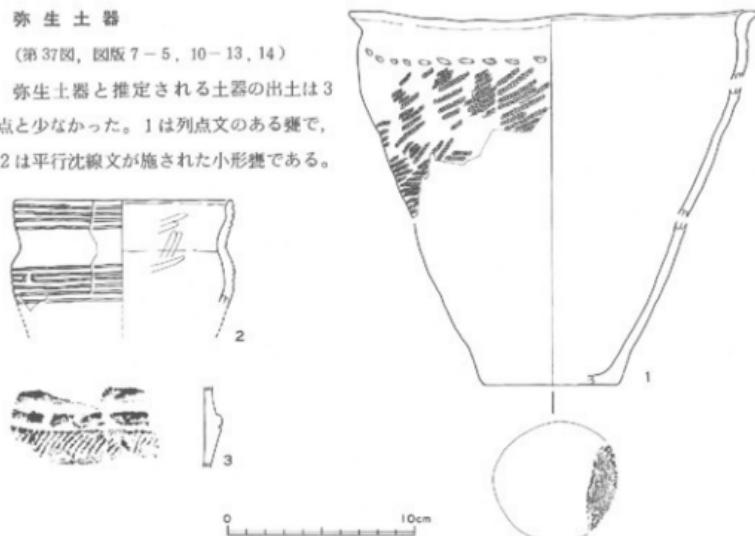
番号	出器	出土地区	基盤	施	量 (cm)	基	形	色	測	回版	備	考
		番号	地名	高さ	口径	底径	厚壁	内	外	白	黒	面
新36回	C 3 - 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.6	ナ	デ	白	黒	面
62	C 3 - 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ナ	テ	黒	文	縦
63	D 5 - 4 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ナ	テ	黒	文	縦
64	D 3 - 3 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	不	明	明	赤褐色	明赤褐色
65	D 3 - 3 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	0.5	ナ	テ	黒	文
66	E 4 - 黒砂上 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ナ	テ	白	黒	面
67	E 5 - 黒砂上 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.4	ヘ	タ	白	黒	面
68	E 4 - 5 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ミ	ガ	テ	黒	文
69	E 4 - 5 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ミ	ガ	テ	黒	文
70	E 4 - 5 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ミ	ガ	テ	黒	文
71	E 4 - 5 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.5	ヘ	タ	白	黒	面
72	E 4 - 5 深鉢	貝塚	板	-	-	-	0.4	ミ	カ	テ	黒	文
73	E 5 - 7 - 刻 鉢	貝塚	板	-	-	-	0.4	ナ	テ	白	黒	面
74	E 4 - 6 深鉢	貝 塚	板	-	-	-	2.7	0.7	-	白	黒	面
75	E 4 - 6 深鉢	貝 塚	板	-	-	-	0.8	0.7	ナ	テ	黒	文
76	不 明 - 深鉢	貝 塚	板	-	-	-	0.6	0.4	-	白	黒	面
77	不 明 - 深鉢	貝 塚	板	-	-	-	0.6	ナ	テ	白	黒	面
78	不 明 - 深鉢	貝 塚	板	-	-	-	0.3	ナ	テ	白	黒	面

第36回 C ~ E 区出土土器

弥生土器

(第37図、図版7-5, 10-13, 14)

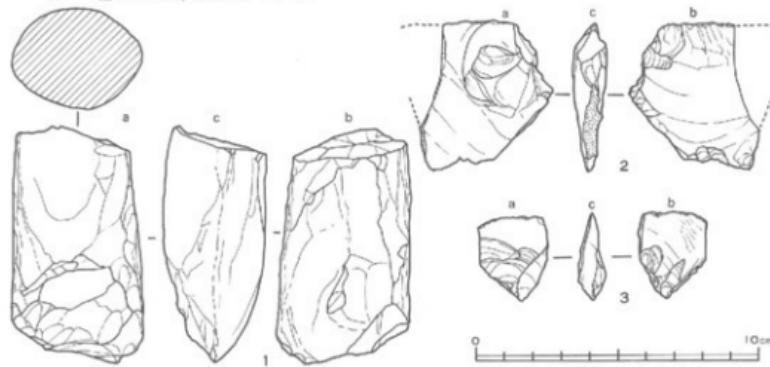
弥生土器と推定される土器の出土は3点と少なかった。1は列点文のある甕で、2は平行沈線文が施された小形甕である。



標誌番号	上層付 面付	出土地区 地区一層位	器種	部位	法 器高(cm)	幅 口径(大径)底径 深さ(cm)	調 査 部	内 面 外 面	色 調 査 部	図版番号	備 考
第37図 1	C5-6, D5-4	鏡	甕	-	20	21.6 21.0 7.0 - - 0.5	ヘラミガキ 黒色	輪文 暗褐色 内面	明褐色 外面	7-5	腹部に列点文あり
2	D 4 - 3	小形甕	甕	口縁部	-	11.5 12.0 - -	ヘラミガキ 黒色	ヘラミガキ 黒色	明褐色 内面	10-13	
3	不 明	鉢	口縁部	-	-	-	0.5 不 明	ヨコナダ 輪文	明褐色 内面	10-14	縦溝、斜文あり

第37図 出土 弥生土器

石 器(第38図、図版14-1~3)



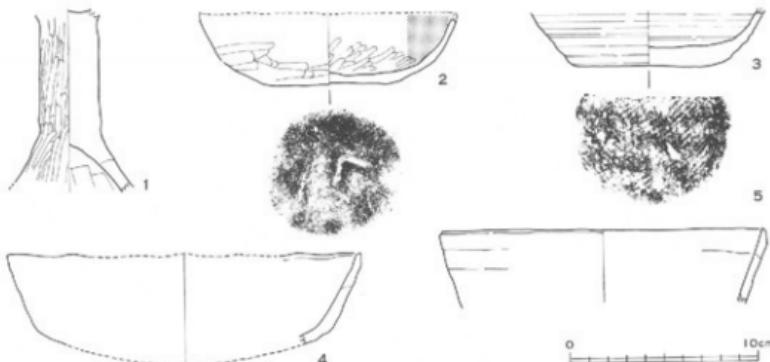
第38図 出土 石 器

拂図 番号	番号	種別	石質	大きさ(cm)			出土地区 地区-層位	図版番号	備考
				長軸	短軸	厚さ			
第38図	1	磨製蛤刃石斧	石	8.4	4.7	3.5	A 2-4	14-1	a面に剝離痕、頭部破損
	2	ブレイド	真岩	5.3	4.5	1.2	C 3-4	14-2	b面下端にリタッチあり
	3	刀器	真岩	3.0	2.4	1.0	B 2-4	14-3	b面左下端に2次的剝離痕あり

発掘区内から、磨製の蛤刃石斧など3点の石器が出土した。その他剝片が数点見られた。

土師器(第39図1, 2, 4, 5, 図版11-7, 3)

高坏脚部(1)1点、坏(2, 4, 5)3点が出土した。高坏脚部は外面がタテにヘラケズリされており、坏(2)は底部がヘラケズリされ、ヘラミガキ後内面が黒色処理されている。



拂図 番号	土器 番号	出土地区 地区-層位	種類	器種	法 量(cm)			調 整		色 調		図版番号	備考	
					高 度	口径	最大深 度	底径	底厚	内 面	外 面			
第39図	1	E 5-4	上脚部	高 脚 部	-	-	-	-	-	ヘラミガキ	-	明赤褐色	11-7	
	2	F 5-2	土脚部	环	推3.8	13.8	13.8	7.2	0.4	ヘラミガキ	黒	明褐色	11-3	底部ヘラケズリ
	3	表 模	頂部	环	-	-	-	7.6	0.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	11-2	底面静止糸切り
	4	E 2-2	土脚部	环	推6.0	18.8	18.8	-	0.5	不明	不明	明褐色	11-2	
	5	E 2-2	土脚部	环	-	17.4	17.4	-	0.4	リガキ	-	明褐色	11-2	2次的加熱焼あり

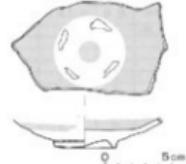
第39図 土師器・須恵器

須恵器(第39図3, 図版11-2)

内外面ロクロ調整された坏が採集された。底部を静止糸切りで切り離したのち、周辺部をヘラケズリしている。

綠釉陶器(第40図, 図版14-4)

高台の坏が1点出土した。内外面ともロクロ調整後に綠釉が



拂図 番号	土器 番号	出土地区 地区-層位	種類	器種	法 量(cm)			調 整		色 調		図版番号	備考	
					高 度	口径	最大深 度	底径	底厚	内 面	外 面			
第40図	1	D 4-3	高 台	底 盤	-	-	-	4.5	0.4	ロクロ 接着	ロクロ 接着	青 緑	14-4	陶粒の痕跡あり

第40図 緑釉陶器

施されている。高台内側はロクロ使用で1回で削り取られており、底面もロクロ使用でヘラで切り離されている。また、高台底面4カ所に陶枕の痕跡があった。

鉄製品(第41図1、図版14-5)

D3区2層から、刀子状の鉄製品が1点出土した。途中ではば直角に曲がっている。炭素含有量の極めて少ない鍛造品である。

吹子の羽口(第41図2~19、図版14-6~11)

D1区、E2区を中心とする17個の羽口片が出土した。いずれも縦に割れた破片で、耐火粘土としては良好といえない胎土で成形されている。内面は棒を引き抜いたのか、軸方向に滑らかに仕上げられており、外面はヘラケズリされている。鉄滓付着のものが5片あった。



出土地番号	番号	羽口番号	出土場所	主な構成	大きさ	目録記載 (cm)	色	形	回収番号	備考
41-41-1d	2	羽1	C2-3	2.6	4.9	2.0	黒 赤	筒 筒	14-8	穴入り
	3	羽2	D1-3	2.8	6.5	1.8	黒 赤	筒 筒	14-9	穴入り
	4	羽3	E1-2	2.8	6.5	1.6	黒 赤	筒 筒		
	5	羽4	D1-3	2.0	5.0	1.7	黒 赤	筒 筒		
	6	羽5	D1-3	2.6	5.0	1.7	黒 赤	筒 筒		
	7	羽6	D1-3	2.6	5.6	2.0	黒 赤	筒 筒		鉄滓付着
	8	羽7	D1-3	2.8	5.4	1.8	黒 赤	筒 筒		
	9	羽8	E2-2	3.6	5.9	1.2	黒 赤	筒 筒	14-8	
	10	羽9	E2-2	3.0	5.2	1.6	黒 赤	筒 筒	14-7	
	11	羽10	E2-2	3.0	5.8	1.4	黒 赤	筒 筒	14-10	
	12	羽11	E2-2	2.0	4.4	0.5	黒 赤	筒 筒	14-11	
	13	羽12	赤	4.4	5.4	1.2	赤	筒		鉄滓付着・穴入り
	14	羽13	赤	2.8	5.2	1.2	赤	筒		鉄滓付着
	15	羽14	赤	3.4	5.0	0.8	赤	筒		鉄滓付着
	16	羽15	赤	3.4	6.0	2.3	赤	筒		鉄滓付着
	17	羽16	赤	3.4	6.0	1.3	赤	筒		鉄滓付着
	18	羽17	赤	3.6	6.6	1.6	赤	筒		
	19	羽18	赤	3.6	6.0	2.2	赤	筒		

第41図 出土鉄製品・羽口

III. 考 察

2次にわたる調査によって検出された遺構と出土遺物について、II章でその概略を述べた。この章では、その成果に基づいて若干の考察を行うこととする。尚、製塙土器と鉄滓、それに焼礫群については、それぞれ一項を設けた。

1. 土 器 の 年 代

縁文土器

深鉢、鉢、浅鉢、注口土器が出土した。深鉢が多く、装飾的な精製土器より実用的で非装飾的な粗製土器が多かった。資料が少ないので、深鉢の口縁部資料で年代を考察する。

深鉢の口縁部で固定化した資料は、19点と数少なかったが、口唇部、頸部の文様で分類したものを第1表に示した。口唇部、口縁部に文様をもつもの(A類)ともたないもの(B類)に二分した。

A類の中で、工字文の施文されているもの(22, 50, 68~70)はすべて、口縁部にA字形突起をもっていた。工字文のないものには、口縁部に刻み目をもち、頸部に2~5条の沈線が平行に走り、刺突文が施文されたもの(44)、口唇部に沈線のあるA字形突起をもつもの(10, 67, 43, 51)がある。また、A類の深鉢の口縁部裏面には、一条の沈線が施されている。

B類で、頸部に文様のないもの(B-II)の口縁部は、くの字に外反する麿に近い器形のもの(40, 46, 63, 66)と直立のもの(4, 54)とがある。4の頸部に軽い段がある。B-Iには頸部に浅い沈線が施され、胴部の文様帯と画する。

第1表 口縁部資料による深鉢の分類

口唇部・口縁部の文様		頸部の文様	上器番号
A類 文様を もつもの	I. 口縁部にA字形突起をもつもの	①平行な沈線をもつもの ②平行な沈線、刺突文をもつもの	⑩ ⑪ ⑬ ⑭
	II. 口唇部にB字形突起をもつもの	③工字文をもつもの	④ ⑩~⑫
		⑤平行な沈線をもつもの ⑥工字文をもつもの	⑦ ⑨
	III. 口唇部に刻み目をもつもの	平行な沈線、刺突文をもつもの	⑮
	B類 文様をもたないもの	I. 麿文、浅い沈線をもつもの	21, 56
		II. 文様をもたないもの	4, 40, 46, 54, 63, 66

(注) 土器番号○は、口縁部裏面に一条の沈線のあるもの

A類の文様帶は、口縁部周辺に集約されており、B類の形態の特徴とも合せ、七ヶ浜町二月田貝塚出土の第11類土器に類似している。^{註1)}大洞A式に比定することができよう。

浅鉢と鉢は、深鉢と併出しており、大洞A式に比定するものと考えられる。さらに、繩文を全然もたず、肩部から底部にかけて格子状線刻文が鋭く施文された鉢(5)や、斜格子状に線刻された鉢(25)、口唇部に指頭による押圧文のある線刻文をもつ鉢(26)、櫛状工具による引搔文をもつ鉢(39)が、上記深鉢に併出していることを注意しておきたい。

弥生土器

第37図1の甕は、頸部がくびれて、口縁部が強く外反している。頸部には右から横方向に列点文が施され、胴部には繩文が施されている。底面には布目痕がある。これは楕円形開式^{註2)}に比定される。

同2の小形甕は、頸部がくの字にくびれ、口縁部はやや内湾している。外面はヘラミガキされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。口縁部に4本の沈線が平行に走り、肩部から胴部にかけて工字文風の文様と沈線文が平行に施されている。工字文風の文様には繩文晩期後葉の名残りが見られ、大泉式に併行するものか。

同3の鉢形土器は、口唇部を欠くが、口縁部の近くに隆筋が走り、刺突文が見られる。^{註3)}地文は繩文である。天王山式に比定されるものと推定できる。

土師器

堅穴住居跡の堆積層から出土した小形甕(第30図3)は、頸部がくびれ、口縁部は強く外反している。口縁部は内外とも横ナデされ、胴部は外面がヘラミガキ、ヘラナデされ、内面はヘラミガキされている。頸部に段が認められず、往社式のものと推定される。^{註4)}

第39図2の坏は、ロクロを使用していないもので、内外面とも段等の変化が見られない。全面にヘラミガキが施され、内面はヘラミガキのち黒色処理されている。これは、宮崎町早風道跡出土の坏D類と類似しており、国分寺下層式に比定される。^{註5)}

同1の高坏脚部は、外面全体を上から下へヘラミガキされ、内面にはアテ痕が見られる。古墳時代のものと推定される。同4の坏は磨滅がひどく、技法は不明だが、器形的に国分寺下層式か。また、同5の鉢形土器は、胴部が直線的に外傾し、口縁部には丸味がない。外面に輪積痕が見られ、内面にはヘラミガキの痕跡がある。バケツ形の製壺土器片と思われる。

須恵器

第30図1は、堅穴住居跡床面から出土した平底の坏である。ヘラ切りでロクロから離されたのち、手持ちヘラケズリで調整されている。調整は、底面を一定方向にヘラケズリしてから、底部周辺を4回ヘラケズリして仕上げている。この特徴をもつ坏には、8世紀前半～中葉の年代が与えられている。^{註6)}

表様の环(第39図3)は、ロクロ静止糸切りののち、底部周辺に手持ちヘラケズリ調整されている。8世紀中葉に編年されている。^{註7)}

— 註 —

- 1) 塙釜女子高社会部 「宮城県七ヶ浜町二月田貝塚第二次発掘調査報告書」『貝輪7』
- 2) 伊藤玄三 「弥生文化の発展と地域性6 東北」「日本の考古学III」 1966 河出書房
- 3) 中村五郎 「東北地方南部の弥生式土器編年」「東北考古学の諸問題」 1976 審査社
佐藤信行 「上ノ原A遺跡出土土器の編年の位置」「上ノ原A遺跡」 1978 一迫町教育委員会
- 4) 宮城県文化財調査報告書第35集 「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ(岩切鴻ノ巣遺跡)」 1974 宮城県教育委員会
- 5) 宮城県宮崎町文化財調査報告書第3集 「早瀬遺跡発掘調査報告書」 1980 宮崎町教育委員会
- 6) 関田茂弘・桑原滋郎 「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」「多賀城跡調査研究所紀要1」 1976 <第2類 b>に該当。
- 7) 同上。 <第4類>に該当。

2. 遺構の年代

貝塚の年代

発見された五つの貝塚のうち、土師器の細片を含む第1貝塚が最も新しい。第1貝塚は、竪穴住居跡の堆積層の上に盛り土した整地層を掘り込んで形成されているので、当然、竪穴住居廃棄後のものである。住居跡は、後述するように、8世紀前半～中葉と推定されるから、第1貝塚の形成年代は8世紀中葉以降であろう。

a-a'断面図(第4図)を見ると、第3貝塚と第5貝塚は8a層の下にあり、ほぼ同年代に形成されたものと思われる。第5貝塚から出土した土器(第8図)は縄文晩期の特徴をもっている。また、8a層は、A2区、B2区では第4層に相当しており、これらの層から出土した土器(第34図、第35図)が、前項で述べた如く、大洞A式にあたるものと推定されるので、第3貝塚と第5貝塚は、縄文晩期後葉に形成されたと見ることができる。

第2貝塚は、第3貝塚形成後につくられた溝状造構の堆積層の上に一部重複して形成されている。第3貝塚より新しいが、第3貝塚の上層の第5層の下にあり、時期的に大きな隔たりはないと考えられる。

第4貝塚は、貝塚およびその脇から出土した土器が、前項で大洞A式に比定されたことや貝塚がB2区第4層と同じ層にあることから、縄文晩期後葉に形成されたものと考えられる。

以上のことから、第3～第5貝塚が縄文晩期後葉に、少し遅れて第2貝塚が、そして、第1貝塚は奈良時代中期以降に形成されたものと推定される。

土器集積地の年代

びっしりと固まって堆積していた赤色粗面尖底土器は、前述したように、縄文晩期の製塩土器である。さらに、伴出した深鉢(第25図、21, 22)は、前項で検討した結果、大洞A式に比定されるものと推定された。土器集積地は縄文晩期後葉の製塩土器の捨て場と考えられる。

焼窯群の年代

焼窯群からは3点の土器片(第15, 16図)しか出土しなかった。縄文晩期から弥生時代のものと思われるが、決め手となる文様がなく、口縁部も欠けているので、遺物からの年代判定はむずかしい。他の遺構との層位関係で年代を推定してみる。

焼窯群R1は、第2貝塚上の固くしまった堆積土の上にあり、第2貝塚より新しいが、検出状況から見て、第2貝塚の時期より大きく隔たるとは思えない。縄文晩期後葉以降のものだろう。

つぎに、R10は、a-a'断面図(第4図)から明らかなように、第5貝塚の下にあった。第5貝塚の形成より古い。縄文晩期後葉かそれ以前のものと思われる。

m-m'断面図(第23図)、n-n'断面図(第24図)を見ると、R6, R8の基盤が、製塩土器を含む土器集積地の層と同じ層であることがわかる。このことから、土器集積地の形成時期と同じ縄文晩期後葉のものと推定される。

他の焼窯群も、R6, R8と同じ層と見られるので、やはり縄文晩期後葉のものだろう。

堅穴住居跡の年代

D1区で検出された堅穴住居跡の貼り床面から、須恵器の壺(第30図1)が出土し、前項で検討した結果、8世紀前半～中葉の壺と判明した。カマドわきからは上師器の甕片、煙出し穴から土師器が出土しているが、時代は不明である。また、堆積層から住社式と推定される土師器の甕(第30図3)が発見された。矛盾があるが、貼り床面から出土した須恵器壺をもって、住居跡の年代としたい。奈良時代の遺構と推定できる。

その他の遺構の年代

E0, F0区の溝およびその周辺のピット群(第33図)は、削平されており、溝やピットに堆積している土層も新しいものである。年代不明、性格不明の遺構である。

E1～F1区で検出された3つの堅穴遺構も、他の遺構との重複もないし、出土土器も第3号堅穴遺構周辺のP.3からの土師器片1点だけなので、年代の判断はむずかしい。

D0～E0区で検出された35個のピット群は、堅穴住居を廃棄したのちに整地された層に掘られているが、第1貝塚との先後関係は不明である。P.18, P.19から上師器片が出土しているが、小破片なので年代判定の決め手にはならない。

以上をまとめると、鬼ノ神山貝塚の各遺構の推定年代は第2表のようになる。

第2表 鬼ノ神山貝塚検出遺構の推定年代

時代	土器型式	発見された遺構	出土遺物
縄文	大洞B 大洞BC		
	大洞C1 大洞C2		
晩期	大洞A	第3, 第5, 第4 第2 貝塚	土器 集積地
	大洞A'		R 11 R 2~R 10 R 1
弥生時代	小泉式		深鉢・浅鉢 鉢・注口土器・製埴土器
	楕円形壺式		
	円田式		
	十三塚式		
	天王山式		
古墳時代	塙釜式		小形甕
	南小泉式		
	住社式		
	栗閉式		
奈良時代	国分寺下層式	豊穴住居跡	土師器甕 高坏脚部
平安時代	表杉ノ入式	ビット群 豊穴遺構?	羽銛 口淬
		第1貝塚	

3. 製塙土器について

出土製塙土器の形

土器集積地を中心に出土した赤色の粗面土器が、製塙土器であることはすでに述べた。

細片が多く、図化できたのは少なかった(第26, 27図)がいくつかに分類できた。

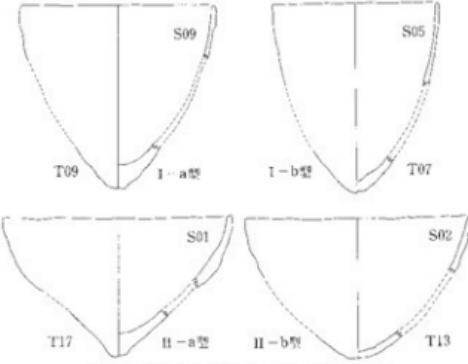
口縁部は、器厚が2~4mmと薄く、内窵しながら外傾するもの(S01, S02, S03, S07など)と、内窵しながらほぼ直立するもの(S04, S05, S06など)の2種に分かれる。

底部は、尖底と平底がある。

平底は、4点しか出土せず、底径が推定2.5~7.5cmとまちまちである。あてはまる口縁部はないが、深鉢形のものと推定される。

尖底には、底径が1cm内外の小さな平底風のもの(T02, T11, T26など)も含めた。内面の底部が砲弾状につばめられ、尖底そのものと基本的に変わらない形態だからである。尖底土器は、底部が鋭角のもの(T03, T04, T05など)と鈍角のもの(T13, T24など)に二分される。

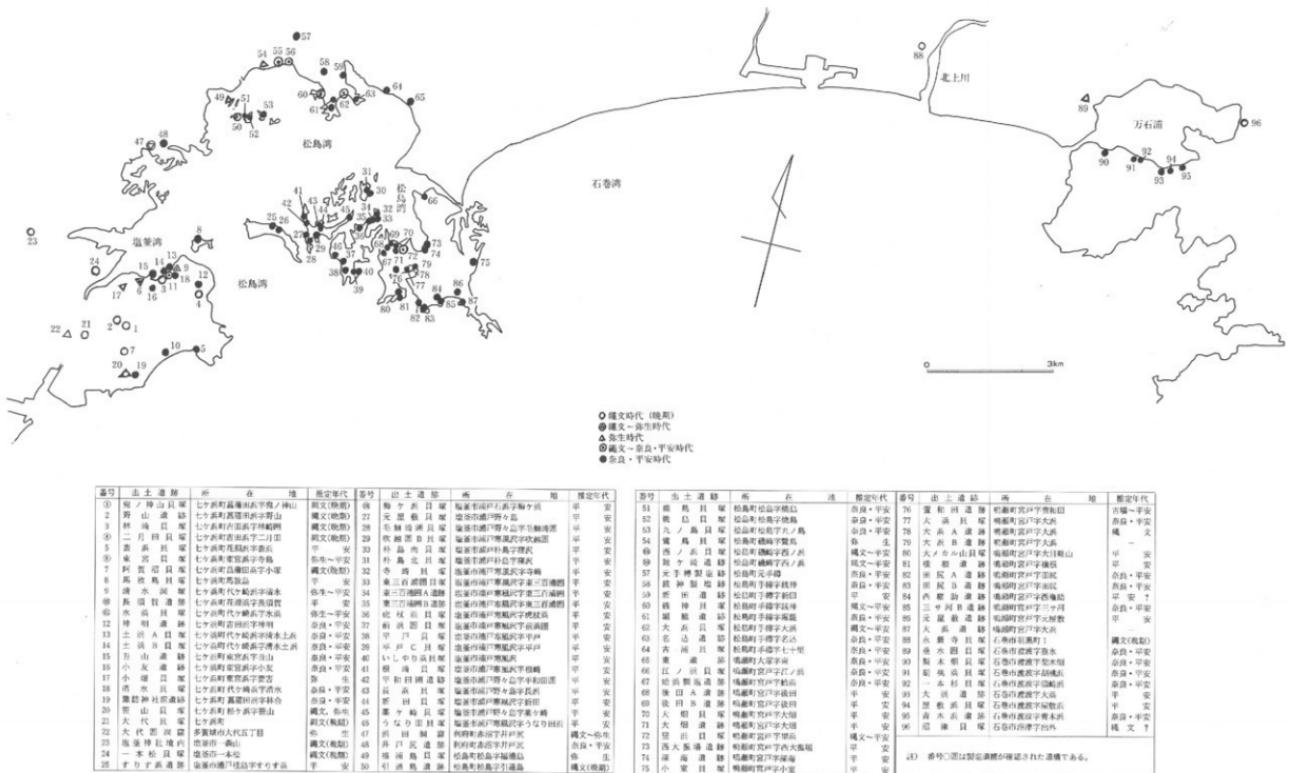
口縁部と底部を組合せて22種類を図上復元してみた。口縁部の断面のカーブと、底部の断面のカーブを円滑につなぐ方法で作図したので、途中の変化があれば全くちがうものになる。あくまでも推定図であるが、第42図I-aに類似した深鉢形の器形が最も多く6割



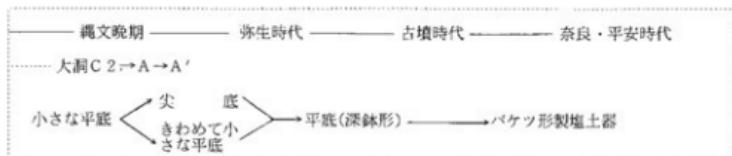
第42図 製塙土器推定復元例(1/4)

を占めた。口径は11~16cmで、器高は推定9~14cmである。

従来、平底の製塙土器は、大洞A, A'式に併行する尖底土器から変化したもので、きわめて小さな平底は別にして、弥生時代以降の遺物と言られてきた。ところが、藤沼邦彦は、大洞C₂式の時期の「仙台湾沿岸の製塙土器は、高さ20~30cmの単純な形の深鉢で、小さな平底をもつ。(中略)この土器は大洞A式以降になると、平底から尖底、もしくはきわめて小さい平底に変化する」と述べ、平底が尖底に先行する見解を出している。すると、仙台湾における製塙土器の形はつきのように変化したと言えるだろう。



第43図 宮城県における製塙土器出土分布図



この器形の変化はどうして起きたのだろう。特に、平底→尖底→平底という変化が生じたのは何故か。それなりの技術的な変化があったものと思われる。それは、製塙炉の形態の変化からかも知れない。あるいは、生産量の増大がその要因かも知れない。今後の課題の一つである。

製塙土器制作の技法

製塙土器の特徴は、器厚がきわめて薄いことと、内面がよく研磨されていることである。また、底部はヘラケズリされているものが多い。輪積痕が明瞭に残っている場合もある。

尖底土器をつくるにはまず、平底にしておいて、下から上へ輪積みをして、内面をアテ板などを使って強く押しつけたり、ヘラミガキをし、ていねいに仕上げる。底部は砲弾状に仕上げる。この時、ヘラケズリで成形したものもある。ついで、底部外面をヘラケズリで下から上へ成形してゆく。口縁部にはケズリの痕跡は見られないが、ナデ痕の認められるものがある。^{註3)} 後藤和民氏の言う「洗い出しが」がつかわれたどうかはわからない。

宮城県内における製塙土器出土地

^{註4)}

宮城県内で、製塙土器が発見された遺跡を第43図に示す。松島湾周辺に集中しており、ついで万石浦周辺で発見されている。いずれも、その時代の小さな入江の奥にあり、貝塚をともなう遺跡に多いのも特徴である。縄文、弥生時代の遺跡は少なく、奈良、平安時代に増加しており、社会的な変化、要因をうかがわせる。また、縄文晩期の遺跡を拠点にして拡大していくさまが、地図上から想像できる。

註

- 1) 後藤勝彦 「東北に於ける古代製塙技術の研究」『宮城史学2』 1972
- 2) 藤沼邦彦 「東北」『縄文土器大成④ 晩期』 1981 講談社
- 3) 後藤和民 『縄文土器をつくる』(中央新書) 1980 中央公論社
- 4) 宮城県文化財調査報告書 73『宮城県遺跡地図・地名表』 1980 宮城県教育委員会 をもとに宮城県文化財調査報告書 58「宮戸島貝塚群」「宮城県は場整備関連遺跡詳細分布調査報告書」 1978 宮城県教育委員会および註1) 文献を参考にして作成。

4. 焼跡群の性格について

鬼ノ神山貝塚で検出された焼跡群について、R1～R11の11支群に分けて前述した。これをまとめると、以下のようになる。

- 1) これらの焼跡群は、小さな入江の奥の、標高約2mの汀線に近い砂地に立地している。
- 2) 砖の間や磚群の周囲に、赤色の土器細片を含む黒色の灰層が広がっている。
- 3) R1～R4およびR9～R11の7支群は、梢円形・矩形のまとまりある平面形を行している。他方、R5～R8の4支群は不整形である。どの支群の表面も平らでない。
- 4) どの磚も強い火熱を受けて赤褐色に焼けており、脆くなつて亀裂を生じたものが多い。
- 5) 烧跡群は、R9を除き、径が5～10cmの小さな円磚、角磚で構成されている。R9には、20cm前後の比較的大きな磚が使用されている。
- 6) 烧跡群からの上器片の出土は極めて少ない。
- 7) 烧跡群の下方の地点で、尖底部を主とする多くの製塩土器細片の堆積が検出された。
- 8) 伴出土器の編年から、焼跡群の形成年代は縄文晩期(人洞A)と推定される。

さて、これらの焼跡群は、どういう目的で何に用いられたのだろうか。その性格を考えてみたい。

まず、單なる流れ込み、あるいは廐棄であって、あるプランをもって設けられた遺構ではない、ということが想定される。3)でのR5～R8を見るとその可能性もある。しかし、少なくとも調査区内から、もとの遺構が検出されず、たとえ、流れ込みか廐棄としても、何に使用されたものが流れ込んできたのか、乗てられたのか不明である。しかも、どの支群もほぼ旧汀線に近い同一レベル上で検出されたことや、磚の堆積状態や灰層の範囲から見て、磚の多少の移動はあったろうが、全ての磚が流れ込んだものとか廐棄物とは考えられない。むしろ、検出された地点で一定の役割を果たした遺構と考えたい。

つぎに、磚がごとく赤褐色に焼けていることから、炉跡を想定した。調理、暖房、照明のための炉は、縄文晩期にはすでに住居内に設けられているのが一般的である。ところが、焼跡群の周囲には、④住居跡のプランが見られず、⑤床面にあたる硬い層が検出されず、住居跡と認められる遺構はなかった。しかも、焼跡群は、住居に不適当な汀線に近い砂地にある。従って、住居内に設けられた炉跡とは考えられない。しかし、磚がボロボロになるくらい強い火熱を受けているので、火を焚いた跡であることはまちがいない。住居外で、特殊な用途につかわれた炉跡であろう。

次に、7)の製塩土器集積地とのかかわりから、製塩遺跡の中の一つの遺構という線を検討したいと思う。これまで、この両者の関係を避けて、焼跡群だけを取りあげたのには理由が

ある。1つは、縄文晩期に比定される製塩遺跡の調査報告の中に類例がないこと。もう1つは、焼穂群だけで何がわかるかを探るために、その結果、特殊な用途の炉跡の可能性を示唆できた。しかし、第23、24図から明らかなように、層位的にも、この二者を切り離して考へるわけにはいかない。むしろ、結びつけて考えるのが自然であろう。また、鬼ノ神山貝塚が、製塩遺跡の地形的条件「背後に燃料木を供給するに適した山や丘陵があることと、その時代の海浜に近く所在すること」を充足して立地していることも傍証になろう。^{註1)}

製塩遺跡は、これまで発表されている発掘調査報告を見ると、①製塩炉、②製塩炉付属構造、③作業場構造、④製塩土器の捨て場などで構成されている。もっとも、これらすべてがまとめて検出されたことはほとんどない。④の製塩土器の捨て場をもって、製塩遺跡と称していることが多い。

^{註2)}

この中で、⑥は、灰土を踏みしめた製塩炉周辺にひろがるタタキ面のことだが、当遺跡からは検出されていない。製塩土器集積地は、前述したように④とみていい。従って、焼穂群は残る①②の可能性が強い。

しかし、発見された跡が①の製塩炉であることを証明するのは難しい。近藤義郎氏は、^{註3)} 製塩土器との共存関係や他の遺構との関係から製塩炉と認められたものを6種類に分類された。そして、松島湾等の製塩遺跡で検出され、製塩炉跡と報告されている灰土の拵りについて、「これらが灰土による炉体の残骸であるのか、それとも放出された夥しい灰が他の物質と結合して固化したものか、いまのところ結論は下しがたい。」と述べている。^{註4)}^{註5)}

第3表 製塩炉の分類（註3文献より作成）

種類	特徴	遺跡例
I 烧穂炉	a 石敷炉K型 • 平面形は小判形、楕円形。 • 20~30cm大の扁平な角礫が中心。 • 敷石面は平坦で壁面、堤あり。 • 炉底が一方に傾斜。	香川県喜兵衛島 南東浜遺跡など
	b 石敷炉F型 • 平面形は長円形、隅丸矩形。 • 20~30cm大の角礫、栗石。 • 敷石面は平坦で、壁面、堤はなし。 • 炉底はほぼ平坦	福井県船岡遺跡など
	c 石敷炉X型 • 平面形は不整形。 • 右は大きさまちまちの角礫、円礫。 • 敷石面は凸凹で、すき間あり。 • 壁面、堤なし	福井県岡津遺跡など
	d 石圓炉 • 石で側を固めた炉	山口県波瀬が浜遺跡など
e 土堤炉 • 土砂を堤をめぐらした炉	岡山県玉治遺跡など	
II 烧塩炉	• 壁体、天井部をもつ壁体の炉	香川県ナカシダ浜遺跡など

さて、鬼ノ神山貝塚からは、製塩炉跡とされる灰土(緻密な灰層)の括がりが検出されず、製塩炉跡に想定できるのは焼礫群だけである。検出された焼礫群に類似した製塩炉跡は、福井県岡津遺跡のI~4号が跡や古見浜遺跡のF-2, F-10に見ることができる。第3表の「石敷炉X型」に分類されている。「石敷炉X型」は、他の石敷がが、扁平な角礫や、栗石を密に敷いて表面を平らにした炉であるのに対し、「もと固定的に敷き並べられてあったものが破壊されたのか、それとも現状がものと状態に近いものか、あるいは作業のたびに石を配し支えの如く置いたものか、何れとも判別しがたい」^{註6)}跡のことである。

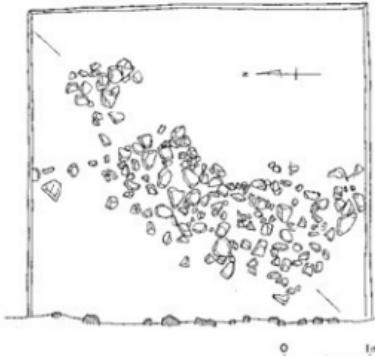
X型の石敷炉が一定の平面プランをもたず、石組みが粗でまばらなのは、製塩土器の形態と関連があるからだろうと思う。岡津式製塩遺跡のばあいは、土器が丸底のため、「こうした石組みは丸底土器を固定させるための施設であり、この石組みがかまど役割を果たした」と推定^{註9)}されている。

また、古見浜遺跡の土器は支脚を用いていて、「支脚を置いてから、それを支えるために配石した感」があり、そのため「一定のプランを有せず」「きわめて散漫な」敷石^{註10)}になっているのだと推定されている。

このように見てくると、鬼ノ神山貝塚の場合も、焼礫群を「石敷炉X型」の製塩炉跡とみることが可能である。出土した製塩土器がほとんど尖底土器だから、平らな敷石面に立てたり、砂に安定直立させるのは難かしく、石の間隙に尖底土器を据えたか、尖底部を砂にさしててから、それを支えるために配石したかであろうと推定される。敷石は、熱を下に逃がさず、下部からの湿気もある程度遮断するという利点をもつ。



第44図 福井県岡津遺跡
4号炉跡 (註6文献から)



第45図 福井県吉見浜遺跡F-2炉 (註7文献から)

ところで、県内の製塩遺跡から、焼礫群に類したもののが検出が告無かというとそうではなく、
註11) 塩釜市の梅ヶ浜遺跡と松島町の館ヶ崎遺跡で検出されているので一言触れておきたい。
註12)

梅ヶ浜遺跡では、「造構(製塩窯跡)の向りから特に、遺跡西側に顕著であるが幅30~40cm
註13) もある赤く焼けた石の群列が検出」された。報告書ではその性格について何も言っていないが、
 後藤勝彦氏は「窯跡中に見られる岩と同じく赤く焼けていた。窯跡を区画するものなのかも
註14) 知れない」として製塩窯跡付属造構の中に入れている。

館ヶ崎遺跡について、加藤孝氏は「凝灰岩の割り石を底面一面に敷きつめて、窯の床を作
註15) った」と報告、割り石を製塩炉の敷設と見ている。発表された実測図を見ると、夥しい量の焼
 石が検出されたことがわかる。

後藤氏の製塩炉の分類では、炉(窯)の中の焼け石について余り触れられていないが、上記の二つの例を見るなら、石敷炉の可能性があるのではないか。今後の発掘例をまって、鬼ノ神山日塚の焼礫群と、これらの焼け石との関連について再検討すべきだと思われる。

以上、焼礫群の性格について考察をすすめてきたが、以下の2点にまとめることができる。

- (1) 焼礫群の性格を考える際、層位的にも土器集積地(製塩土器の捨て場)との関係を無視できず、従って、製塩造構の一つと見ることができる。
- (2) 編文晩期の製塩遺跡で、今まで類例は発見されていないが、製塩炉跡(石敷炉X型)である可能性が高いと思われる。

—— 註 ——

- 1) 石部正志「製塩遺跡」『考古資料の見方<遺跡編>』地方史マニアル5所収 柏書房
- 2) 近藤義郎「土器製塩の話4・炉址」『考古学研究106』 1980 (考古学研究会)
- 3) 同 上
- 4) 後藤勝彦「東北に於ける古代製塩技術の研究」『宮城史学2』 1972
 この中で、後藤氏は、不整形の梢円状か長方形状にひろがる緻密な灰層の堆積面上を
 製塩窯跡とし、<A型窯跡>薄紫色の緻密な硬い灰層のもの、<B型窯跡>明るい灰色
 の緻密な灰層のもの、の2型に細分している。
- 5) 註2に同じ
- 6) 「高津製塩遺跡-第1次・第2次発掘調査報告-」 1980 福井県小浜市教育委員会
- 7) 若狭考古学研究会「吉見浜遺跡-若狭における土器製塩遺跡の研究-」 1974
- 8) 註2に同じ
- 9) 註6に同じ
- 10) 註7に同じ
- 11) 塩釜女子高社会部「宮城県塩釜市浦戸石浜海ヶ浜製塩遺跡の発掘調査報告」『貝輪3』
 1967
- 12) 加藤孝「宮城県宮城郡松島町磯崎西ノ浜館ヶ崎古代製塩遺跡出土品目録の作成」『東北
 文化研究所紀要9』 1978
- 13) 註11に同じ
- 14) 註4に同じ
- 15) 註12に同じ
- 16) 同 上

5. 出土鉄滓について

1. 鉄滓の出土状況

鬼ノ神山貝塚から 591 点の鉄滓(俗称カナクソ)が出土した。出土地区は、第 46 図に明らかのように、D 1 区を中心 C 2 区、D 2 区、E 1 区に集中している。鉄滓包含層は第 2 層が多いが、前述した堅穴住居跡の床面および堆積土中より 26.7% も出土しているのは注目すべきことである。

大きさはまちまちで、10 g に満たないものから、2,200 g に及ぶものまであるが、50 g 未満が 82.9% もある。

楕形鍛冶滓に類似した形状のもの 24 個を数えるが、他は形状不定である。

全体的に表面が赤銹のような色調で、粗鬆な小孔が見られる。炭を噴み込んでいるものが 8 点あった。これは、表面が比較的滑らかなガラス状の製鍊滓とは異なる様相を呈している。鍛冶滓と思われるが、製鍊滓としても鉄の回収率の悪いものと推定できる。出土状況からみて、堅穴住居跡とほぼ同じ奈良時代以降、平安時代の遺物と考えられる。

第 4 表 鉄滓の出土地区と重量

(•印は楕形滓と推定されるもの)

地区 重 量 g	A2	B2	C2	C3	C4	C5	D0	D1	D2	D3	E0	E1	E2	E3	E4	F0	F2	G0
< 25	2	2	2	3	3	6	2	3	2	3	1	49	23	39	26	11	2	5
25 ~ 50	71			1	6		1	87	55	4	58	35	1	1				
50 ~ 75	10						1	1	2				4	1	1			
75 ~ 100	5							2	6	1		1	1	1	3	3	2	3
75 ~ 125	1	2		2			-1	1	1	1		2	1	1	2	1		
100 ~ 125	*1	2						1	1	2				2	1	1		
125 ~ 150										1	*1							
150 ~ 175	1		*	1						1								
175 ~ 200															*1	3	3	
200 ~ 225					1	=1		*1	*1	1						*1		
225 ~ 250																		*1
250 ~ 275		1	1															*1
275 ~ 300											1							
300 <		*		*1												1	*1	*4
合計	1	*1	75	*1	2	*1	1	7	*1	*1	1	24	64	5	61	21	4	2

第5表 鉄津供試料の調査項目

符 号	出 地 区 地区 - 層位	調 査 項 目			備 考
		化 学 分 析	X 線 回 折	顕微鏡組織	
KF-1	C 2 - 2	○		○	複形鐵治津
KF-2	C 2 - 3	○	○	○	
KF-3	堅穴住居堆積土	○	○	○	
KF-4	堅穴住居床面	○	○	○	
KF-5	堅穴住居床面	○		○	

2. 調 査 方 法

多数の出土鉄滓の中から、堅穴住居跡出土のものをはじめとする5点を試料とし、つぎの調査を行なった。

④ 内眼観察

④ 光学顕微鏡観察—試料を水道水でよく洗浄して乾燥させた後、2つに切断し、一方を顕微鏡観察試料にした。残りを成分分析およびX線回折の試料に供した。試料はグラインダで形を整えてから、ヘメリーベーパ# 350, # 600, # 800, # 1000, # 1500, # 2000で研磨し、酸化クロムを研磨剤としたバフ仕上げをした。

⑤ 粉末X線回折法—試料中の元素、酸化物がどんな形状で鉄滓を構成しているかを知るため、粉末X線回折法で鉱物組成を同定した。試料を粉末にして、鉄(Fe)をターゲットとするディフラクト・メータにかけて、X線回折線図を記録して、それをASTMカードと照合して物質の同定をした。

⑥ 化学組成—試料を乳鉢で細かい粉末に振りつぶして、湿式化学分析や蛍光X線分析・原子吸光等の分析方法で、含有元素・酸化物の定量を求めた。

3. 調 査 結 果

試料No. KF-1～KF-5の順で述べる。顕微鏡組織は図版17～18に載せ、X線回折

第6表 鉄滓のX線回折

試 料	出 上 地 区	F	W	M	M·Fe	G	I	A
KF-2	鬼ノ神山貝塚 C 2 区第3層	1	2	2	-	-	-	-
KF-3	鬼ノ神山貝塚 堅穴住居堆積層	2	1	3	-	-	-	3
KF-4	鬼ノ神山貝塚 堅穴住居床面	3	-	2	-	4	1	-

F : Fayalite $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ M·Fe : 金属鉄 A : Al_2O_3 W : Wustite FeO

G : Goethite $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$ M : Magnetite Fe_3O_4 I : Ilmenite $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$

1 (多)～4 (少) : 推定判定順位

の結果は第6表に示す。鉄滓の組織は検鏡箇所によって異なる場合が多いので、試料毎に2~4枚の写真を掲載した。ついで、(TiO₂/T·Fe)と(造滓成分/T·Fe)の関係を図化したが、比較のため、同年代と推定される他の遺跡から出土した鉄滓のそれもプロットした。

(1) KF-1

C2区第2層から出土した楕円形鐵治滓。表皮は褐色を呈し小孔がみられる。破面は気孔が多く、黒褐色をしており、炭の嗜み込みが認められる。比重5.7。

鉱物組織(図版17)は、試料断面の上部と下部でその様相を異にする。上方(a)は、白色粒状のウスタイト(Wustite: FeO)がよく発達し、長柱状の灰色結晶フェアライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が粒間を埋めている。中央部(b, c)から下方(d)にかけて、灰白色多角形状のマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)が増加していく。このような変化は鐵治滓にしばしば見られる。

化学組成(第7表)は、造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)が24.2%と、供試試料中もっとも高かったが、全鉄量(T·Fe)の55%にすぎず、鐵治滓か、還元の悪い製鍊滓に類似した値を示した。二酸化チタン(TiO₂)は6.72%あった。

(2) KF-2

C2区第3層から出土した鉄滓。表皮は赤褐色を呈し小孔がある。破面は黒褐色で気孔が少ない。比重5.4。

鉱物組織(図版17)は、全体的に灰色板状のフェアライトと微結晶のウスタイト、フェアライト、ガラス質からなる共晶部が存在する。X線回折(第6表)でもフェアライトが最も強く検出され、ついで、マグネタイト、ウスタイトの順で検出された。ゴーサイト(Goethite: Fe₂O₃·H₂O)は認められず、金属鉄(M·Fe)は痕跡程度だった。

化学組成(第7表)は、KF-1と同じように、T·Feが

第7表 鉄滓の化学分析結果

No.	試 料	全 鉄	T·Fe	M·Fe	FeO	Fe₂O₃	Al₂O₃	SiO₂	MnO	Cr₂O₃	MnO₂	CaO	V	P₂O₅	S	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr₂O₃	MnO₂	V	P₂O₅	CaO	V	P₂O₅	Cr_{2</sub}

高く、造済成分がT・Feの45%と低かった。 TiO_2 は3.89%と比較的低く、T・Feの8%しかなかった。鍛冶済であろう。

(3) KF-3

D 0区第2層から出土した鉄済。表皮は褐色を呈し、焼けただれたようなぶつぶつがある。破面は黒褐色で横に平たい気孔が認められた。比重6.1。

鉱物組織(図版17)は、全体的に白色ぶどう状のウスタイトがよく発達しており、部分的にはウスタイトのみの箇所も観察された。地は灰色柱状のフェアライトである。これは、X線回折の結果(第6表)にもよくあらわれており、ウスタイトが最強で検出され、ついでフェアライト、二酸化アルミニウム(Al_2O_3)の順で検出された。マグネタイトは余り強く検出されず、M・Feはわずかに認められた。また、KF-2、KF-3とも、チタン(Ti)は TiO_2 、 TiO でマンガン(Mn)は MnO の形状で検出された。

成分組成(第7表)は、T・Feが53.6%と高く、造済成分はわずかに17.5%で、T・Feの33%に過ぎなかった。 TiO_2 が6.14%あり、全体的にKF-1と類似した化学組成をもつ。

(4) KF-4

D 1区堅穴住居跡のカマド脇から出土した鉄済。表皮は赤褐色を呈し赤鶴の感じがする。全体的に黒褐色の破面だが、部分的に金属光沢に近い灰色の面を見る。比重6.3。

鉱物組織(図版18)は、他の供試試料のそれと全く違って、格子組織の大きなイルミナイト(*Ilmenite*: $FeO \cdot TiO_2$)と白色板状の結晶ブショド・ブルーカイト(*Pseude-brookite*: $2FeO \cdot TiO_2$)、ガラス質で構成されている。X線回折(第6表)では、イルミナイト、マグネタイトおよびフェアライトが同定された。

成分組成(第7表)でも、 TiO_2 が22.8%と非常に高く、供試試料中、特異な鉄済である。その割には、造済成分が18.3%と低く、T・Feの45%に過ぎず、鉱物組織中のイルミナイトの存在を裏づけている。

住居内から出土したので、鍛冶済だろうと考えたが、顕微鏡による鉱物組織、それに化学組織を加えて鑑定すると、製鍊済と推定され、鍛冶に関係のない済の混入と思われる。鉄收率が悪かったか、還元途中の炉内済だろう。

(5) KF-5

D 1区堅穴住居跡の床面から出土した2.8 cm × 3.6 cmの小さな鉄済。表面は褐色を呈し、小孔が多い。破面は黒褐色で、炭の嗜み込みが見られる。

鉱物組織(図版18)は、灰色長柱状のフェアライトを地に、白色ぶどう状のウスタイトがよく発達しているのを示している。典型的な鍛冶済の組織である。

成分組成(第7表)は、 TiO_2 が3.04%と低く、KF-2と類似した組成だが、酸化第一鉄(FeO)が48.4%と高く、ウスタイトの存在を裏づける。これは、精錬過程での酸化作用で生じた鐵治滓であることを示している。

(6) $TiO_2/T \cdot Fe$ - 遺滓成分/ $T \cdot Fe$ 相関図

出土鐵滓が、製錬、鍛冶のどの過程で形成されたかをより確実に判断するため、第47図のような相関図を作成した。

参考のため、県内出土の鐵滓と関東地方の製錬滓・鍛冶滓のそれもプロットしたもの。

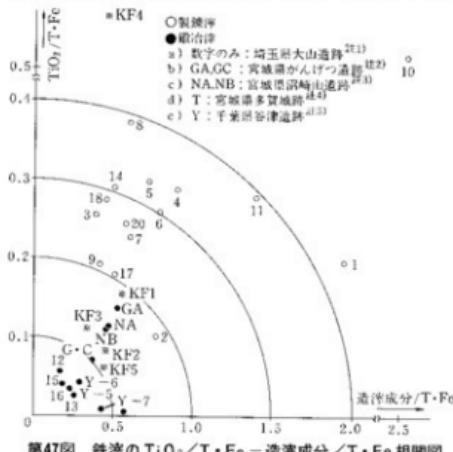
関東地方出土鐵滓の場合には、製錬滓と鍛冶滓の区別が割合はっきりしているのが分かる。その中間に県内出土の鐵治滓がある。

KF-4は製錬滓と推定されるが、他の製錬滓と比べると $TiO_2/T \cdot Fe$ が非常に高く、原鉱砂鉄中の TiO_2 含有量が大きいことを示している。

KF-1, 2, 3, 5は、県内に於ける平均的な鍛冶滓で、関東地方のそれより、 $TiO_2/T \cdot Fe$ が高く、未還元鉄部分を多く含んだ素材を鍛造した際発生したものだろう。

4. まとめ

- (1) 鬼ノ神山貝塚出土鐵滓は、堅穴住居跡や第1貝塚と同じく、奈良～平安時代の遺物といえる。
- (2) 鍛冶滓が多いが、中に製錬滓が混入している。
- (3) 鍛冶滓、製錬滓ともに赤目系砂鉄を原鉱にしたものと思われるが、鍛冶の素材は未還元鉄部分を多く含んでいたと推定される。



第47図 鐵滓の $TiO_2/T \cdot Fe$ - 遺滓成分/ $T \cdot Fe$ 相関図

『謝辞』 本稿作成にあたり、成分分析やX線回折を行って下さった東北大学金属材料研究所・佐藤敬氏に衷心より感謝致します。生前、仲介の労を取って下さった元広島大学教授故丸山益輝氏のご冥福をお祈り致します。

註

- 1) 大澤正巳「大山遺跡を中心とした埼玉県出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』 1979 埼玉県教育委員会。
- 2) 鴨田勝彦「鉄津について」『がんげつ遺跡』 1977 濱峰町教育委員会。
- 3) 鴨田勝彦「宮城県豊里町沼崎遺跡鐵冶遺構と出土鉄滓」『沼崎山遺跡』 1980 豊里町教育委員会。
- 4) 斎田敬郎「多賀城鐵冶工房遺構と出土鉄滓」『多賀城調査研究所年報 1976』 1977
- 5) 大澤正巳「千葉市谷津遺跡を中心とした千葉県下の古代製鉄について」 1981 たたら研究大会。

鬼ノ神山貝塚出土の貝類

金子 浩昌

1

鬼ノ神山貝塚からは5カ所で貝塚が知られ、それらを今回の発掘によって調査することができた。貝塚の個々についての規模、形成時期は別項に詳述されている通りであるが、その概要是、第2・3・5貝塚が大和A・A'期、特にA期に比定されるものであり、第1貝塚は歴史時代の平安初期のものとみられている。ただ、第4貝塚については、その時期を明らかにし得るような資料が検出されなかったという。

鬼ノ神山貝塚における貝塚の規模は5つの貝塚が各様であって、トレーナーのセクションでみると限りでは、第3貝塚が最も規模が大きく、それに比べて他の貝塚はいずれもはるかに規模の小さいものであった。今、それぞれの貝塚についての概要を述べる。

第1貝塚

c ~ c' sectionにおいて検出された貝塚で、長さ1.3m、最も深いところで15cmを算する程のものである。貝層は混土貝層を呈するもので、貝の保存は比較的良好で、種類もウミニナ、スガイ、オキシジミ、マガキなど僅かではあるが含まれていた。

貝塚の主体となる貝はアサリであって、ハマグリはその1%程度を占めるものであった。

アサリは殻長 ℓ 43.0、殻高 h 32.0 mmになるのが最大型で、これに近い殻の数は右側殻で3個位であって、その他は ℓ 35.0、 h 40.0 mm前後のものであった。

ハマグリは、 ℓ 27.0、 h 40.0 mm前後の中型が約4%， ℓ 31.0、 h 30.0 mm前後の小型の殻が約1%含まれていた。

第1貝塚では珍らしく、オキシジミが1個ではあるが検出され、ウミニナ、スガイも各1個あった。しかし、これらはいずれも破損していて、大きさを正確に知るまでに至らなかつたものである。マガキの出土も9個ではあったが検出された。殻は小さく、 h 40.0 ~ 70.0 mm程度のものであった。

第2貝塚

a ~ a' sectionでみると、長さ1.4m、厚いところで40 cm程である。この貝塚については、サンプリング資料が手元にないので詳細を欠くが、おそらくアサリを主体とした混土貝塚であり、次に述べる第3貝塚と貝殻の性格としては大差のないものであったと思われる。

第3貝塚

最も規模の大きい貝塚で、*a-a' section*図では長さ3.4m、厚いところで80cmに達するものであった。貝層も混土貝層ではあるが、他の貝塚に比べては混土率も低く、その点では純貝層的な感じのするものであったようである。

貝はアサリを主体として、貝の保存状況も良好であった。アサリは*l.* 45.0, *h.* 35.0 mm前後のものが大型で、これは全体の1割に満たぬ程である。数の多いのは*l.* 33.0, *h.* 25.0 mm前後の中小型のものであることは他の貝塚と変わりないようである。

ハマグリは、アサリに比べてかなり少なく、%程度の数であった。殻形は、*l.* 65.0, *h.* 53.0 mmが最大型で僅かに1個をみたのみであり、*l.* 48.0, *h.* 38.0 mmが中型のもので1割弱、その他は*l.* 35.0, *h.* 33.0 mmの小さい殻であった。

シオフキがやや目立ったのもこの貝層である。*l.* 43.0, *h.* 35.0 mmの殻から、*l.* 48.0 *h.* 43.0 mm位の殻がみられた。シオフキの殻形は、アサリやハマグリに比べて大きな差が目立たぬようである。これは、別の地域の貝塚の場合でも同じような傾向をみる。

マガキは、30個程の殻があったが、ほぼ完存するのは9個で、*h.* はいずれも50.0 mm未満、小さい殻は*h.* 36.0 mmであった。このような小さいカキの1個は左右の殻が合わさっ

第8表 各貝塚における貝類の出現率表

貝類	第1貝塚			第3貝塚			第4貝塚			第5貝塚		
	R	L	%	R	L	%	R	L	%	R	L	%
腹足綱												
スガイ	0	0		0	0		0	0		0	0	
ウミナ	0	0		36	3.60		0	0		3	0.98	
ホソヤツメタガイ	0	0		0	0		0	0		3	0.98	
二枚貝綱												
マガキ	0	0	0	15	15	1.50	0	0	0	0	0	0
ハマグリ	(3)	9	18.75	(108)	129	12.92	(18)	20	19.2	(204)	219	71.57
オキシジミガイ	0	0	0	2	2	0.20	0	0	0	0	0	0
アサリ	36	(24)	75.0	(711)	765	76.65	84	(78)	80.77	75	(51)	24.50
シオフキ	3	0	6.25	51	(27)	5.10	0	0	0	(3)	6	1.96
計	48	100		998	99.97		104	99.97		306	99.99	

※ 同一層より幾つか採集されているブロック上のうち、貝殻の保存の良い資料を選び、約27,000 cm³の採集土より検出したものである。

ているものであった。

オキシジミは、左右の殻が各3個、別個体のものがあったにすぎない。

巻貝にウミニナがあったが、12個中4個が最大殻径10.0mm以上になり、他は径6.0～7.0mm位の細かい殻を含むものであった。

第4貝塚

$y-y'$ section の5層でみられた長さ2.3m、厚さ10cm程の混土貝層である。貝殻の保存が悪く、破碎された殻が多いために殻の数量を調べるのが困難であった。また、ハマグリ、アサリのように形態的によく似ている貝では、殻表面が剥離してしまうと区別するのが難しくなる。このようなわけで、表記した数字には誤りがあるかも知れないのであるが、アサリを主体とする様相がここでもみられたことはほぼ間違いないであろう。ただ、殻形については、完存する殻が数個を数えるのみで、全体的な性格をうかがうことができない。

第5貝塚

$a-a'$ section の第12層にみられた混土貝層で、第3貝塚の延長上にある。長さは2.8mで厚さは部分的であるが、15cm位である。この層も貝殻の保存は必ずしも良好ではなく、採集されている貝殻片の量の割には完存もしくはそれに近い貝殻が少ない。この貝層での特徴は、ハマグリとアサリの比率がこれまでの層の場合と異なり、ハマグリが主体でアサリがこれに次いでいる。この点は注目しておいてよい特徴であろう。

ハマグリは、 ℓ . 55.0, h . 45.0mmのが最大型で、 ℓ . 48.0, h . 40.0mm位までの中型のものが約1/3で、他は ℓ . 40.0mm未満の小型のものになる。小型のハマグリのやや多い傾向がありそうである。アサリは、 ℓ . 36.0, h . 26.0mm前後のものが多かった。

その他には、シオフキが僅かにあり、巻貝でウミニナ3とホソヤツメタガイ3個があった。ホソヤツメタガイは最大殻径40.5mm程の小形のものであった。

2

鬼ノ神山貝塚に点在する貝塚から採集された動物関係の遺物は上記した貝類のみであった。種名は次の通りである。

軟体動物 *Mollusca*

腹足綱 *Gastropoda*

1 スガイ *Lunella coronata coreensis*

2 ウミニナ *Batillaria multiformis*

3 ホソヤツメタガイ *Neverita hosoyai*

二枚貝綱 *Pelecyboda*

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| 1 マガキ | <i>Crassostrea gigas</i> |
| 2 ハマグリ | <i>Meretrix lusoria</i> |
| 3 オキシジミガイ | <i>Cyclina sinensis</i> |
| 4 アサリ | <i>Ruditapes philippinarum</i> |
| 5 シオフキ | <i>Mactra veneriformis</i> |

腹足類3種、二枚貝類5種、計8種である。貝塚から知られる貝の種類としては少い方であり、特に、七ヶ浜町の貝塚としては非常に少ない例ではないかと思うのである。例えば同じ七ヶ浜町にある縄文後晩期の二月田貝塚などでは、腹足綱12種、二枚貝綱13種、計25種類が知られ、この程度のがまた、普通の貝塚での様相といつても過言ではあるまい。もっとも、貝塚における貝種数は、その立地する自然的な条件に深くかかわるもので、七ヶ浜町の半島状の地形に分布する貝塚の多くは、外海系の特徴をもつ例が知られるのである。例えば、大木団貝塚の前期貝塚ではスガイを主体とする厚い貝層が堆積し、また前述した二月田貝塚でも、アサリを主体としながら、各種の岩礁性の小型の巻貝ースガイ、クボガイ、コシダカガンガラ、イシダタミーを多く含むものであった。このような貝塚に比べると、鬼ノ神山での例は、アサリを主体としてハマグリ、オキシジミ、シオフキという砂泥底種のみに限られるというもので、七ヶ浜貝塚群のなかでは特殊な貝類相とみなければならないと思う。おそらく、鬼ノ神山での貝類の採集は、貝塚のある低丘陵の南にあった小さな入江内で行なわれたものであろう。貝塚の立地が、この地域の他の貝塚に比べて外海に近く位置しないで、入江の殆んど最奥部にあることと無関係ではないであろう。それにしても、決して広くはない入江の奥である。貝の採集にそれ程適した場所とも思われない立地状況は、やはり貝採集を目的とした立地ではなかったようである。

ところで、本貝塚での特徴に、貝塚から鳥、獸、魚類などの骨を全く出土しなかったことがある。全くその痕跡もみられなかったことは、この地域の貝塚としては珍しい例といわねばならないであろう。同じ七ヶ浜町にある弥生時代の貝塚である東宮浜での場合は、鳥、獸、魚類の骨をかなりの量出土し、さらに漁撈用の鉛頭なども知られている。これらの貝塚に比べると、鬼ノ神山貝塚の場合は如何にもこうした遺物に乏しい。ただ、貝塚における遺物の出土状況が、すべて当時の様相を示しているとは限らず、場合によっては、貝殻とその他の獸、魚類は別々に捨てることがある。縄文晩期の遺跡には、骨のみの集積例が知られている。そのようなものが本遺跡において特に検出されていないが、皆無であったとはいきれぬであろう。また、焼骨となって細片ではあるが、骨がかなりの量出土することもある。これも晩期の例に多い。このような点も、今後の調査に注意していかねばならないであろう。

IV. ま　と　め

- (1) 鬼ノ神山貝塚は、宮城県宮城郡七ヶ浜町葛蒲田浜鬼ノ神山にあり、舌状台地に挿まれた小さな入江の奥に立地している。
- (2) 発掘の結果、貝塚5、焼跡支群11、堅穴住居跡1軒のほか、多数のビット群、溝跡、堅穴遺構が検出され、繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、それに多数の製塙土器片、鉄滓が出土した。
- (3) 5貝塚のうち、第1貝塚は奈良末～平安時代に、他の4貝塚は縄文時代晚期（大洞A式）に形成されたものと推定される。いずれも、アサリ、ハマグリを主体にした小規模の貝塚で、鳥、獸、魚類の骨など貝類以外の自然遺物は発見されなかった。
- (4) 堅穴住居跡は、床面出土の須恵器坏の編年から8世紀前葉から中葉まで使用されたと推定される。
- (5) 多数のビット群、溝跡、堅穴遺構は、堅穴住居廃棄後の遺構と考えられるが、決め手がなく、性格、年代とも不明である。
- (6) 土器集積地は、縄文時代晚期（大洞A式）の製塙土器の捨て場と推定される。
- (7) 焼跡群は、縄文時代晚期（大洞A式）の製塙遺構と推定され、製塙炉である可能性が強い。
- (8) 鉄滓は、ほとんどが鍛冶滓であり、中に製鍊滓が混入していた。いずれも、赤目系砂鉄を原鉱としたと推定される。

野　　山　　遺　　跡

(A 地区)

I. 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査は、開墾時の切り通し面より西側の比較的平坦な地域を対象にして行った。この地域を設定したのは、これまでこの地域から土器が採取されたという記録があることや、地形の観察からである。

調査区は、地形等高線に沿って、北西—南東方向に21m、北東—南西方向に12mとし、3m単位のグリットを設定した。地区名は、北西側より南東側へ、アルファベットでA～G、北東側より南西側へ、算用数字で1～4と設定した。調査は、以上の28グリット内について実施した。面積は252m²である。

遺構の図面作成に当っては、遺り方を設定し、遺跡周辺の地形図作成に当ってはトラバースを組んだ。

2. 調査の経過

8月7日(日)晴 午後から、器材の準備点検を行う。

8月8日(月)雨 破入式。雨のため発掘作業は中止する。

8月9日(火)曇後晴 1区、2区の表土を剥ぐ。

8月10日(水)晴 3区の表土を剥ぐ。続いて1区、2区、3区の第2層を掘り始める。平行して、発掘区の方位、位置を確認する。

8月11日(木)雨 雨のため、発掘作業は午前中のみ。E1区、E2区、F1区、F2区、G2区の発掘作業を行う。

8月12日(金)晴 1区、2区、3区を、遺構面まで掘り下げる。10-14, 01-11の畝をはずす。

8月16日(火)雨後晴 南西側に発掘



発掘風景



実測風景

第48図 調査区と周辺の地形



区を広げ、4区を設定し、表土より遺構面まで掘り下げる。1区、2区、3区の精査をする。

8月17日(水)雨 雨のため、発掘作業は午前中のみ。造り方の設定。

8月18日(木)雨 雨のため、発掘作業は午前中のみ。4区を精査する。11-31の珪をはずす。

8月19日(金)晴 遺構面全体の精査をする。その結果、多数のピット、および土坑の輪郭を確認する。30-31、31-41、34-36、34-44の珪をはずす。

8月20日(土)曇 土坑5、土坑6の精査をする。02-22、31-33、04-14、16-36の珪をはずす。

8月21日(日)曇後晴 22-42、33-34、25-45、36-46、16-17、36-37の珪をはずす。20-27、03-43の珪のセクション図を作成する。その後、20-24、25-27、03-43の珪をはずす。

8月22日(月)晴 土坑1、土坑2、土坑3、土坑7の精査をする。14-34、24-25、05-25、06-16の珪をはずす。

8月23日(火)曇時々小雨 土坑4、土坑8、ピットの精査をする。平面実測に入る。

8月24日(水)晴 土坑2、土坑5、土坑6内のセクション図を作成する。平行して、造り方の撤去作業、遺構面のレベル取り、平面図の作成を行う。

8月25日(木)晴 土坑1、土坑3、土坑4、土坑7、土坑8内のセクション図を作成する。全体の観察を進める中で土坑9を検出し、その発掘作業を行い、記録する。最後に全体の写真撮影をする。

II. 遺構の検出

9基の土坑と190個のピットが検出された。土坑2, 土坑3, 土坑4, 土坑7, 土坑9の5基は、北西-南東方向に並んで位置し、山側に3基、土坑7の谷側に1基が位置している。ピットは、B3区, B4区, C4区, E4区, F3区, F4区を除く22区から検出されている。

1. 基本層位

発掘区内における堆積土は、山際のA1区で約22cm, 谷側のG4区で約55cmと、地形等高線に沿って低くなるほど厚くなっていた。

堆積土に若干ではあるが、陶器片、オハジキ等が含まれていたこと。出土土器の大半が細片で量が少ないと。遺構の確認が、地山直上の堆積土層面で見られたことなどから、堆積土の移動攪乱があったと考えられるが、遺構面(地山面)までの堆積土は、一応3層に大別される。上部から第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層とした。

〔第Ⅰ層〕 黒褐色(10YR 2/2)シルト層で、全域に分布する。層厚は10~36cmである。

〔第Ⅱ層〕 黒色(10YR 4/1)シルト層で、軟らかく水分が多い。北側を除く地域に分布し、低地に行くほど層厚を増す。

〔第Ⅲ層〕 暗褐色(10YR 3/1)シルト層で、やや砂っぽく、にぶい黄褐色(10YR 4/2)の粒を含む。層厚は4~20cmである。

地山は、凝灰岩の風化した二次堆積で軟らかく、にぶい黄褐色(10YR 4/2)をしている。地山面は、北-南へ8~10度の勾配で傾斜している。

2. 遺構

土坑

土坑1

〔検出面〕 A1-B1区に位置し、地山面で検出された。

〔平面形・規模〕 長軸200cm, 短軸130cmの隅丸方形である。深さ40cm。

〔堆積土〕 11層に分けられる。全体的に堆積しているのは第1層と第6層で、堆積土の大半を占める。

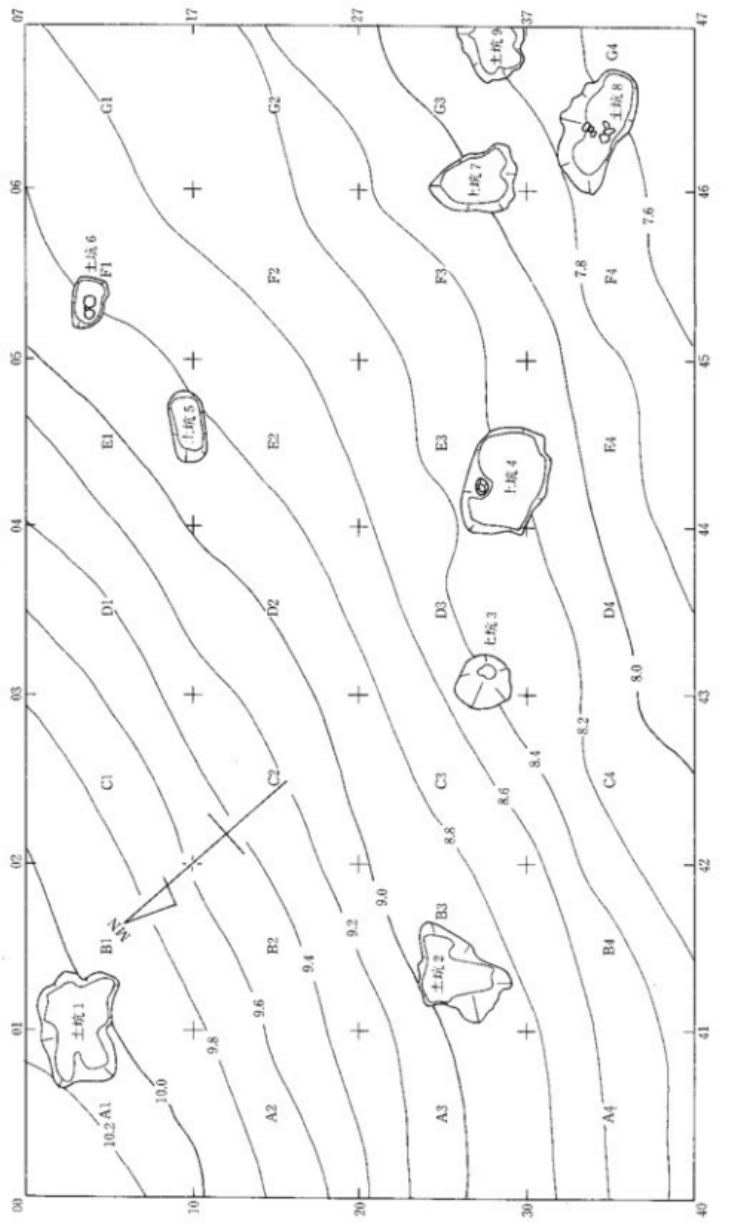
〔底面〕 地山を掘り込んで底面とし、10度ほど南側に傾斜している。中央部に焼面が見られる。



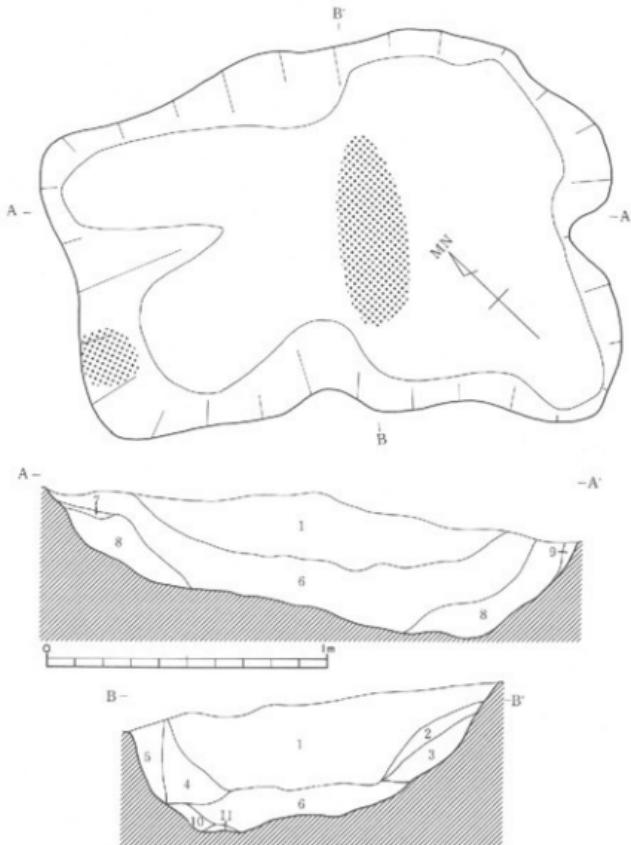
第49図 遺構配置図・基本層位

6m
0

第50圖 土 壤 配 置 圖



(壁面) 壁の高さは30~45cmで、その立ち上がり角は40~60度である。西壁の一部に焼面が見られる。



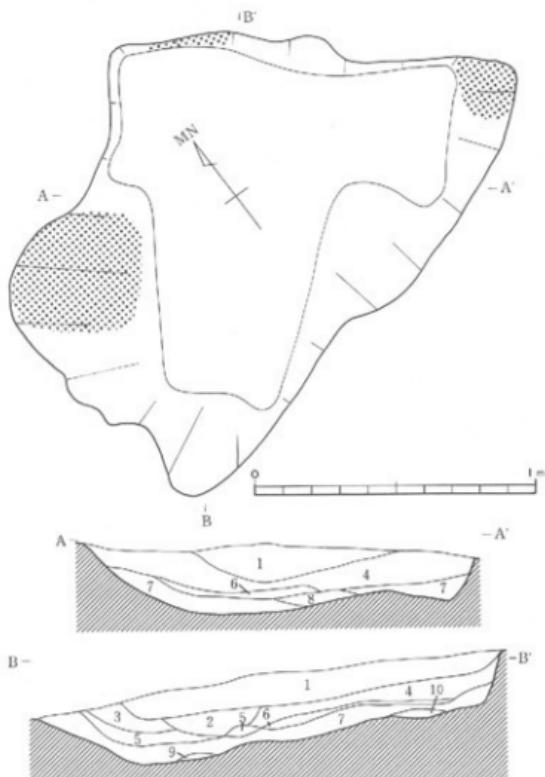
編號	土色	土性	備考	編號	土色	土性	備考
1	黒褐色(10 YR 5/6)	シルト	3・7・9・10層 は同質。	7	にぶい黄橙色(10 YR 5/4)	シルト	
2	黄褐色(10 YR 5/6)	シルト		8	にぶい黄褐色(10 YR 5/3)	シルト	
3	にぶい黄橙色(10 YR 5/2)	シルト		9	にぶい黄橙色(10 YR 5/2)	シルト	
4	にぶい黄褐色(10 YR 5/2)	シルト		10	にぶい黄橙色(10 YR 5/2)	シルト	
5	黄褐色(10 YR 5/6)	シルト		11	黒褐色(10 YR 5/6)	シルト	
6	黒褐色(10 YR 5/6)	シルト					

第51図 土坑 1

〔出土遺物〕 堆積土の第1層と第6層から繩文土器片が出土している。(図版25a)

土坑2

〔検出面〕 B3区に位置し、地山面で検出された。



層号	土 色	土 性	備 考	層号	土 色	土 性	備 考
1	褐色ない黄褐色(10YR5/2)	シルト		6	明赤褐色(10YR5/4)	砂質シルト	鐵土・炭化物を含む
2	黒 色(10YR2/2)	シルト	炭化物を多量に含む	7	暗褐 色(10YR3/4)	シルト	
3	灰 黄 褐 色(10YR5/6)	シルト		8	黒 色(10YR3/1)	シルト	炭化物を多量に含む
4	褐 色(10YR5/4)	シルト		9	明 黄 褐 色(10YR5/2)	シルト	
5	黒 褐 色(10YR3/2)	シルト		10	黒 色(10YR3/1)	シルト	炭化物を多量に含む

第52図 土 坑 2

〔平面形・規模〕 164×150 cm。ほぼ台形である。深さ25 cm。

〔堆積土〕 10層に分けられる。第2層、第8層、第10層は、黒色(10YR 1/4)シルト層で、ブロック状に入っていて、炭化物を多量に含む。

〔底面〕 地山を掘り込んで底面とし、10度ほど南西側に傾斜している。浅黄橙色(10YR 4/6)をしている。

〔壁面〕 壁の高さは15~20 cmで、その立ち上がり角は24~70度である。東、西、北壁の一部に焼面が見られる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片が出土している。(図版25b)

土坑 3

〔検出面〕 C3-D3区に位置し、地山面で検出された。

〔平面形・規模〕 長軸116 cm、短軸97 cm の橢円形である。深さ15 cm。

〔堆積土〕 2層に分けられる。第2層は、炭化物を少量含む。

〔底面〕 地山を掘り込んで底面とし、10度ほど南西側に傾斜している。地山に含まれる礫の一部が表出している。

〔壁面〕 壁の高さは約10 cmで、その立ち上がり角は28~33度である。西壁の一部に、明赤褐色(5YR 3/6)の焼面が見られる。北側の壁面は勾配がゆるく、底面との界がつきにくい。

〔出土遺物〕 なし

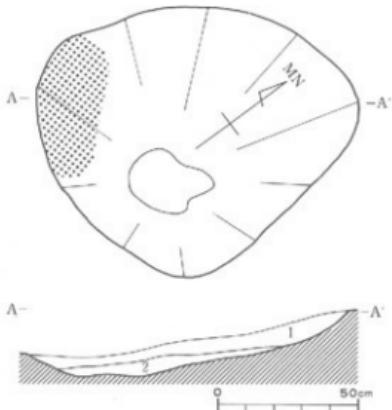
土坑 4

〔検出面〕 E3-E4区に位置し、地山面で検出された。

〔平面形・規模〕 長軸185 cm、短軸150 cmの橢円である。深さ26 cm。

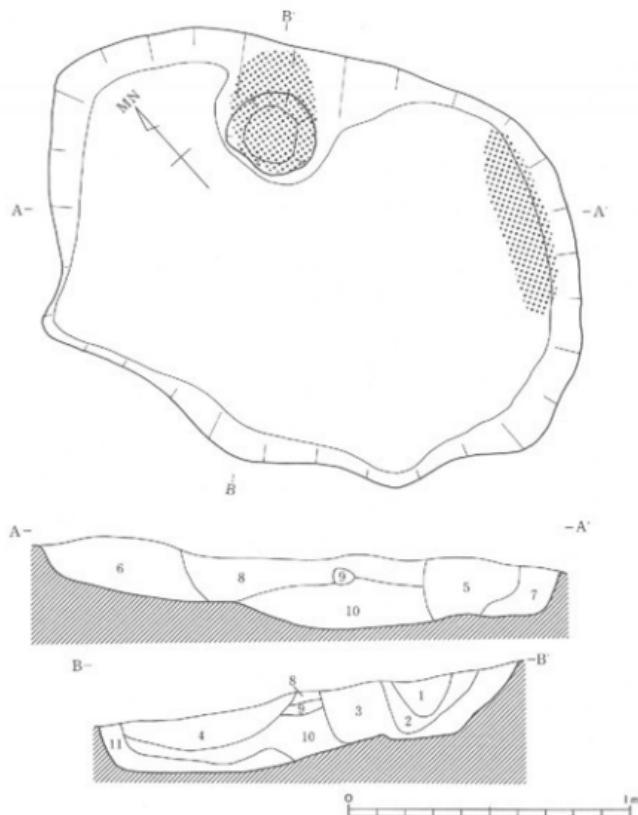
〔堆積土〕 11層に分けられる。北東側で、堆積土に掘り込んだピットが見られた。

〔底面〕 地山を掘り込んで底面とし堅い。6度ほど南西側に傾斜している。地山に含まれる礫が表出している。南東部に焼面が見られ、わずかに壁面に続く。



層番	土色	土性	備考
1	浅黄褐色(10YR 4/6)	シルト	黄褐色ロームを粒状に含む
2	黒褐色(10YR 1/4)	シルト	炭化物を含む

第53図 土坑 3



層番	土 色	土 性	備 考	層番	土 色	土 性	備 考
1	黒褐色(10 YR 3/5)	シルト		7	黒 色(10 YR 3/1)	シルト	
2	黄褐色(10 YR 5/6)	シルト		8	にふい黄褐色(10 YR 5/4)	砂質シルト	
3	明 黄褐色(10 YR 5/6)	砂質シルト	細胞を含む	9	黒褐色(10 YR 3/2)	シルト	ブロック状に入る
4	黒褐色(10 YR 3/6)	シルト		10	にふい黄褐色(10 YR 5/4)	シルト	細胞を含む
5	黄褐色(10 YR 5/6)	シルト		11	明 黄褐色(10 YR 5/4)	砂質シルト	
6	IC.にふい黄褐色(10 YR 5/4)	シルト					

第54図 土 坑 4

〔壁面〕 壁の高さは12~20cmで、その立ち上がり角は45~70度である。北東、南東壁の一部に、明赤褐色(5YR 5/6)の焼面が見られる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片が出土している。

土坑 5

〔検出面〕 E1-E2区に位置し、地山面で検出された。

〔平面形・規模〕 長軸125cm、短軸62cmの楕円形である。深さ24cm。

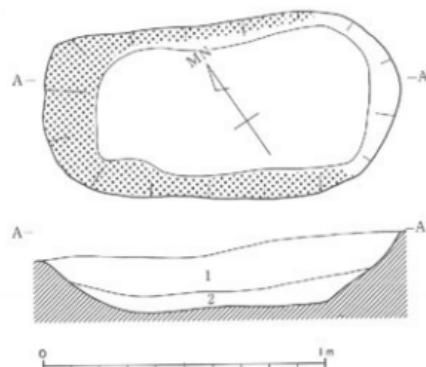
〔堆積土〕 2層に分けられる。

第2層は、炭化物を多量に含む。

〔底面〕 地山を掘り込んで底面とし、ほぼ平坦である。第2層の炭化物が付着していて黒色をしている。湿り気があり、比較的軟らかい。

〔壁面〕 壁の高さは20~25cmで、その立ち上がり角は37~44度である。南東壁を除く全壁面に、橙色(5YR 5/8)の焼面が見られる。壁面の下部も炭化物が付着していて黒色をしている。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片、製塙土器片が出土している。(図版25c)



編No	土 色	上 性	備 考
1	ICぶい黄褐色(10YR 5/4)	砂質シルト	炭化物を含む
2	黒 色(10YR 5/1)	砂質シルト	炭化物を多量に含む

第55図 土坑 5

土坑 6

〔検出面〕 F1区に位置し、地山面で検出された。

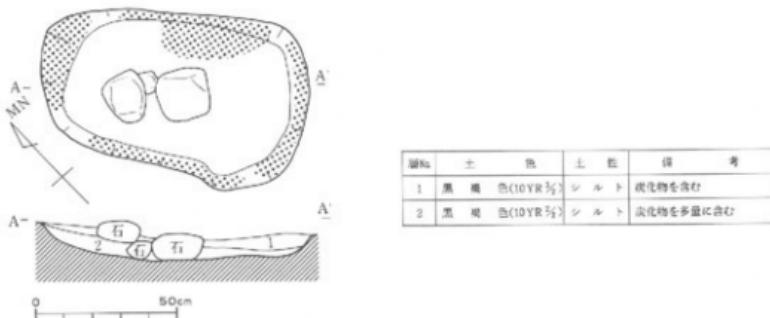
〔平面形・規模〕 長軸95cm、短軸60cmの楕円形である。深さ11cm。

〔堆積土〕 2層に分けられる。底面中央部に、明黄褐色(10YR 5/6)の石と、灰白色(10YR 8/6)の石が、また2層上面に灰白色(10YR 5/2)の石が長軸方向に並んでいる。土坑5と同じく炭化物を多量に含む堆積土である。

〔底面〕 地山を掘り込んで底面とし、ほぼ平坦である。東壁の焼面がわずかに底面に続く。第2層の炭化物が付着していて黒色をしている。

〔壁面〕 壁の高さは8~10cmで、その立ち上がり角は40~42度である。壁全体に、赤褐色(5YR 5/6)の焼面が見られる。

(出土遺物) 堆積土中から縄文土器片、製塙土器片が出土している。(図版25d)



第56図 土坑 6

土坑 7

(検出面) F3-G3区に位置し、地山面で検出された。

(平面形・規模) 長軸150cm、短軸102cmの橢円形である。深さ29cm。

(堆積土) 5層に分けられる。第1層、第3層、第4層、第5層の層序関係は、緩割りになっている。北西側の上部層には、多くの中疊があった。

(底面) 地山を掘り込んで底面とし、13度ほど南西側に傾斜している。地山の中疊、粗疊が表出して凸凹している。焼面は見られない。

(壁面) 壁の高さは10~15cmで、その立ち上がり角は30~68度である。

(出土遺物) 堆積土中から縄文土器片、製塙土器片が出土している。(図版25e)

土坑 8

(検出面) G4区に位置し、地山面で検出された。

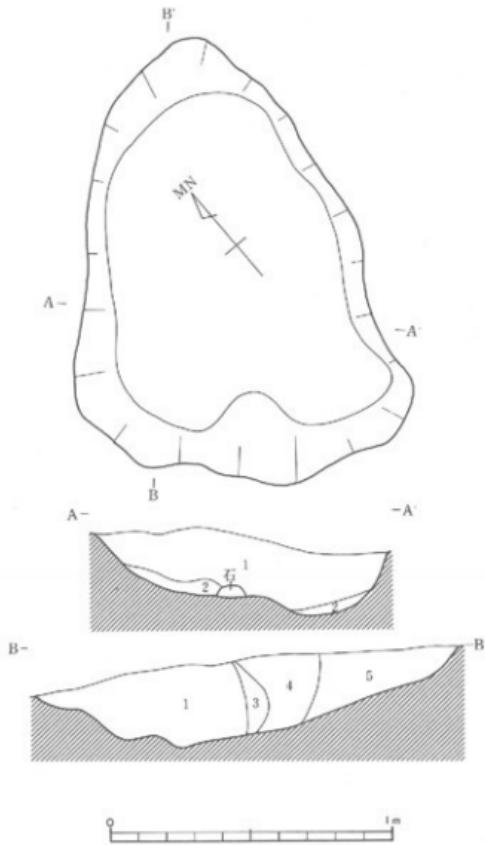
(平面形・規模) 長軸225cm、短軸115cmの橢円形である。深さ33cm。

(堆積土) 3層に分けられる。中央部に、明黄褐色(10YR 7/6)の石数個が、土坑を二分するような状態で検出された。第3層は、炭化物を多量に含む。

(底面) 地山を掘り込んで底面とし、ほぼ平坦である。中央部に、長軸47cm、短軸31cm、深さ7cmのくぼみがある。

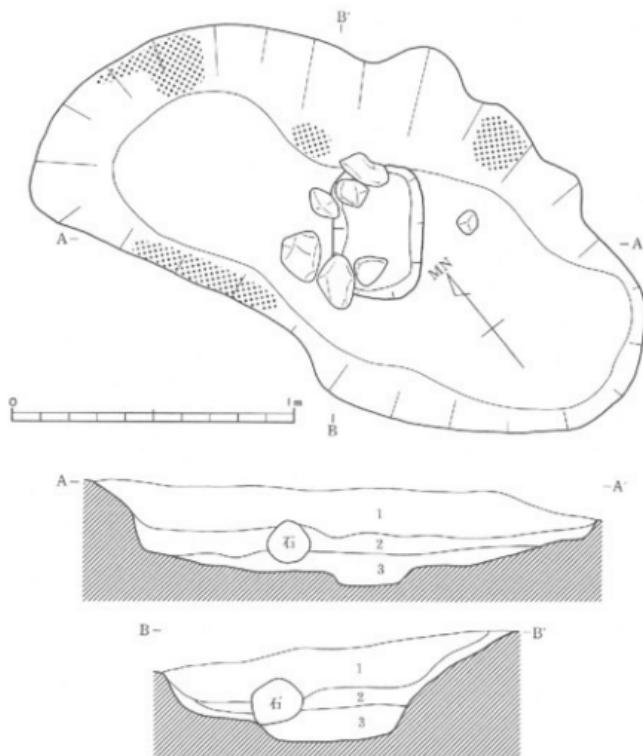
(壁面) 壁の高さは6~24cmで、その立ち上がり角は52~60度である。北壁、東壁、西壁、の一部に明赤褐色(5YR 4/8)の焼面が見られる。

(出土遺物) 堆積土中から縄文土器片、製塙土器片が出土している。(図版25f)



層番	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	炭化物を含む
2	明黄褐色(10YR 5/2)	シルト	砾の崩壊土
3	に赤い黄褐色(10YR 5/4)	シルト	
4	に赤い黄褐色(10YR 5/4)	シルト	中礫を含む
5	明赤褐色(5 YR 5/4)	砂質シルト	燒土・中礫を含む

第57図 土坑 7



層番	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10 YR 5/6)	シルト	炭化物を含む
2	暗褐色(10 YR 3/6)	シルト	少し粘性が有る
3	黒色(10 YR 3/1)	砂質シルト	炭化物を多量に含む

第58図 土坑 8

土坑 9

(検出面) G3区に位置し、地山面で検出された。

(平面形・規模) 長軸160cm(推定)、短軸120cmの橢円形である。深さ35cm。

(堆積土) 2層に分けられる。第2層は、炭化物を少量含む。

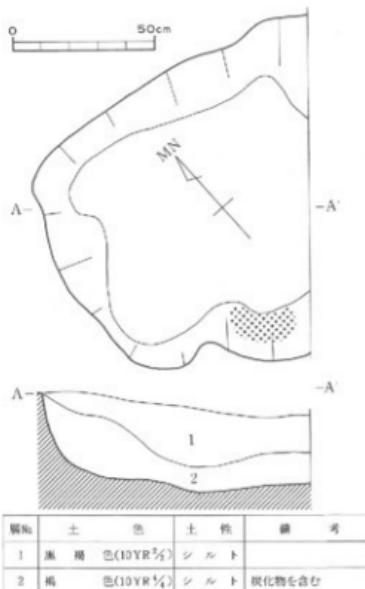
(底面) 地山を掘り込んで底面とし、ほぼ平坦である。

(壁面) 壁の高さは25 cmで、その立ち上がり角は約72度である。西壁の一部に焼面が見られる。

(出土遺物) 堆積土中から縄文土器片、製塩土器片が出土している。(図版25g)

ピット

ピットは全て地山面で検出された。柱痕跡を遺存すると思われるものが13個あったが組合せは不明である。抜き方を遺存しているものは見られない。ピット62、ピット115、ピット151、ピット159、ピット161、ピット182の堆積土から土器片、ピット153から剝片が出土している。掘り方埋土色調は、ほとんど黒色か、黒褐色をしている。以下第9表にピットを一覧表にして示す。



第59図 土坑 9

第9表 ピット一覧

(単位 cm)

ピット番号	地名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	抜き方	備考
P 1	A 1	あり	14	14	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 2	A 1	あり	19	13	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 3	A 2	あり	15	8	黒 色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 4	A 2	あり	32 × 54	10	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 5	A 2	あり	20	9	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 6	A 2	あり	20 × 33	10	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 7	A 2	あり	20 × 22	17	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 8	A 3	あり	17 × 25	12	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 9	A 3	あり	16	15	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 10	A 3	あり	21 × 28	15	黒褐色(10YR 2/1)	あり	10	黒 極色(10YR 2/1)	なし	
P 11	A 3	あり	24 × 18	18	黒褐色(10YR 2/1)	あり	11	赤ぶい黄褐色(10YR 4/1)	なし	
P 12	A 3	あり	17	8	黒 色(10YR 2/1)	あり	5	黒 極色(10YR 2/1)	なし	
P 13	A 3	あり	35 × 29	10	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 14	A 3	あり	16	10	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 15	A 3	あり	24 × 20	12	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 16	A 3	あり	16 × 14	8	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 17	A 3	あり	18	8	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 18	A 3	あり	13 × 17	12	黒褐色(10YR 2/1)	なし			なし	

ビット番号	地区名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方/埋土色調	柱種	柱	柱根跡色調	抜き方	備考
P 19	A 3	あり	19	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 20	A 3	あり	12×7	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 21	A 4	あり	25×30	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 22	A 4	あり	23×15	7	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 23	A 4	あり	24×21	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 24	A 4	あり	14	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 25	A 4	あり	25	5	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 26	A 4	あり	40×23	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 27	A 4	あり	40×23	14	黒褐色(10YR 5/2)	あり	15	黒褐色(10YR 5/2)	なし	
P 28	B 1	あり	27	12	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 29	B 1	凹み	30×50	17	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 30	B 1	あり	15×20	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 31	B 1	あり	31×19	23	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 32	B 1	あり	25×21	12	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 33	B 1	凹み	34×100	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 34	B 1	凹み	90×45	22	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 35	B 1	あり	18	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 36	B 2	あり	20	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 37	B 2	あり	16×10	5	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 38	B 2	あり	14	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 39	B 2	あり	23	4	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 40	B 2	あり	40×26	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 41	B 2	あり	26×21	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 42	B 2	あり	18×16	7	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 43	B 2	あり	20×15	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 44	B 2	あり	16×15	16	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 45	B 2	あり	40×28	27	黒褐色(10YR 5/2)	あり	12	暗褐色(10YR 4/2)	なし	炭化物を含む
P 46	C 1	あり	25×20	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 47	C 1	あり	20	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 48	C 1	あり	20×25	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 49	C 1	あり	23	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 50	C 1	あり	40×15	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 51	C 1	あり	25	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 52	C 1	あり	22×19	15	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 53	C 1	あり	38×35	35	黒褐色(10YR 5/2)	あり	12	暗褐色(10YR 4/2)	なし	
P 54	C 1	あり	18×15	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 55	C 1	あり	33×16	12	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 56	C 1	あり	26×17	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 57	C 1	あり	15	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 58	C 1	あり	21×17	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 59	C 1	あり	17	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 60	C 2	あり	26×32	19	黒褐色(10YR 5/2)	あり	11	暗褐色(10YR 4/2)	なし	
P 61	C 2	あり	31×21	17	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 62	C 2	あり	59×33	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 63	C 2	あり	35×27	36	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 64	C 2	あり	17×22	7	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 65	C 2	あり	20×14	6	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 66	C 2	あり	25	12	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 67	C 2	あり	30	6	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 68	C 2	あり	15	7	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 69	C 2	あり	30×20	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 70	C 3	あり	20×25	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 71	C 3	あり	30×34	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 72	C 3	あり	26×30	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 73	C 3	あり	50×25	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 74	C 3	あり	34×50	18	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 75	C 3	あり	26×32	15	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 76	C 3	あり	20×25	20	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	

土器破片
埋土理上:砂質

ピット番号	地区名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱模	透	柱 模 線 色 調	抜き方	備考
P 77	D 1	あり	22	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 78	D 1	あり	20	9	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 79	D 1	あり	19	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 80	D 1	あり	23 × 17	12	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 81	D 1	あり	25	13	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 82	D 1	あり	15	10	暗褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 83	D 1	あり	13	9	暗褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 84	D 1	あり	18 × 12	9	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 85	D 1	あり	11	31	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 86	D 1	あり	17	19	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 87	D 1	あり	23 × 20	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 88	D 1	あり	12	8	黒 色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 89	D 1	あり	21 × 14	11	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 90	D 2	あり	16 × 21	12	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 91	D 2	あり	20 × 25	10	黒褐色(10YR 3/2)	あり	9 暗	色(10YR 3/2)	なし	
P 92	D 2	あり	16	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	堆上: 砂質
P 93	D 2	あり	23	6	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 94	D 2	あり	20	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	上部に焼土有
P 95	D 2	あり	19	14	黒褐色(10YR 3/2)	あり	7 暗	色(10YR 3/2)	なし	
P 96	D 2	あり	11 × 15	9	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 97	D 2	あり	14 × 21	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 98	D 2	あり	10 × 14	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 99	D 2	あり	19	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 100	D 2	あり	23 × 33	7	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 101	D 2	あり	28 × 33	13	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 102	D 2	あり	19 × 26	5	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 103	D 3	あり	20 × 25	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 104	D 3	あり	14 × 29	4	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 105	D 3	あり	40 × 33	11	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 106	D 3	あり	35 × 31	11	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 107	D 4	あり	22 × 34	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 108	D 4	あり	21 × 17	7	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 109	E 1	あり	14 × 8	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 110	E 1	あり	10	13	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 111	E 1	あり	10	7	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 112	E 2	あり	11	7	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 113	E 2	あり	10	6	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 114	E 2	あり	11 × 14	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 115	E 2	あり	15 × 28	13	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 116	E 2	あり	16	5	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 117	E 2	あり	20 × 16	11	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 118	E 2	あり	17	11	黒褐色(10YR 3/2)	あり	7 暗	色(10YR 3/2)	なし	
P 119	E 2	あり	18 × 16	6	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 120	E 2	あり	30 × 25	15	黒褐色(10YR 3/2)	あり	10 暗	暗 色(10YR 3/2)	なし	
P 121	E 2	あり	36 × 25	5	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	炭化物を含む
P 122	E 2	あり	22 × 19	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	炭化物を含む
P 123	E 2	あり	17 × 15	16	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 124	E 2	あり	36 × 11	9	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 125	E 2	あり	12 × 10	5	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 126	E 2	あり	20 × 18	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 127	E 2	あり	23 × 22	16	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 128	E 2	あり	45 × 40	18	黒褐色(10YR 3/2)	あり	15 暗	色(10YR 3/2)	なし	
P 129	E 2	あり	30 × 35	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 130	E 2	あり	44 × 54	18	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 131	E 2	団み	26 × 75	21	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 132	E 2	団み	21 × 40	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 133	E 3	あり	28 × 20	18	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 134	E 2	あり	16 × 20	28	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	

ピット番号	地名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方理土色調	柱種	径	柱 施 路 色 調	旋き方	備 考
P 135	E 2	あり	27	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 136	E 2	凹み	34×80	5	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 137	E 2	あり	24	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 138	E 3	あり	43×37	12	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 139	F 1	あり	19×21	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 140	F 1	あり	23×18	6	暗褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 141	F 1	あり	18×12	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 142	F 1	あり	11	20	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 143	F 1	あり	16	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 144	F 1	あり	38×30	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 145	F 1	あり	18	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 146	F 1	凹み	12	8	暗褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 147	F 1	凹み	29×16	6	暗褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 148	F 1	あり	35	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 149	F 1	あり	20	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 150	F 1	凹み	17×35	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 151	F 1	あり	25×27	13	黒褐色(10YR 5/2)	あり	10	暗 痕 染(10YR 5/2)	なし	織文土器破片
P 152	F 1	あり	28	7	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 153	F 1	あり	20×16	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	剥片
P 154	F 1	あり	20×27	10	黒 色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 155	F 1	あり	14×21	6	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 156	F 2	あり	31×22	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 157	F 2	あり	21	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 158	F 2	あり	13×11	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 159	F 2	あり	18	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	土器破片・貝片
P 160	F 2	あり	30×12	5	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 161	F 2	あり	16×13	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	上器破片
P 162	F 2	あり	15	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 163	F 2	あり	40×28	16	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 164	F 2	あり	24×16	20	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 165	G 1	あり	23	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 166	G 1	あり	22	15	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 167	G 1	あり	25	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 168	G 1	あり	43×25	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 169	G 1	あり	20	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 170	G 1	あり	12	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 171	G 1	あり	15	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 172	G 1	あり	20	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 173	G 1	あり	18	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 174	G 1	凹み	8	6	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 175	G 1	あり	40×21	14	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 176	G 1	あり	11	11	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 177	G 1	あり	20×17	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 178	G 1	あり	18×14	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 179	G 1	あり	18×20	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 180	G 1	凹み	100×40	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 181	G 2	あり	17×19	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 182	G 2	あり	15×24	8	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	織文土器破片
P 183	G 2	凹み	11	5	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 184	G 2	あり	13	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 185	G 2	あり	10×19	7	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 186	G 2	あり	14×23	10	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 187	G 3	あり	10	9	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 188	G 3	凹み	16	12	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 189	G 3	凹み	8	6	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	
P 190	G 4	あり	14×18	13	黒褐色(10YR 5/2)	なし			なし	

III. 遺物

〔遺物の出土状況〕 遺物の種類は、縄文土器、弥生土器、製塙土器、剝片などである。出土点数から見れば、縄文土器が大半を占めるがほとんど破片で、個体数は不明である。土器の分布状況を地区ごとに見ると、発掘区の東側～南側に集中して見られる。各層からは、平均して出土している。遺構面からの土器出土は少ない。また、土坑ごとに見ると、土坑3以外の8基の土坑から土器片が出土しているが、堆積土中からの出土が多く、底面からの出土は少ない。

1. 土器 (縄文土器、弥生土器、製塙土器)

鉢(第60図)

土坑1の堆積土中から出土した。内面は黄褐色、外面は明黄褐色で、外面胴部に、斜行縄文(LR)が施されている。口縁部外面は横ナデ、内面はナデ調整が施されている。口頸部は、わずかに外傾している。胎土には、石英粒が含まれている。胴部に、粘土の継ぎ目が確認できる。胴部器厚0.6～0.7cm、口径17.0cm、最大径19.0cmと推定できる。所属時期



神岡 番号	土器 番号	出 土 地 区 ・ 層 位	部 位	器厚(mm)	調 整 整		色 調		備 考
					内 面	外 面	内 面	外 面	
第60図	1	土坑1	口縁部～胴部	6～7	ナ デ	横 調 文	黄 褐 色	明 黄 褐 色	鉢

第60図 縄文土器

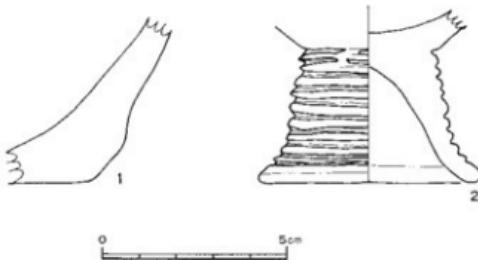
は縄文晩期(大洞A式)と思われる。

平底 壕(第61図-1)

C3区第3層から出土した。内面、外面とも暗褐色で、胎土には微細な雲母粒が含まれている。文様は施されていない。所属時期は不明である。

台付小鉢(第61図-2)

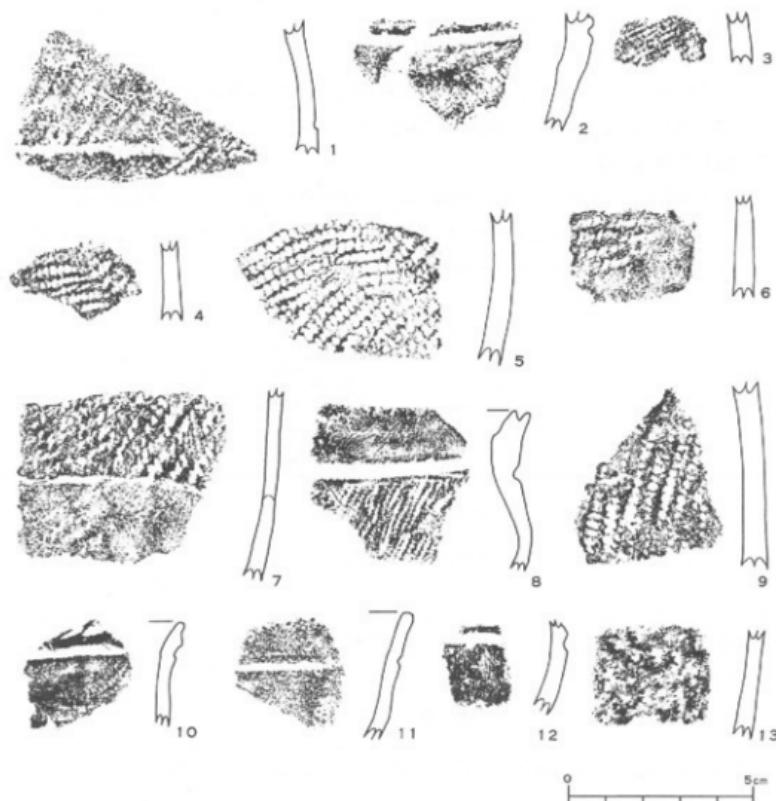
G1区遺構面から出土した。器台内面底部は、鏡磨き調整が施されていて暗褐色をしている。外面は褐色で10条の沈線が外周をめぐる。器底は、にぶい橙色をしており、胎土には微細な石英粒が含まれている。所属時期は縄文晩期(大洞A式)と思われる。



種別 番号	土器 番号	出土地 地区・層位	部 位	基厚(cm)	調 整		色		調 査 備 考
					内 面	外 面	内 面	外 面	
第61図	1	G3-第3層	底 部	ヘラミガキ	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	平底壺
	2	G1-遺構面	器 台						

第61図 縄文土器

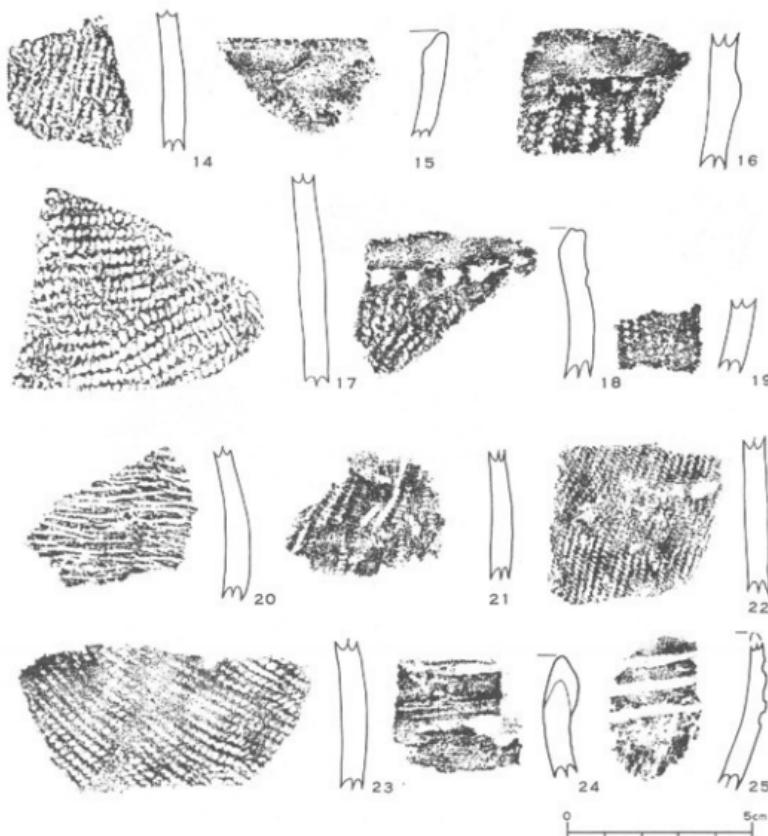
以下に比較的大きい土器片の拓影を次の図にて示す。(第62図、第63図、第64図)



0 5cm

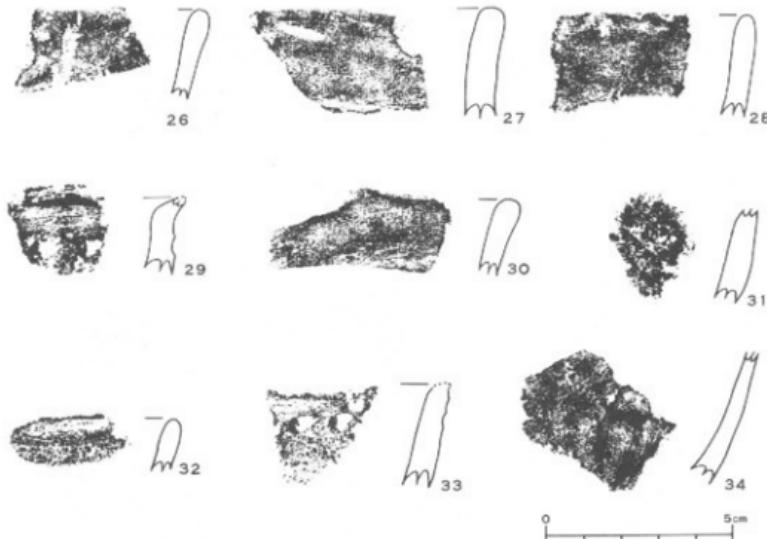
圖 番 号	土 器 番 号	出 土 地 區・ 層 位	深 位	高 度 (mm)	調 整		色 調		圖版番号	備 考
					内 面	外 面	内 面	外 面		
第62圖	1	土 坑 1	剥 離 部	5.5~5.8	ミガキ横	四	文 黄 褐色	明 黄 褐色	25-a-2	
	2	上 坑 2	口縫部	4.5~7.0	ミガキ斜	場	文 に い 黄 褐色	に い 黄 褐色	25-b-1	
	3	土 坑 5	剥 離 部	5.3~5.6	ミガキ横	鈍	文明 黄 褐色	褐	25-c-4	
	4	上 坑 6	剥 離 部	5.1~5.3	ミガキ	場	文 赤 褐色	明 赤 褐色	25-d-2	
	5	土 坑 7	剥 離 部	6.2~6.8	ミガキ横	鈍	文 に い 黄 褐色	に い 黄 褐色	25-e-1	
	6	土 坑 7	剥 離 部	4.6~5.8	ミガキ	場	文 黑 褐色	黑 褐色		
	7	土 坑 7	剥 離 部	4.1~4.9	ミガキ	斜	文 黑 褐色	黑 褐色		
	8	土 坑 8	口縫部	4.0~7.1	ヘラミガキ横	場文・ナテ場	灰 黄 褐色	に い 黄 褐色	25-f-2	
	9	土 坑 8	剥 離 部	6.5~7.0	ミガキ	鈍	文 に い 黄 褐色	明 褐 色	25-f-1	
	10	土 坑 8	口縫部	4.0~5.0	ミガキ	斜	場	暗 褐色		
	11	土 坑 8	口縫部	4.5~5.1			に い 黄 褐色	に い 黄 褐色		
	12	土 坑 8	口縫部	5.5~6.2	ミガキ		場	色 明 赤 褐色		
	13	土 坑 8	剥 離 部	5.2~5.7			暗 褐 色	明 赤 褐色		

第62圖 出 土 土 器



標本番号	土器番号	出土 地 地区・層 位	部 位	厚さ (mm)	調 整		内 面	外 面	色	圖	回収番号	備 考
					内 面	外 面						
第63図	14	土 坑 9	胸 部	5.5 ~ 6.2								
	15	G 1 - 第 I 層	口 線 部	5.5 ~ 7.0	刷毛目	繩文	明褐色	明黃褐色	25-g-10			
	16	G 4 - 第 II 層	口 線 部	7.0 ~ 9.5	ミガキ痕	繩文	灰褐色	灰褐色				大木 10
	17	G 3 - 第 II 層	胸 部	6.0 ~ 7.5	ミガキ痕	繩文	灰褐色	黑褐色				
	18	F 4 - 第 II 層	口 線 部	7.0 ~ 8.0	ミガキ痕	繩文	灰褐色	灰褐色				衛生土器
	19	土 坑 8	胸 部	5.0 ~ 5.4								
	20	F 4 - 第 III 層	胸 部	4.7 ~ 5.2	ヘラミガキ	刷毛目	黑褐色	暗赤褐色				衛生土器
	21	F 4 - 第 III 層	胸 部	5.0 ~ 5.4	ナフ	繩文	灰褐色	灰褐色	24-d-6			
	22	G 3 - 第 III 層	胸 部	5.5 ~ 6.2	ミガキ	繩文	暗褐色	明赤褐色	24-d-4			
	23	G 4 - 第 III 層	胸 部	5.9 ~ 6.5	ナフ	繩文	暗褐色	明赤褐色	24-d-3			
	24	F 1 - 第 III 层	口 線 部	5.3 ~ 8.9	ナフ	繩文	赤褐色	赤褐色				
	25	G 2 - Pit 182	胸 部	4.7 ~ 5.2			褐色	明褐色	24-e-3			

第63図 出土土器

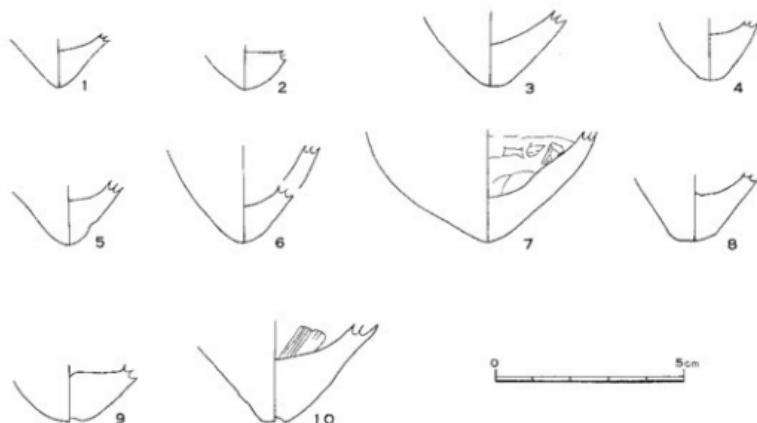


標図番号	土器番号	出上地 地区・施設	部 位	器厚(mm)	内 壁		外 壁		色 調		回版番号	備 考
					内 面	外 面	内 面	外 面	色	色		
第64図	26	G4-第Ⅱ層	口縁部	7.5-9.6	ナゲ模	ミガキ	場	場	赤	赤褐色		
	27	F4-第Ⅱ層	口縁部	7.0-9.0	ミガキ	ミガキ模	場	場	赤	赤褐色	24-d-2	
	28	G4-第Ⅱ層	口縁部	6.2-6.8	ミガキ模	ミガキ模	赤	赤	赤	赤褐色		
	29	G4-第Ⅱ層	口縁部	7.2-8.8	ミガキ模	ナゲ模	赤	赤	赤	赤褐色		非生土器
	30	F3-第Ⅰ層	口縁部	6.2-7.2	ヘラミガキ模	ヘラミガキ模	赤	赤	赤	赤褐色		
	31	G2-第Ⅲ層	肩 部	5.8-6.8			明赤	明赤	赤	赤褐色		
	32	G4-第Ⅲ層	口縁部	4.8-6.2	ミガキ	ナゲ模	赤	赤	赤	赤褐色		
	33	G4-第Ⅲ層	口縁部	6.7-7.5	ミガキ	ナゲ模	赤	赤	赤	赤褐色		非生土器
	34	G1-第Ⅰ層	肩 部	3.8-6.5	ヘラミガキ	ナゲ	明赤	明赤	赤	赤褐色		

第64図 出土土器

製塙土器(第65図)(回版24b)

底部10個(内1個は発掘区外より採取したもので、仮に地区名をH2としておく)と、部位不明の細片33点が出土した。いずれも赤色を呈し、器厚2.5~3.5mmの無文粗製土器片である。ここでは、底部のみを図にて示す。



種別番号	上器番号	図版番号	地区・属性	圓 型		色 調		底面形態
				内面	外面	内面	外面	
第66図	1	24-b-1	上坑 8			暗赤褐色		尖底
	2	24-b-2	土坑 8			褐色	褐色	尖底
	3	24-b-3	H2-第I層			褐色	黄褐色	尖底
	4	24-b-4	上坑 5			赤褐色	赤褐色一部暗褐色	尖底
	5	24-b-5	G1-第I層			赤褐色	赤褐色一部黃褐色	尖底
	6		F1 第II層 ナデ			暗褐色	暗褐色	尖底
	7	24-b-6	G1-第III層	ヘラナダミカキ	黄褐色一部水褐色	暗褐色一部黃褐色	暗褐色	尖底
	8		上坑 7			赤褐色	褐色	手底
	9	24-b-7	土坑 9			赤褐色	赤褐色	上底
	10	24-b-8	土坑 9	崩毛目状ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	上底

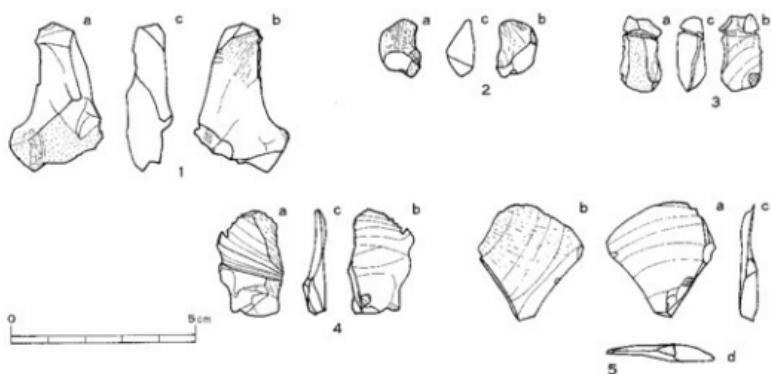
第65図 製塙土器底部

注 H2-第I層は仮表示

2. 剝片 (第66図 1~5)

5点出土した。4は、縦長剥片で打面が見られる。a面には深いリングが見られる。また、右上に大きな剥離が見られ側縁を鋭くさせている。b面の主要剥離面はなめらかで、バルブ、バルバスカー、リングが見られる。左下側縁は、欠損している。

5は、打面より末端に向って広がる扇状の縦長剥片である。a面の主要剥離面はなめらかで、リングが見られる。右下側縁のバルブ付近に剥離が見られ、剥離後、右上方よりの打撃によって、右側が欠損している。b面には、左上方よりのリング、フィッシャーが見られる。



掲図番号	石器番号	石 材	地区・層位	色 調
第66図	1	頁 岩	F1-第Ⅱ層	明褐色(5YR 7/4)
	2	石 英	F1-Pit 153	灰 白色(2.5Y 8/2)
	3	黑曜石	F2-第Ⅲ層	黑 色(10YR 8/2)
	4	頁 岩	G4-第Ⅱ層	灰 色(5Y 6/1)
	5	頁 岩	土 坑 7	暗灰黄色(2.5Y 5/2)

第66図 制 片

IV. 考察

1. 遺構

土坑

土坑は計9基検出された。いずれも、地山面で検出された。形態・規模等は、さまざまであるとまりを示さない。また、位置的にも特別なたよりではなく、土坑相互の有機的関係も見出せない。

土坑7以外の8基の土坑に焼面が確認されている。これらの焼面は、土坑の底面や壁面に見られたもので、土坑周縁には広がっていない。焼面の厚さは薄く、風化していく崩壊しやすい。また、土坑1、土坑4以外の7基の土坑からは、炭化物が出土している。

土坑6と土坑8の中央底部には、焼跡のない玉石が見られた。

土坑6内の石は、中央部に3個並んであり、それぞれ横幅は、18cm, 10cm, 19cmである。2個は底面に接し、1個は2層上面の炭層上にあった。

土坑8内の石は、横幅10~19cmで、中央部に土坑を二分するように6個あった。3個は底面に接し、残りは土坑6と同じように、炭層上にあった。これらの石の用途は不明である。

以上のことから土坑の中で火を使用したものと思われるが、性格等は不明である。また、土坑6、土坑8の底面より土器片が数点出土しているが、年代を決定する資料とはならず時期も不明である。

第10表 土坑観察表

土坑	平面形	大きさ (cm)	深さ (cm)	壁		底		堆積土内含有物	回	回数	
				壁高(cm)	立ち上がり角(度)	表面	底面の傾き(度)				
土坑1	楕丸方形	200×130	40	30~45	40~60	有	10(由内)	有	織文土器	第5回	21
土坑2	複合形	164×150	25	15~20	24~70	有	10(南北に)	無	織文土器・炭化物・鐵土	第52回	21
土坑3	椭円形	116×97	15	10	28~33	有	10(南北に)	無	炭化物	第53回	
土坑4	椭円形	185×150	26	12~20	45~70	有	6(南北に)	有	織文土器・網羅	第54回	21
土坑5	椭円形	125×82	24	20~25	37~44	有	平底	無	織文土器・製陶土器・炭化物	第55回	22
土坑6	椭円形	95×60	11	8~10	40~42	有	平底	有	織文土器・炭化物	第56回	22
土坑7	椭円形	102×150	29	10~15	30~68	無	13(南北に)	無	織文土器・製陶土器・石器・炭化物・燒土・中壁	第57回	22
土坑8	椭円形	225×115	33	6~24	52~60	有	平底	無	織文土器・製陶土器・炭化物	第58回	23
土坑9	椭円形 (推定)	160×120	35	25	72	有	平底	無	織文土器・製陶土器・炭化物	第59回	

第11表 土坑の使用痕跡による分類

焼面の状況	底面・壁面が焼けているもの	壁面が焼けているもの	焼けた痕跡が認められないもの
堆積土内炭化物			
底面上に、層をなして多量にある	土坑6	土坑5・土坑8	
下部堆積層に、少量ある		土坑3・土坑9	土坑7
ブロック状にある		土坑2	
炭化物を含まない	土坑1・土坑4		

ピット

190個という多數のピットが検出された。しかし
その性格は不明である。土坑との関連も不明である。
各区域ごとにピット数を区分してみると、第12表の
ようになり、発掘区の東側に多く分布している。ピ
ットの深さは、5~19cmに入るものが93%で大半を
占め、比較的浅い。

第12表 各地区的ピット数

	A	B	C	D	E	F	G	計
1	2	8	14	13	3	17	16	73
2	5	10	10	13	25	9	6	78
3	13		7	4	2		3	29
4	7			2			1	10
計	27	18	31	32	30	26	26	190

その他

イ集 石(図版23)

C4区の造構面上で、広さ1m四方に、10~20cmの玉石が50数個見られた。石に焼けた痕
跡は見られない。単なる上方よりの流石か、造構になるか否か、性格等は不明である。

ロ 岩石の表出(図版23)

F4区の造構面で、広さ1m四方の範囲で岩石が半分ほど表出している。造構になるか否
か、性格等は不明である。

2. 遺物

縄文土器

227点出土している。すべて破片で個体数は不明である。口縁部は、胴部からの立ち上がり
りで、①そのまま直立するもの。②外反するもの。③④において沈線をめぐらすものなど
がある。文様は、外面に縄文が施文されているものが大半を占める。

弥生土器

5点出土している。すべて破片である。頭部に刺突文があり、外反するものが3点見られ
る。そのうち2点は、刺突文の下部に縄文が施文されている。部位不明で、外面に撫糸の圧

痕文の見られるものが2点ある。

製塙土器

土器底部が10点出土している。その他部位不明の細片が33点出土している。底部の胎土には、微細な石英粒が含まれている。内、外面に文様は見られない。底部を形態分類すると、①尖底、②平底、③凹みのあるものの3形態になる。

製塙遺構との関係、年代は不明である。

第13表 製塙土器(細片・底部)の出土状況 ()内は底部の個数

各層位・ピットからの出土

地区名 層位	F 1	G 1	B 2	E 2	F 2	G 2	A 3	G 4	計
第 I 層	1	2 (1)							3 (1)
第 II 層	(1)		2			1	1	1	5 (1)
第 III 層		(1)				1			1 (1)
ピット				5	1				6
計	1 (1)	2 (2)	2	5	1	2	1	1	15 (3)

土坑からの出土

	土坑1	土坑2	土坑3	土坑4	土坑5	土坑6	土坑7	土坑8	土坑9	計
堆積土中	0	0	0	0	(1)	7	(1)	4 (1)	5 (2)	16 (5)
底面	0	0	0	0	0	2	0	0 (1)	0	2 (1)
計	0	0	0	0	(1)	9	(1)	4 (2)	5 (2)	18 (6)

3. 遺構の年代

9基の土坑と、190個のピットが検出されたが、年代を決定する遺物が伴出せず、遺構の年代は不明である。ただ、出土している土器の中に大木10、大洞A、大洞A'、弥生土器と判明可能な土器があることから、本遺跡は縄文中期末から弥生時代の遺跡と推測される。

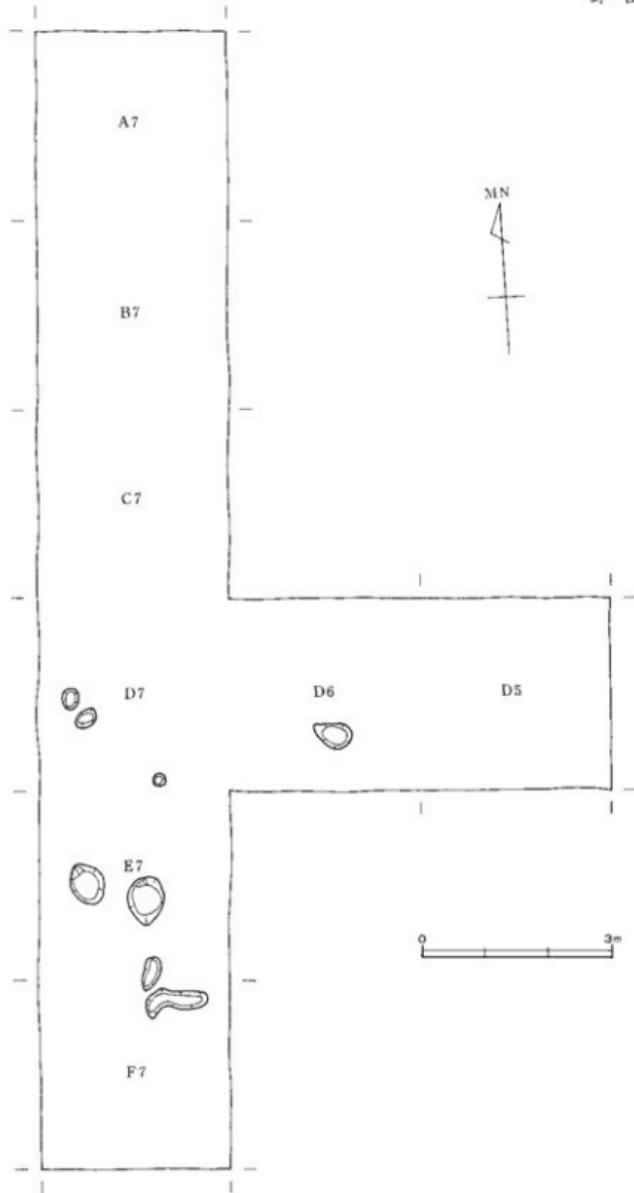
I. 調査の概要

昭和53年4月1日～2日、第1次調査区域(A地区)谷向いの緩斜面について、遺構の存否を確認するため、トレンチを設定した。トレンチは3m幅で地形等高線に沿って18m、また、これに直交して6mの長さとした。

II. 試掘の結果

1. 地山面で、円形小ピット6個、不明の小ピット2個を検出した。ピットの1つから縄文土器片1点が出土した。ピットは地山直上の堆積土層(第Ⅱ層)面で確認された。
2. 遺物は、上記土器の他、表土、第Ⅱ層から若干の縄文土器が検出された。
3. 遺構の性格

ピットは、まとまりなく散在している。その性格は不明である。地山に至る堆積土層の層序は、A地区の場合と同じであり、ピット検出面も同じである。ピット中の土器も縄文土器であることから、A地区的遺構と関連するものと思われる。また、ピットは予想に反して、南側に片寄り平坦地の南辺に近い。このことからピット群はトレンチ外にのびることはあり得るとしても、小範囲にとどまると思われる。



第67図 野山遺跡B地区遺構配置図

〔A地区・B地区のまとめ〕

1. 今回の調査面積は、A地区 252 m²、B地区 72 m² の計 324 m² である。
2. 発掘調査の結果、A地区では 9 基の土坑と 190 個のビットが検出された。B地区では 8 個のビットが検出された。
3. 土坑、ビットの性格は不明である。
4. 遺構の正確な年代は不明であるが、A地区、B地区とも縄文中期末～弥生時代の遺跡と推測される。
5. A地区と B地区の遺構は関連遺構と考えられる。

図 版

図版一
鬼ノ神山貝塚全景



遠景



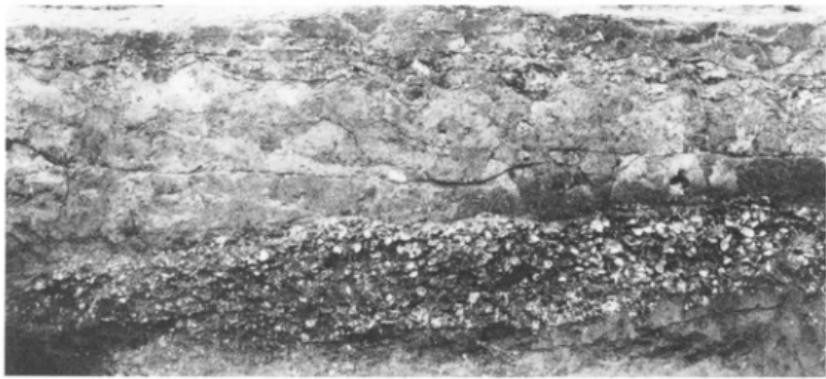
近景（発掘前）



鬼ノ神山貝塚発掘区全景



第2貝塚貝層



第3貝塚貝層



焼礫群 全域



焼礫群（北側より望む）

第 1 支 群(R1)



第 2 支 群(R2)



第 4 支 群(R4)





第5支群(R5)



第8支群(R8)



第9支群(R9)



墓穴住居跡



溝・墓穴遺構・ピット群

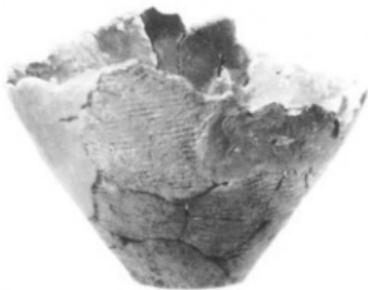
圖版七 遺物 I 繩文土器・弥生土器



1



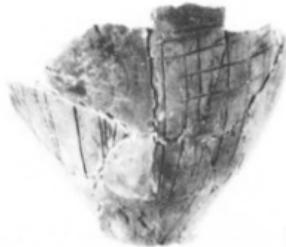
2



3



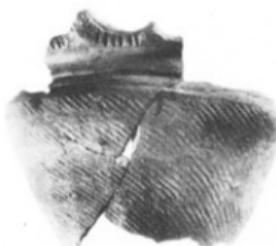
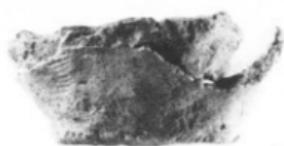
4

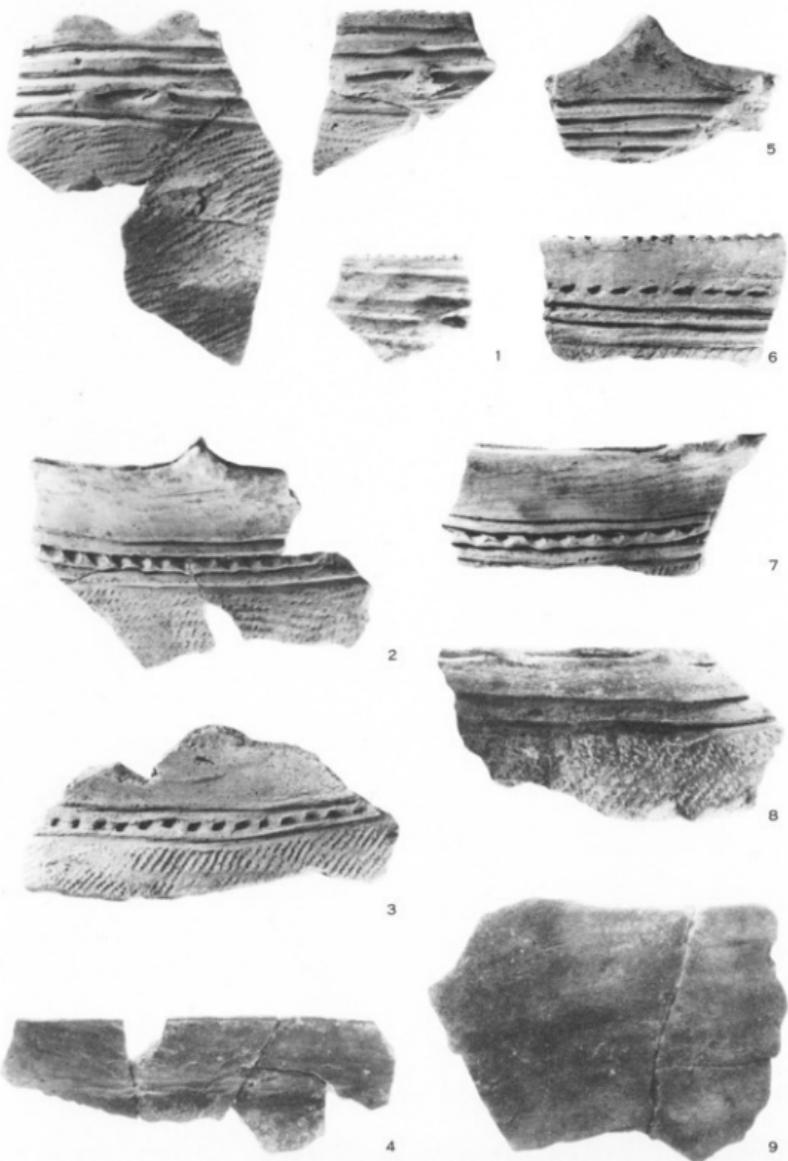


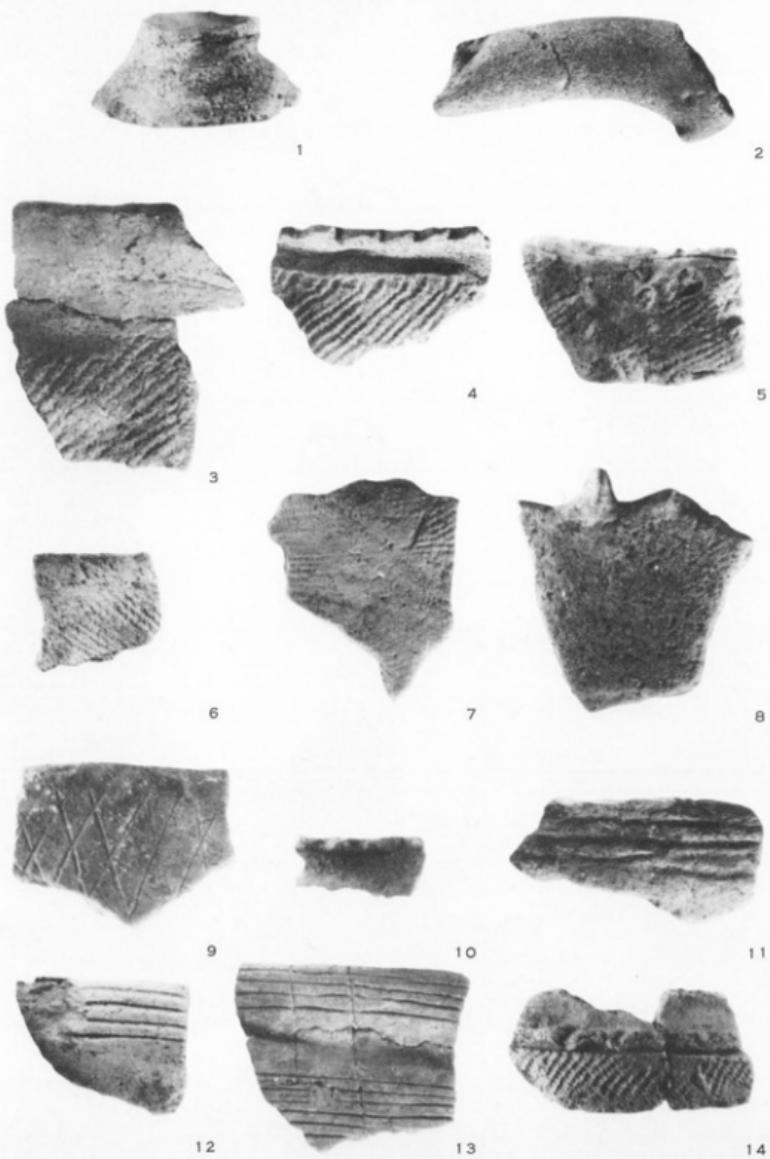
5

1~4 繩文土器 5 弥生土器

図版八 遺物II 繩文土器

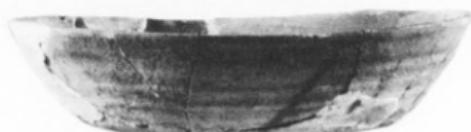






1~12 縄文土器 13~14 弥生土器

図版一一 遺物V 土師器・須恵器



1



1



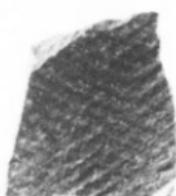
2



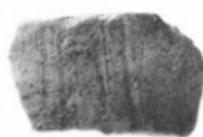
3



4



5

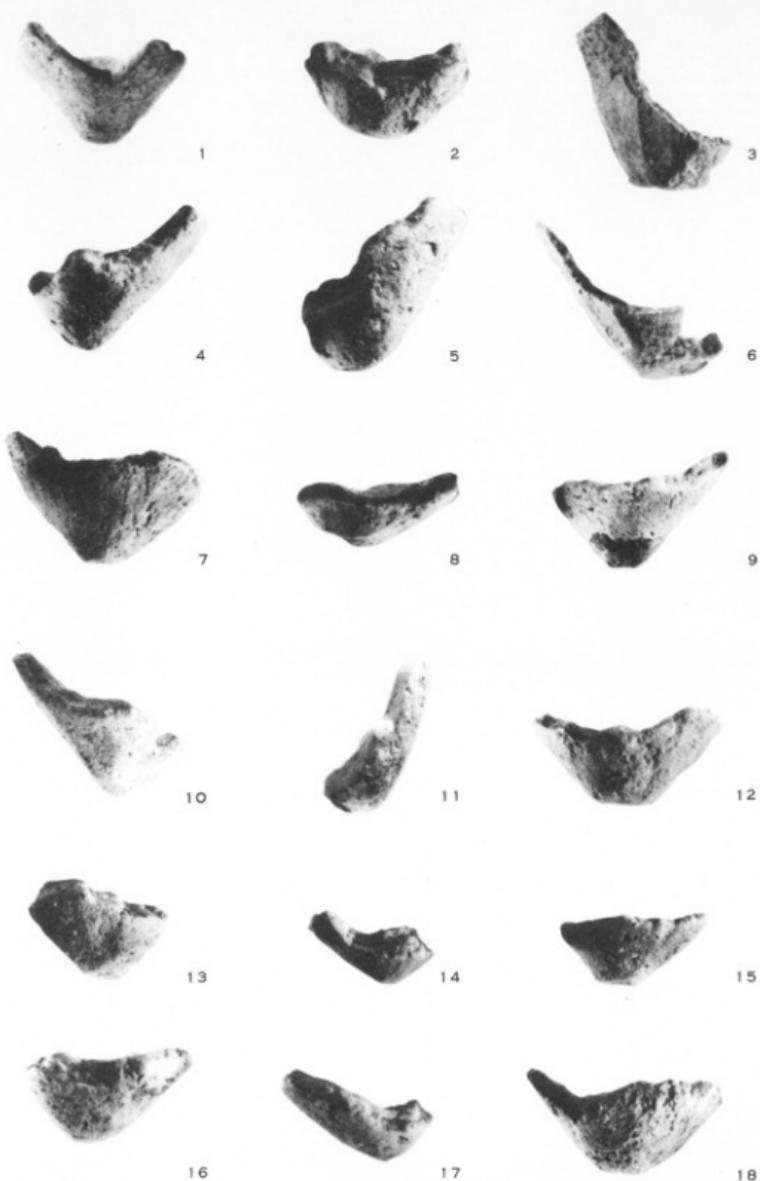


6

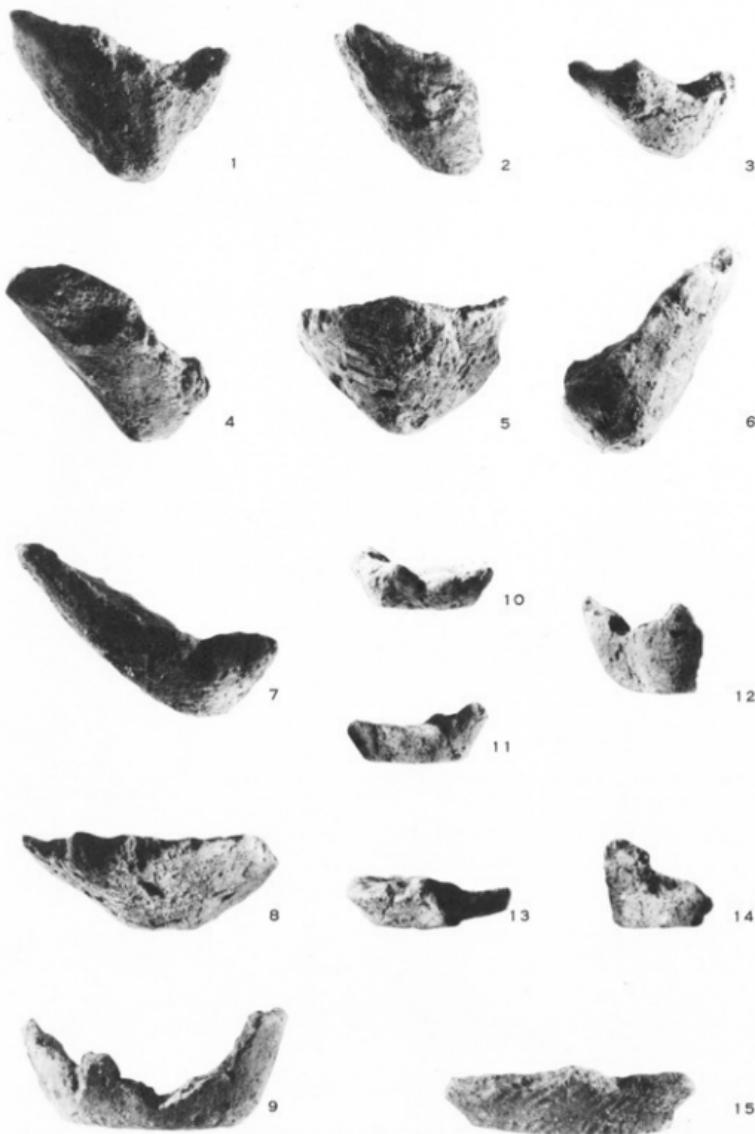


7

圖版一二 遺物 VI 製塙土器(1)

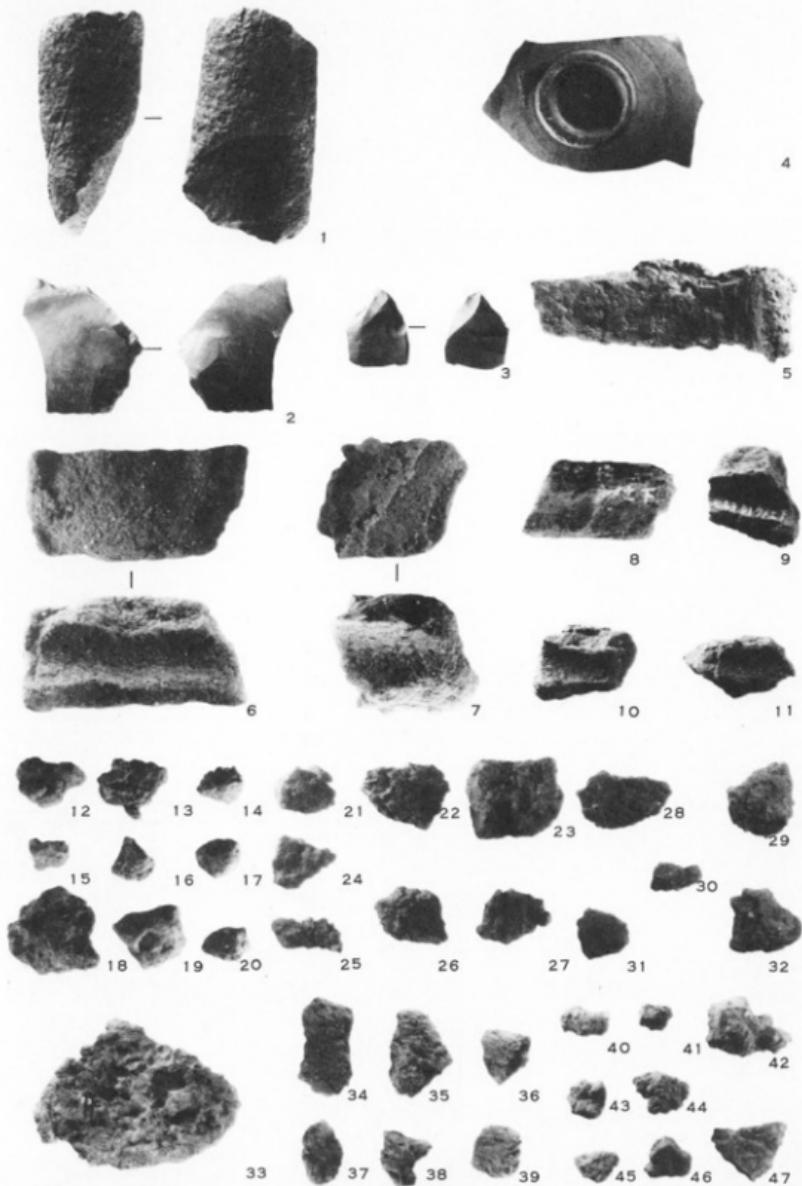


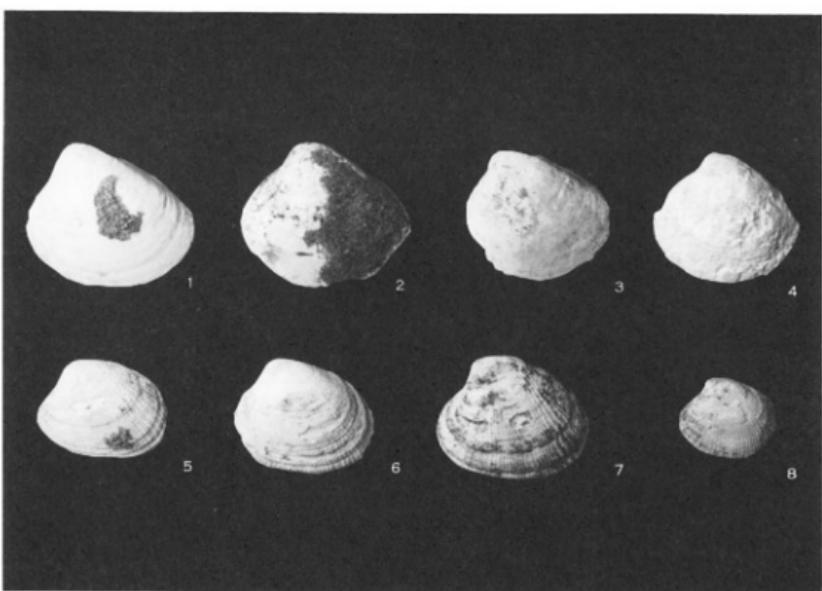
圖版一三 遺物 VII
製塙土器 (2)



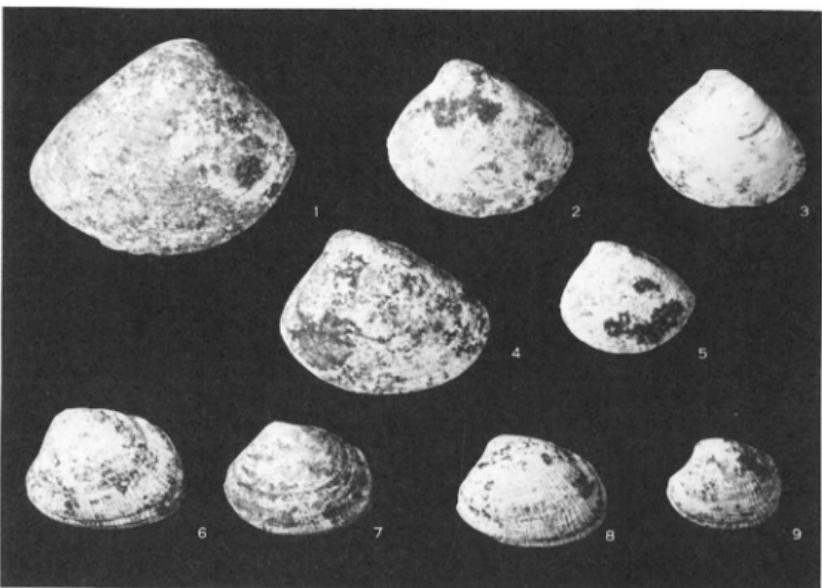
図版一四 遺物

石器・縄釉陶器・鉄器・羽口(六~一)・鉄滓(二~三)四七

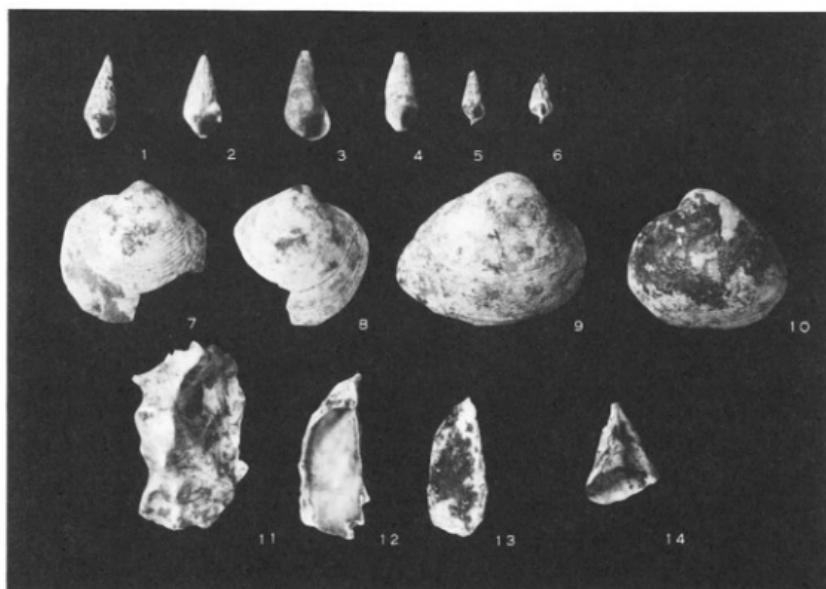




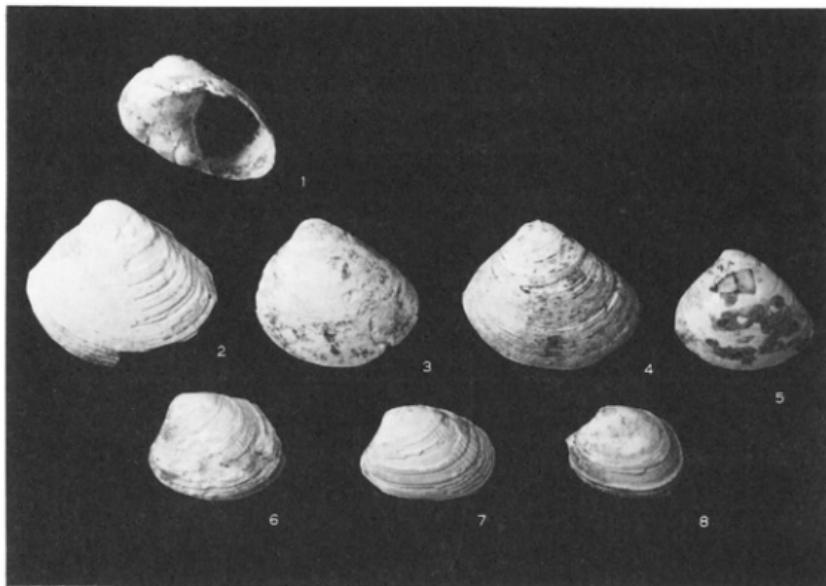
鬼ノ神山第1貝塚 1~4:ハマグリ, 5~8:アサリ



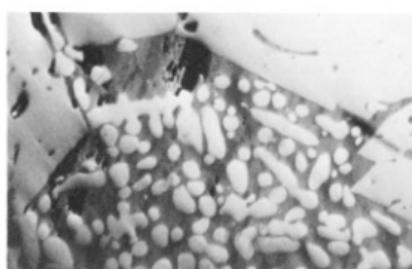
鬼ノ神山第3貝塚 1~5:ハマグリ, 6~9:アサリ



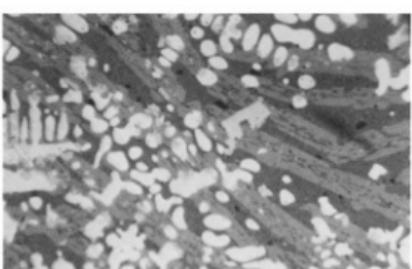
鬼ノ神山第3貝塚 1~6:ウミニナ, 7~8:オキシジミ, 9~10:シオフキ, 11~14:マガキ



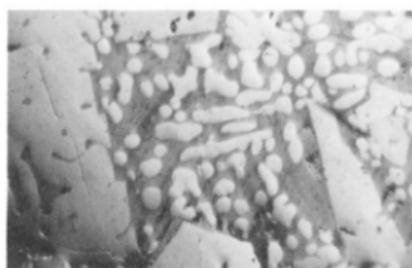
鬼ノ神山第5貝塚 1:ホンヤツメタガイ, 2~5:ハマグリ, 6~8:アサリ



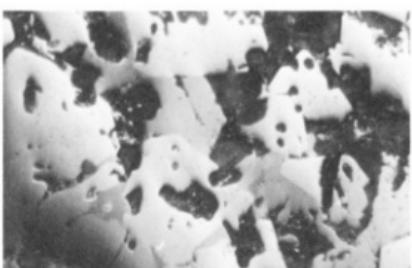
KF-1-a



KF-1-b



KF-1-c



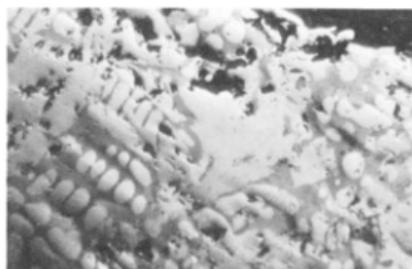
KF-1-d



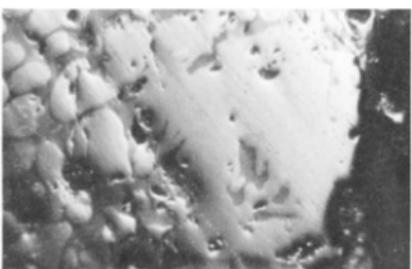
KF-2-a



KF-2-b



KF-3-a



KF-3-b

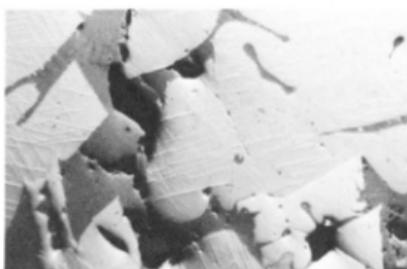
図版一八 鉄滓の鉱物顕微鏡組織 II (X500)



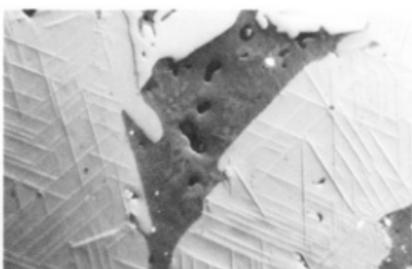
KF-4-a



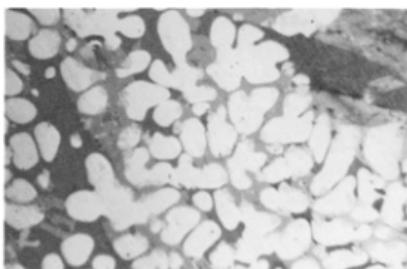
KF-4-b



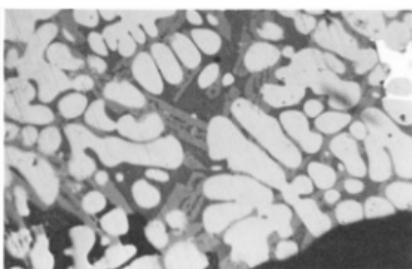
KF-4-c



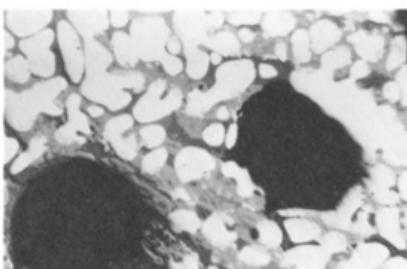
KF-4-d



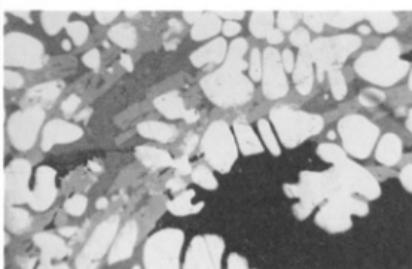
KF-5-a



KF-5-b



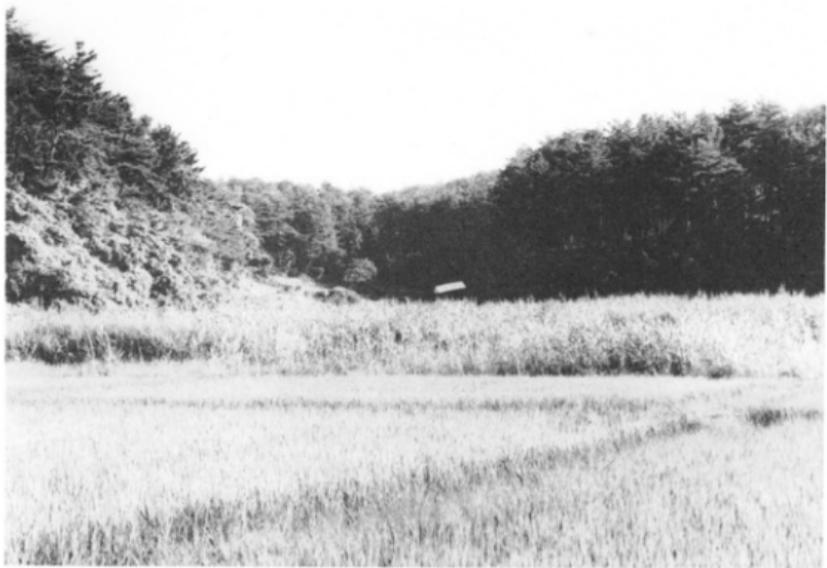
KF-5-c



KF-5-d



遠景



近景

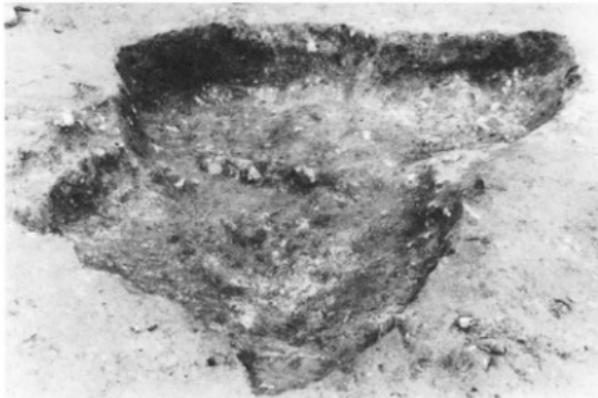
図版二〇 野山遺跡発掘区全景



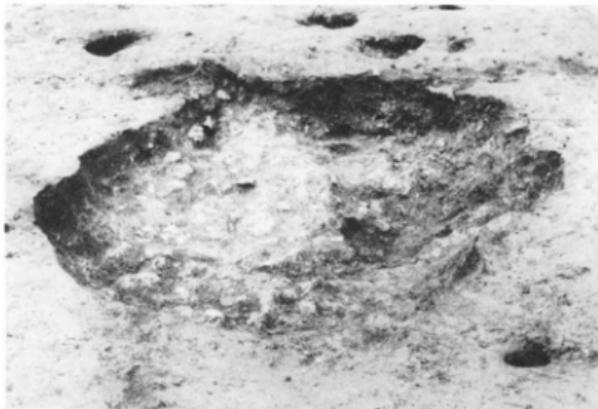
南西から望む



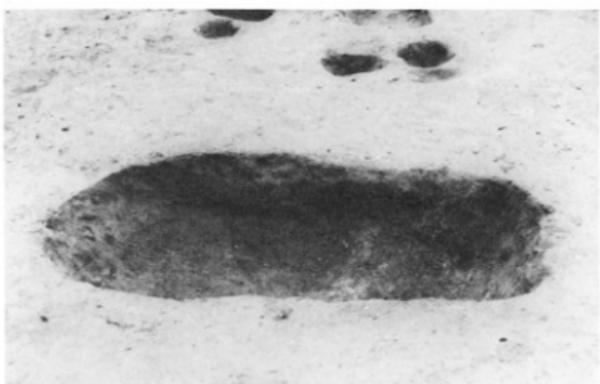
土坑 1 (北西から)



土坑 2 (南西から)



土坑 4 (南東から)



土坑5（北東から）



土坑6（南西から）



土坑7（西から）



土坑8（東から）



C4区集石（北東から）



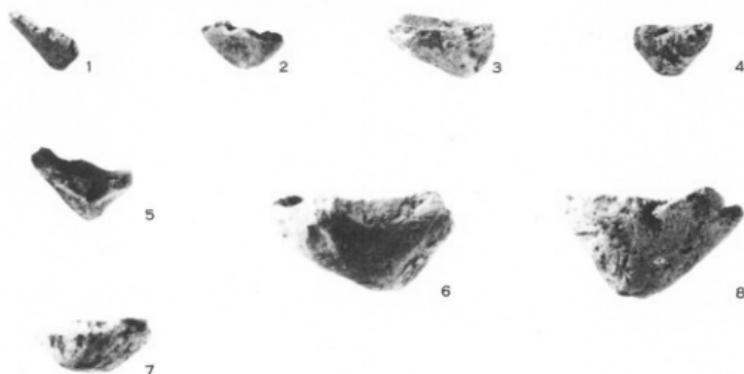
F4区岩石の表出
(南西から)



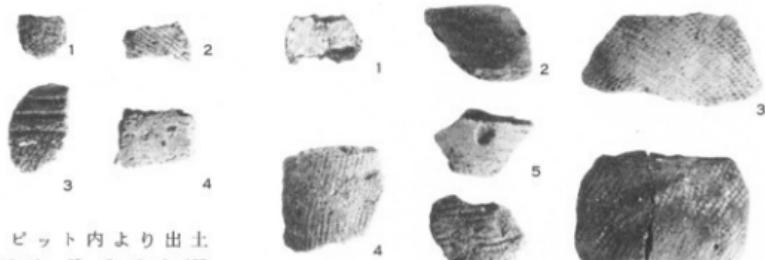
a 遺物出土状況 G 1 区 床面



土坑 1 内



b 製塩土器底部 (%)



c ピット内より出土
1. ピット 62 3. ピット 182
2. ピット 151 4. ピット 151
0 10CM

d 第 III 層より出土



1



2



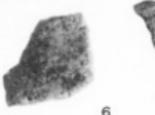
3



4



5



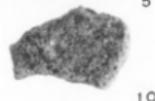
6



7



8



10



11



12



13

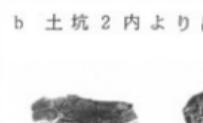
14

14

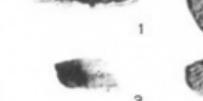
a 土坑 1 内より出土



1



2



3

4

b 土坑 2 内より出土

c 土坑 5 内より出土



1



2



3



1



2



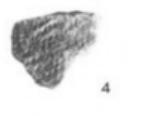
5



6



7



4

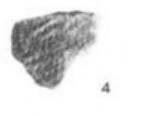


5

d 土坑 6 内より出土



3



4

5

e 土坑 7 内より出土



1



2



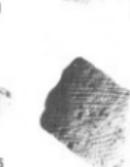
3



4



5



6



7



9



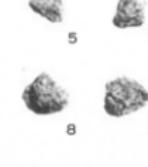
1



2



7



8

9

0

10CM

f 土坑 8 内より出土

g 土坑 9 内より出土



A地区から



南から



東から

七ヶ浜町文化財調査報告書

鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

昭和57年3月31日 発行

発行 宮城県七ヶ浜町教育委員会

(〒985) 宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字舟谷道5-1

TEL 02236(5)6451

印刷 倍平電子印刷所 美術写真印刷研究室
(〒970) 福島県いわき市平北白土字西ノ内13
